

資料

(平成十一年十月)

第四十四回「合宿教室」(富士)感想文集

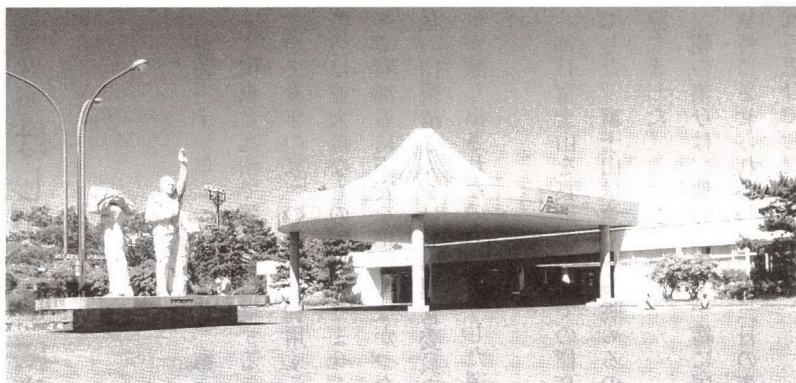
——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会

— “合宿教室” 44年の歩み—

回数	年 度	開催地	参加 人員	主 要 講 師
1	昭和31年	霧 島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福 岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐 賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿 蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲 仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲 仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿 蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲 仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜 島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大 分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲 仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿 蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧 島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿 蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲 仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧 島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿 蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲 仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧 島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿 蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲 仙	332	木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一
23	〃 53年	阿 蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧 島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲 仙	431	福田恆存・法眼晋作・宍辺正久
26	〃 56年	阿 蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧 島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲 仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿 蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿 蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島 原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿 蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島 原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島 原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿 蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚 木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿 蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥富修一
38	〃 5年	厚 木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿 蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚 木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿 蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚 木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村聰一郎
43	〃 10年	阿 蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富 士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
累計・参加人員				12,224名

第四十四回 “合宿教室（富士）” “全参加者の感想文と短歌詠草”



とき 平成十一年八月一日（日）から五日（木）まで四泊五日間
 ところ 静岡県・御殿場市・「富士のさと国立中央青年の家」
 参加総数 一七八名

目次

”はしがき“に代へて	理事長・上村和男	2
大学別参加者数・その他の人数の内訳		5
”合宿教室“の日程表（四泊五日）		6
第44回”合宿教室“のあらまし		7
感想文と第三回目的”短歌詠草“	参加者全員	25
短歌詠草	参加者全員	81
あとがき		108
カメラ・レポート26枚（27ページから77ページの左頁に掲載）		

”はしがき“に代へて

上村和男

(本会理事長・株千代田コンサルタント相談役)

昭和三十一年(一九五六年)第一回の合宿教室が霧島で開催され、今年で第四十四回になります。第三十六回の合宿教室から、関東と九州で隔年に開催することになり、関東に於ける開催は、今年で五回目に当ります。今回、静岡県御殿場市の「国立中央青年の家」の施設を利用することとなりましたが、御殿場の施設はたいへん広く、宿舍が点在してゐたので、指揮班の苦勞は並大抵なものではありませんでした。大日方学指揮班長のもと、指揮班の方々が勞を厭はず動き廻り、適切な指示を与へて参加者に不安を抱かせなかつたことが、合宿運営をスムーズに進めることになったのだと思ひます。併せて合宿運営委員長の山根清さんをはじめ運営委員の方々のご苦勞に感謝致します。「講師と参加者」が一体となり、祖国のことを考へる雰囲気醸し出されたのも、かうした運営体制に依る所が大きいと思ひます。

毎日富士山を真近に仰いで標高七〇〇米の場所で、都会の猛暑続きをよそに、涼しい快適な四泊五日の実りある合宿教室でした。富士山は遠くから眺めるのもすばらしい景色ですが、真近に赤肌の富士を仰ぎ見るのも雄大な心持にさせられ迫力を感じました。

朝の集ひは、他の団体と一緒に国旗掲揚・国歌「君が代」の斉唱・体操と、富士山を仰ぎつ、なごやかな雰囲気ですっきりとした。朝の集ひは、他の団体と一緒に国旗掲揚・国歌「君が代」の斉唱・体操と、富士山を仰ぎつ、なごやかな雰囲気ですっきりとした。第三日の夜の慰霊祭も富士山の裾野に抱かれ、夜空の星を仰ぎつ、厳粛に行なはれ参加者の心が洗はれる思ひでした。

参加者(総人数一七八名)は都会生活から解放され、久しぶりに大自然のもと、学問・人生・祖国を心ゆくまで語り合ひました。お招き申し上げた講師としては、第二日目の午前から、拓殖大学日本文化研究所長の井尻千男先生に「アメリカニズ

ムとどう戦ふか―市場原理と共同体原理の大激突」と題してご講義を頂きました。グローバリゼーションは共同体原理を破壊すると警鐘を鳴らされ、市場原理が共同体原理と重なってゐる時は自由競争はうまくゆき、それが段々と離れて行くと自由主義社会は成立しないと力説されました。参加者の質疑にも丁寧にお答へを頂き、すばらしいご講義でした。合宿教室にははじめてのご出講でしたが、幾度もご出講頂いた、今は亡き村松剛先生に師事されたことなどお話し頂きました。第三日目の午前に、埼玉大学教授長谷川三千子先生が「国体の思想」と題して、日本の政体は君主（天皇）が、蒼生（国民）の安寧（やすらかに生活すること）を第一とし、国民も君主を敬慕し君民一体の政治が行なはれて来たことを歴史的事実に基づいてご講義されました。皇室を中心として生きて来た我が国の姿のあり方を平易に話され、日本における天皇のご存在について参加者は理解を深めることが出来ました。参加者の質疑にも親切にかつ明快にお答へ下さり、先生の祖国についての思ひは参加者一人一人に深い感銘を与えました。第四日目は、歌人で「古事記」研究の第一人者である亜細亜大学名誉教授の夜久正雄先生に、ご高齢でかつご健康がすぐれないにも拘はらずご出講いただき、「古事記のいのち」についてのご講話をしていただきました。神話と伝説と歴史との関連と違ひをわかり易くお話し頂き、「古事記」について参加者一同はより一層の理解を深めました。そして、それが古典への親しみを感じる大切な機会となりました。

日程が進むに従ひ、参加者は祖国に連なる自分を発見し、話される先生方とそれを聞く参加者の心が一つとなりました。祖国日本のあり方に真剣に取組む心の姿勢が、しつかりと芽生えました。

顧りみれば、去る二月、「合宿教室」の創始者の一人であり、十五年間も本会の副理事長をお勤めになった川井修治先生を、去る六月には、過去四十三回の「合宿教室」に一度もお休みになることのなかった元理事長小田村寅二郎先生を失ひ、会員一同悲しみの中にすぎしました。両先生とも、全生涯を賭して学生・青年の心に祖国日本のあるべき真の姿を示し、青年の心に火を灯し続けて来られました。目に見えぬ両先生のお力に導かれ、すばらしい「合宿教室」となりました。そのご遺志を受け継ぎ、次代の学生・青年に伝へ、祖国日本の再建へ共々に邁進する所存です。

なほ、こゝに編しましたこの「感想文集」は、全参加者が「解散の間際」に走り書きしてくださったものです。紙面の都合上全文をそのまま、載せ得なかつたことは、なにとぞご容赦いただきたいと存じます。この「文集全体の編集」には、十余名の方々（編集後記に記載）が仕事の余暇をさいて取り組んでくださったことを心から感謝致します。

また、最後になりましたが、この合宿事業を行ふに当りまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました得難い御支援の数々に対しまして、会員一同に代り、心から厚く御礼申し上げます。

来年（平成十二年）の「第四十五回合宿教室」は、八月三日（木）～八月七日（月）までの四泊五日間、「熊本県国立阿蘇青年の家」で開催することが決定し、「合宿教室運営委員長」には、中島法律事務所・弁護士の中島繁樹氏（数へ年五十三歳）を煩はすことになりました。改めて会員各位に格段の御協力をよろしく御願ひ申し上げます。

第44回全国学生青年合宿教室



「第44回合宿教室」記念撮影（参加者178名） 於・富士のさと「国立中央青年の家」

参加者

（学生班 四十三大学）（洋数字は参加学生数）

- 東北女子大 4
- 東北女子短大 3
- 東北栄養専 1
- 福島県立医大 1
- 獨協大 1
- 千葉商科大 1
- 麗澤大 1
- 東京大 2
- 東京農大 1
- 東京学芸大 1
- 国立音大 2
- 武蔵野音大 1
- 学習院大 5
- 日本大 2
- 大正大 1
- 亜細亜大 2
- 武蔵工大 1
- 大妻短大 1
- 早稲田大 4
- 慶應大 3
- 帝京大 1
- 明星大 2
- 防衛大 2
- 静岡大 1
- 京都大 1
- 同志社大 1
- 関西大 1
- 大阪外大 1
- 近畿大 1
- 島根大 4
- 北九州大 2
- 九州大 3
- 九州女子大 1
- 福岡大 1
- 福岡工大 1
- 福岡教育大 3
- 九州産業大 1
- 中村学園大 2
- 東筑紫短大 1
- 佐賀大 5
- 長崎大 6
- 長崎県立大 1
- 鹿児島大 1

計 八十一名（うち女子二十四名）

（社会人・教員参加者） 十四名

（招聘講師） 二名（国民文化研究会） 七十名

（事務局） 七名（写真） 一名

（見学参加者） 三名

総計 一七八名

第44回（平成11年）全国学生青年合宿教室日程表

	8月1日(日) 第1日	8月2日(月) 第2日	8月3日(火) 第3日	8月4日(水) 第4日	8月5日(木) 第5日
6:30		(起床)	(起床)	(起床)	(起床)
7:00		洗面・清掃 (7:00)	洗面・清掃 (7:00)	洗面・清掃 (7:00)	洗面・清掃 (7:00)
8:00		朝の集ひ (国旗掲揚、国歌斉唱、体操) 班別散策 朝食 (8:30)	朝の集ひ (国旗掲揚、国歌斉唱、体操) 班別散策 朝食 (8:30)	朝の集ひ (国旗掲揚、国歌斉唱、体操) 班別散策 朝食 (8:30)	朝の集ひ (国旗掲揚、国歌斉唱、体操) 地区別連絡 朝食 (8:30)
9:00		講義 「アメリカニズムと どう戦うかー市場原理 と共同体原理の大激突ー」 知雄大学・日本文化研究所所長 井尻千男先生	講義 「[国体]の思想」 埼玉大学教授 長谷川三千子先生	講義 「日本のくから」 国民文化研究会副理事長 小柳陽太郎先生	合宿を顧みて 合宿運営委員長 山根 清氏 参加者による 全体感想自由発表
10:00		(10:00) (10:10) 質疑応答 (10:40)	(10:00) (10:10) 質疑応答 (10:40)	(10:00) (10:10) 質疑応答 (10:40)	(10:00) (10:10) 感想文執筆 及び 第3回短歌創作 (11:10)
11:00		班別研修 (12:00)	記念写真撮影 班別研修 (12:00)	班別研修 (12:00)	清 掃 昼 食 (12:00か5) 班別懇談 (1:00)
12:00		昼 食 休 憩 (1:00)	昼 食 休 憩 (1:30)	昼 食 休 憩 (1:30)	閉会式 国民文化研究会 副理事長 實藤正久氏 (2:00) 解 散
1:00		短歌創作導入講義 久留米大学附設高校・教諭 名和長泰先生 (2:00)	創作短歌全体批評 熊本市役所・情報企画課 折田豊生先生 (2:30)	講 話 「古事記のいのち」 亜細亜大学名誉教授 夜久正雄先生 (2:30)	
2:00		リクリエーション 富士宮口新五合目からの ハイキング	第一回班別 短歌相互批評	第二回 班別輪読	
3:00	(3:00) 開会式 (挨拶) 国民文化研究会・理事長 上村和男氏				
4:00	オリエンテーション 合宿運営委員長 山根 清氏 合宿指揮班長 大日方 学氏 (4:30)	第一回短歌創作		第二回短歌創作	
5:00	班別自己紹介				
6:00	夕 食 入 浴	夕 食 入 浴	夕 食 入 浴	夕 食 入 浴	
7:00					
8:00	合宿導入講義 「合宿教室の目指すもの」 国民文化研究会 事務局長 山口秀範先生	輪読導入講義 「古事記一倭建命」 昭和音楽大学・講師 国武志彦先生	青年体験発表 奥志門塾講師 三林浩行氏 アサヒ数科塾 澤部和道氏 (8:10) 講話 「ピルマでの死線を越えて」 院長 医師 島本崇秀先生 (8:30) 歌謡祭の説明 神奈川県立厚木高等学校教諭 山内健生先生 (9:00)	第二回班別 短歌相互批評	
9:00					
10:00	班別研修	第一回 班別輪読	慰靈祭 班別懇談	夜の集ひ	
	(10:30) 就 床 消 灯	(10:30) 就 床 消 灯	(10:30) 就 床 消 灯	(10:30) 就 床 消 灯	

第四十四回 “合宿教室” のあらまし

第一目

(八月一日・日曜日)

第四十四回全国学生青年合宿教室は、静岡県御殿場市「富士のさと国立中央青年の家」において開催された。ここでの合宿教室開催は初めてであったが、広々とした御殿場の地に、施設は木々の緑に囲まれ、そこからのながめは、霊峰富士の姿を間近に仰ぐ雄大なものである。全国各地から集ひ来た参加者は、入口に張られた「友よと呼べば友は来たりぬ！」の横断幕に迎へられた。参加者は受付を済ませると、ただちに宿泊棟の各教室に入り、初めて会った班員たちと挨拶を交はして、開会式に臨んだ。

開会式

麗澤大学四年・鈴木良登君の開会宣言の後、主催者を代表して本会理事長・上村和男氏は、ご自身の合宿参加経験を顧みて「当初は、生命体として国をとらへるといふことがなかなか理解できなかった。合宿参加を続け、学ぶ中で少しづつ見えてきた。皆さんもわからない問題を大切に心に抱いて生きていってほしい」と語られた。

続いて、参加者を代表して帝京大学四年・横畑雄基君が「皆さんと共に歴史を学び、現代の問題を考へたい」と挨拶した。次に、合宿運営委員長・山根清氏は「合宿の趣旨は心を開いて語り合ふといふ点につきる。出会ひを大切にして心を通はせ、

富士山のやうにはればれと過したい」と語られた。

合宿導入講義 「合宿教室の目指すもの」

国民文化研究会事務局長 山口 秀 範 先生



先生はまづ大成建設勤務時代、任地ナイジェリアの大きな満月を詠まれた短歌を紹介され、万葉集阿倍仲麻呂の短歌を偲ばれて、「月を見たことよって故郷を思ひ出す、友達を思ひ出すといふことの切実さをこの歌を通してしみじみと思ひました」と述べられた。シカゴでは先生は新規建設プロジェクトにおいて、半年にわたる交渉の末、一度は振り出しに戻されながらも契約に漕ぎ着けられた体験を話され、その時の自詠を紹介されて、川出麻須美の「墓碑銘の歌」を偲ばれて、「私にとつて、あるいは諸君にとつても、歌は生き方そのものであつて欲しいと思ふのです」と強く述べられた。

最後に先生は「私にとつて忘れられない衝撃は、帰国した私が見た日本の子供達の顔色が悪かったことです。それは我々大人達が、子供達が顔を輝かせるやうな教育を行つてこなかったからです。しかし諸君はそれを大人のせむにする歳ではもうありません。今の日本がをかしいとしたら、諸君の力でそこから始めること。それが日本の生き方だと思ひます。小田村先生はこの合宿を四十三年間、その思ひだけでやつてこられました。それを我々はなんとか受け継ぎたいと思つてゐるのです」と切々と訴へられてご講義を終へられた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義について班別研修を行った。まづ皆で講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかったこと、重要なことは何かを話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて、話し合ひが進められた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後に行はれていった。お互ひに初対面のせむか、最初は緊張して意見も少なく、発言も限られてゐたが、班員がお互

ひに打ち解けるに従ひ、次第に討論も活発となり、時には反論し、時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流が深められていった。

第二日目

(八月二日・月曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。今合宿の「朝の集ひ」は、「青年の家」の合同の朝の集ひに参加するといふ形で、他団体と共に行はれた。すがすがしい空気の中、国旗掲揚の後、体操を行つて、一日の研修を新たに迎へた。

講義 「アメリカニズムとどう戦ふか ——市場原理と共同体原理の大激突——」

拓殖大学日本文化研究所長 井尻 千男 先生



「グローバル・エコノミー」とか「グローバルイズム」といふのは、「地球儀を抱きかかへてゐる」やうなアメリカにこそ相応しいが、正反対の世界観を持つ日本が、その資格もないのにアメリカと同じやうな事を言つてゐる、といふのが私の基本的認識であると述べられた後、アメリカの現在の過酷なまでの自由主義が生れた所以について、「一九六〇年代の“公民権運動”によるあらゆるマイノリティの反乱が、米国内で民族間の覇権争ひをひき起こし、ならば市場で決着をつけようではないか、とアメリカは考へた。ポーターレスと言ふ言葉に日本人が読みとらねばならないのは、国内抗争をしてきたアメリカのさうした考へ方が裏側に映つてゐるといふことだ」と我々の注意を喚起された。

更に先生は、「国民・市民」と対比して「消費者」(共同体に帰属しないで、マーケットの価格に敏感に反応する人々)に触れた後、「自生的社会秩序」(ハイエク)を前提に市場原理が重なつてゐれば自由主義は機能するが、八〇年代にその基盤にズレが起こり、共同体原理と市場原理との関係が調和から対立へと移つた。それが今の局面であると言及された。

その後、マックス・ウェーバーの『古代ユダヤ教』に触れながら、ユダヤ資本がバリーヤ資本（共同体に属さず移動する資本）であること、又その由来について「旧約聖書・申命記」に言及され、そこにユダヤ人の共同体と市場に関するダブルスタンダードがあり、この二重基準を持たない民族は亡ぶと強調された。そして最後に、「活力あるマーケットは活力ある人間がつくる。マーケット以外の原理をどれだけ持ちうるか。ここに心を留めてどう生きるべきか考へてほしい」と訴へてご講義を終へられた。

短歌創作導入講義

「短歌創作を通じて広がる共感の世界」

久留米大学附設高校教諭

名和長泰先生



かつてこの合宿教室で知合ったのを契機に、先生は遠方の方と短歌を作り合ひ、交信をされ始めた。互ひの一語一語をも大事にする「心の交流」「共感の世界」を持った経験は、教師生活の「大きな励み」となったが、その先生自身の教へるクラスではグループに入れない「孤独な生徒」や、二年近く経っても同級生の顔と名前も一致しない者がゐた。生徒同士のつながりの希薄さに「愕然と」された先生は、修学旅行中に生徒・担任全員による『創作和歌集』を出す。生徒も始めは負担だったが、次第に「好評」となり、「十年以上経った今も大切に保存する生徒も」ゐる。「自身の切実な体験を正確に伝える努力」が和歌へと結実すれば、友らとの「広がる共感の世界」を作っていける。短歌による人との付合ひの真価を、創作上の留意点等を交へながら先生は懇切に説かれていった。

レクリエーション

講義後、参加者は、二台のバスに分乗して、富士登山に出発した。バスで五合目まで行き、そこから宝永火口を見下ろして戻ってくるコースを散策の予定であったが、突然の雨のため、残念ながら予定を変更し、引き返すこととなった。その代わり、翌日の昼食後、綱引き大会が実施され、楽しいひとときを過ごした。

輪読導入講義 「古事記―倭建命」

昭和音楽大学講師 國 武 忠 彦 先生



先生は、平塚江南高校校長であられた昨年、日本史を教へたオーストラリアの留学生が、古事記の物語を「面白い、楽しい」と大変興味を持ってくれたことから、古事記を教へると日本の歴史が大変分かりやすくなると語られ、早速、本論にはいられた。そして、本居宣長の言葉を引用されながら、古事記が、支那文化全盛の時代に、日本の正しい歴史と言葉が減びることを哀しまれた天武天皇によって企画され、稗田阿礼により伝へられ、三十余年後、その意志を継承された元明天皇の命により、才能豊かな太安万侶の苦心惨憺の努力があつて初めて出来た希有の書であることを語られた。続いて、古事記の倭建の命のくだりを心をこめて誦み味はれながら、丁寧に分かりやすく解説していかれた。

特に、弟橘比売の命が皇子のために走水の海に入水されるくだりでは、合宿導入講義で紹介された皇后様の御講演に触れられ、「さねさし相模の小野」の御歌について、「むごい運命を自ら担はれながら恐らくは生涯で最も愛と感謝に満ちた瞬間の思ひ」を歌った歌と語られ、愛と犠牲が一つのもの感じられたといふ皇后様の御心を思はれながら語られた。

そして、よく誦み味はって欲しいと訴へられてご講義を終へられた。

講義の後、参加者は各班に分かれて輪読研修を行った。國武先生のご講義を振り返りながら、紹介された古事記の文章を、皆で声に出して読み味はついていた。古代の人たちの思想や息吹を直接感じることのできるひとときであった。

第三日目

(八月三日・火曜日)

講義 「国体」の思想

埼玉大学教授 長谷川 三千子 先生



先生は、まづ「国体」といふ言葉については余りにも間違った考へ方が流布してをり、この講義ではこの言葉から我々が学ぶべき真髓を取り出すための手がかりを話してみたいと述べられた。

先生はその手がかりとして、まづ幕末の後期水戸学の第一人者藤田東湖の『弘道館記述義』を紹介された。その中で「宝祚之を以て無窮」「国体之を以て尊嚴」「蒼生之を以て安寧」「蛮夷戎狄之を以て率服す」の四つが「国体」を考へる上で大事なポイントであるとされ、特に東湖が「蒼生之を以て安寧」の解説の中で、天皇は国を治めるにあたって伝統的に「蒼生」つまり人民の安寧を最大の目的とされてきたことを述べてゐるところを詳しく紹介され、東湖はこれこそ日本の国体の特色として誇るに足るものかと考へてゐたとみてよいと述べられた。

さらに『日本書紀』に書かれてゐる仁徳天皇の国見のエピソードを紹介しながら、当時、すでに人民を本もととすることが代々の天皇において伝統として引き継がれる思想となつてゐたことを指摘された。そしてその伝統が現代にも引き継がれてゐることを大東亜戦争の「開戦の詔書」「終戦の詔書」によって示された。

さらに藤田東湖の触れてゐない「国体」の思想の特色として、天皇の犠牲において民の安寧がはかられるといふ点を昭和天

皇の終戦時の御製を紹介しながら述べられた。

最後に丸山真男の文章に述べられてゐる「国体」に対する歪んだイメージが今なほ日本人の「国体」に対する理解となつてゐることを指摘され、この誤解を解くには、今見てきたやうに歴史に立ち戻つて我々自身の目で日本の国体をもう一度再発見することが大事である、と述べてご講義を終へられた。

創作短歌全体批評

熊本市役所 折田 豊 生 先生



先生は、刷り上げられたばかりの二百首からなる歌稿の中から約二十首を選び、作者の気持ちを推し量りながら丁寧に添削してゆかれた。御講義は時に笑ひの起こる場面があつたり、皆で作者の思ひに心を寄せたり、秀歌を味はつたりと会場一体となり和やかな雰囲気の中で進んだ。そして、相互批評の際の留意点を述べられた後、「合宿を終へた後も短歌の勉強をしてみらひたい。中でも一敷島の道——我々が先祖代々大事にしてきたのは、そこにまごころが込められてゐる歌を通じ言葉をや取りし磨き合ふ、その敷島の道を心掛けてもらひたい」と語られ、「そのためには友に手紙を書きその中に一

首添へるのが一番良い。理想は手紙の上で相互批評を行ふことです」と強く勧められた。

班別短歌相互批評

全体批評の後、各班に分かれて短歌相互批評が行はれた。歌をつくつたのは初めてといふ参加者が多かつたが、皆、一人ひとりの歌に心を寄せて、作者の思ひに沿つた正確な表現を求めて心を砕いていった。人の思ひを正確に受け止めること、自分の気持ちを伝えることが如何に難

しいかを実感させられたが、お互ひの心が通ひ合ふ充実したひとときであった。

青年体験発表

最初に、岐阜県で学習塾の講師をされてゐる三林浩行氏が登壇された。氏は、日本のために身を削り、時には命を捧げ、奮闘した人物を学んでいくにつれ、日本の国に対する愛情が湧き、さういふ人達のお蔭で今日の日本があることを知り、日本の国の為になにかをしようといふ内発的な気持ちが起こってきたことを語られた。同様の体験を味はってほしいといふことで、高校生や社会人を対象に、人物歴史講座を学習塾で実践されてゐることを話された。続いて、幕末の激動の中での吉田松陰のやむにやまれぬ憂国の行動と、その死後に、松陰の精神を受け継いで高杉晋作らが奮起していく有様を語られた。そして、現状の日本に於ても、松陰の草莽崛起の志を私達は受け継いで行かなくてはならないのではないだらうかと、情熱をこめて訴へられた。

次に、アサヒ飲料(株)の澤部和道氏が登壇された。最初に、氏は自信を持って会社の製品を販売できるやうになるまでの営業活動の体験を語られた。続いて、学生時代、東京の正大寮で先輩に導かれて講孟余話の輪読を始めたこと、その文章を通して、日本を思ひ、囚人と共に学ぶ生き生きとした吉田松陰の真摯な生き様に触れることができた喜びを話された。特に、「至誠にして動かざるもの未だこれあらざるなり」といふ言葉に感銘を受け、社会生活での励みとされてゐることを語られた。素晴らしい生き方をされた先人の姿に学ぶことは、日本の国柄や良さを知ることになり、誇りを持って日本を語ることもできるのではないかと、力強く語られた。



市ヶ谷漢方クリニック院長 桑木崇秀先生



先生は、大東亜戦争でインパール作戦に参加された。作戦が緻密性を欠き、物量の差も大きかったため、悲惨な結果となった。マラリア、アメーバ赤痢、栄養失調の三つの病気になる者が続出した。陸軍病院入院中、バーキル博士の『ビルマの薬用植物』なる本を入手、夢中で翻訳し、それを前線に持って行き、現地の僧侶に植物について教はりながら、必死で鉄カブトで葉草をついて薬を作り、苦しむ兵士達に飲ませた。それが漢方を志す契機となった、と先生は語られた。

慰霊祭



慰霊祭に先立ち、神奈川県立厚木南高校教諭の山内健生氏が、慰霊祭の意義と祭次第について説明された。

その後、合宿教室の全参加者は、屋外の齋庭（ゆには）に整列した。まづ、長内俊平先生（本会常務理事）が、お祓ひに代へて三井甲之先生の和歌を朗詠され、慰霊祭は開始された。次に警蹕^{ひび}の声の響く中、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた、すべての祖先の御霊を最敬礼でお迎へする降神の儀が行はれた。参加者一同を代表して、小野吉宣氏（本会理事）が祭文を奏上され、次いで、松吉基順先生（本会監事）によって御製拝誦が行はれた。続いて、上村和男先生（本会理事）の玉串奉奠と共に御霊に対し一同拝礼の後、「海ゆかば」を全員で斉唱した。最後に昇神の儀が行はれ、最敬礼のもと御霊をお送り申し上げ、慰霊

祭は滞りなく終了した。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

祭文

ここ 靈峰富士の裾野の広ごれる高原の中 国立中央青年の家に集へる社団法人国民文化研究会理事長上村和男をはじめ我ら 第四十四回全国国学生青年合宿教室を営みて 三日目の夜を迎へぬ

今し 天つ日はかくろひ高原にそよ風吹きて 星影近き合宿地の清しき広庭を 齋庭ゆにはと定めまつりて

とこしへにみ國守ります遠つみ祖達をはじめ み國の為に悲しき生命を捧げ 尊きみ國を守りましし もろもろのはらからのみ靈を招まぎまつり なくさめまつらむと み魂祭りを仕へまつらむとす

顧みれば 昭和天皇の 御聖断を仰ぎ戦火をさまりて後 混迷を極めたる時代に 故小田村寅二郎大人の命を先頭に日本國民としての「大道」を求め 「祖國日本」の真正なる独立を果たさむと合宿教室を営み はや四十あまり四つの回を重ねたり

しかれども 政治・経済 更に教育・マスコミの各界の混迷いよいよ深まり 國民の深き憂ひとなれり

この美はしきやまとしまねの内・外に みつるまがごとのことごとを 力の限り打ち払はんと ここに謹みて祈りまつらんと告げまつらむ

われらは 井尻千男・長谷川三千子両先生をはじめとする諸先生の御講義に 古事記の輪読に はたまた短歌の創作に心を開き心をかたむけ語りかはし 汝いまし相おやたちの尊き名言葉を学び おのおのものが文化防衛の戦士となりて 祖國日本をとことばに榮えゆかしめむと誓ひまつらむ

天がけるみ祖のみたまよ 願はくば われらのゆくてをまもらせ給へと 第四十四回合宿教室参加者一同に代り 小野
吉宣謹み敬ひ恐みも曰す

平成十一年八月三日

御製拝誦

明治天皇御製

神祇

神垣に朝まゐりしていのるかな國と民とのやすからむ世を

をりにふれて

久方のあめにのぼれるこちしていすずの宮にまゐるけふかな

をりにふれて

國のためうせにし人を思ふがなくれゆく秋の空をながめて

神祇

めにみえぬかみの心に通ふこそひとの心のまことなりけれ

虫声非一

さまざまの虫のこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは

昭和天皇御製

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも
身はいかにもいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

稚内公園

樺太に命をすてしたをやめの心を思へばむねせまりくる

祭り

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

今上天皇御製

沖繩平和祈念堂前

激しかりし戦場の跡眺むれば平らけき海その果てに見ゆ

硫黄島

精魂を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき

第四日目

(八月四日・水曜日)

講義 「君臣の情 ―日本の歴史を貫く『まごころ』の世界―」

平成十一年八月三日 謹選 松吉 基順



先生は天皇と国民との間にどのやうな情感が交はされてきたかといふ事実を、私達の目と心でしっかりと受け止めて欲しいと強調された。

幕末動乱の最中、孝明天皇から將軍家茂に賜った宸翰を紹介され、お二人の間に正に親子の情愛といふべき関係があったからこそ、日本は内憂外患の時代を切り抜けられたと語られ、孝明天皇の次の御製を紹介された。

澄ましえぬ水にわが身は沈むともにごしはせしなよろづ国民

身を捨てて国民を救ひたいといふお気持ちで生きてをられたといふことを当時の国民が知り、天皇に何とかお応へしたいといふ気持ちが澎湃として全国に漲ったといふ。

先生は、明治時代、政治の中心的存在となった三条実美が孝明天皇にお叱りを受け、都落ちしてもなほ天皇をお恨みすることなく、深くお慕ひしたといふ美しい「君臣の情」のお話をされた。

長谷川先生も引用された昭和天皇の終戦時の御製についても、身を捨てて国を守るといふお気持ちは、孝明天皇のお気持ちと全く同じものであると。

先生は下村海南著『終戦秘史』の、御前会議で陛下の終戦のご聖断をお聞きした総理大臣以下の涙ながらの模様を伝へた箇所を引用され、これが戦後のスタートであった、皆の心が一つになったといふ事実があったからこそ戦後の復興があったと語られた。今上天皇は皇太子の頃から「象徴としての天皇」について深く考へて来られて、「国民の悲しみを国民と共に味はふのが象徴だ」とおっしゃったと述べられた。

副題の「日本の歴史を貫く『まごころ』の世界」について、日本は天皇といふご存在によって「まごころ」が一筋に守り伝えられてゐる、皆さんは天皇のお気持ちを お惚びして生きて頂きたいと話を結ばれた。



先生は、まづ最近岩波文庫から出た『王書』と『古事記』とを比較されながら話をはじめられた。そして神話（神々の話）、英雄伝説（神々と英雄との共存の物語）、歴史（人の世の物語）の三部構成として区別しながら連続させて書きあげた建国の物語『古事記』の作者の知恵の意味合ひについてお述べになられた。そして、中国、インドよりアジア、西欧に渉る「歴史」の著はされ方を『古事記』と比較されて、「歴史的事実」かどうかだけで神話、英雄伝説を考へる間違ひ（「神話」と「歴史」の混同）を指摘された。次に先生は、「古事記」の言葉（本居宣長が天武天皇が作られた時の言葉で読めるやうにしたもの）に打たれた、とご心境を披瀝されて実際に感情を込めて読み始められた。そして「妾、御子に易りて海の中に入らむ。御子は遣さえし政逐げて覆奏をしましたまはね」との弟橘比売の命の御言葉を本当に美しいと思ふ、と言はれて御解説下さった。次に、稗田阿礼が天武天皇より誦み習はれた言葉がわかり、それにより感ずるものがあるといふことは、千三百数十年前の人の気持ちがこの私に通じてくるといふことで、これが「古事記のいのち」なのです、と述べられた。最後に「皆さん是非『古事記』を読んで下さい」と言はれて、ご講話を終へられた。

第二回短歌創作・相互批評

夕食をはさんで、第二回短歌創作と班別の相互批評が行はれた。参加者の歌もさすがに二回目となると、自分の思ひを素直に表現した素晴らしいものが多く、相互批評でも相手の気持ちを良く味はひながら言葉を求めてゆくといった話し合ひが行はれ、お互ひの気持ちを通ひ合ふなごやかなひとときとなった。

夜の集ひ

厳しい日程を送ってきた合宿教室も最後の夜を迎へ、「夜の集ひ」は屋外でのキャンプファイヤーとなった。各班ごとの様々に趣向を凝らした出し物に合宿参加者はひとときの楽しい時間を過ごした。

第五日目

(八月五日・木曜日)

合宿を顧みて

合宿運営委員長 山根 清氏



氏はまづ、われわれの霊峰富士を仰ぐ気持ちは祖先と同じであり、古事記の言葉に感動するのも古人の人生観に通ふものであると述べ、「私達は確かに自分を日本人であると実感しました」と話された。更に、外来文化との交流接触の歴史を偲び、その中に連綿と受け継がれた「ことば」こそ固有文化そのものであると指摘され、全員で詠んだ短歌の世界を讃へられた。

そして終戦の御聖断に思ひを馳せ、私達が防衛すべきものは、「日本の国柄」つまり君臣に通ひ合ふ情そのものではないかと訴へられた。

最後に、今後の互ひの交流を望み、合宿を支へて頂いた方々、中でも亡き小田村寅二郎先生に感謝申し上げると締めくくられた。

全体感想自由発表

続いて四泊五日を振り返って思ひのたけを発表する時間に移った。

「六年前から参加してゐるが、当初の反発は消え、合宿での付き合ひや言葉のやりとりが今は無性に好きだ」「内容についてゆけないと嘆く友に涙ながらに話す班長の姿や、相互批評で班が一つになれたことで、他者に没入してゆく世界を感じた」「初日に帰りたいだったが、叱責や励ましのお蔭で理解がすすみ、今では日本の言葉ってこんなに美しいものかと思ひ、短期間で成長した自分に驚いてゐる」などの感想に続き、壇上で自分の和歌を朗詠する者もあった。「読書の中で普段は肩に力が入りすぎてゐた。むしろ己が身を抛つてでも愛する人を守らうとする素朴な感情こそが大事であると感じた」「この合宿は小田村先生の遺志を継ぐものと感じた。今後は知識と実感の一体化が目標である」など紹介し切れない程の心こもる所懐が披露され、一同感銘を新たにした。

閉会式

参加者を代表して福岡教育大学教育学部二年の小林国平君が、「日本や古典の良さを実感しました。そして、御製や皇后陛下のお言葉に接し、両陛下の思ひがひしひしと心に響き、胸があつくになりました。今の気持ちを忘れずに、多くの友と来年も会ひたい」と。続いて主催者を代表し、国民文化研究会副理事長の宝辺正久先生が、「素晴らしい日本の国柄、国を尊重する心の大切さに気付き、その心をお互ひに歌に詠み交はして、励まし合ひ交流を続けていませう」と挨拶された。防衛大学人文社会科学部四年の清水洋平君が閉会を宣言し、合宿教室全日程の幕が閉ぢられた。

助言者の紹介

(株)千代田コンサルタント 相談役	上村 和男	元・法政大学 人事部長	香川 亮二
(株)宝辺商店 代表取締役会長	宝辺 正久	舞岡八幡宮 宮司	關 正臣
元・九州造形短期大学 教授	小柳太陽 太郎	前・高千穂科科大学 教授	名越一荒之助
元・(社)国民文化研究会 事務局長	長内 俊平	元・佐賀県立佐賀商業高校 教諭	末次 祐司
(学)拓殖大学 総長	小田村四郎	元・浄土真宗本願寺派 沼田組光隆寺 僧侶	岡棟 猛
昭和音楽大学 講師	國武 忠彦	元・サンデン交通(株) 取締役	加藤 善之
日本インドネシア・エル・エヌ・ジー(株)取締役	澤部 壽孫	(社)国民文化研究会 会員	島村 善子
新日本製鐵(株)プラント事業部次長(嘱託)	今林 賢郁	乃木神社 宮司	松吉 宣和
講談社 資料センター室長	磯貝 保博	川崎重工(株) 破砕機事業部 参与	山本 博資
(株)竹中工務店 C M本部 部長	稲津利比古	小田原市立下曾我小学校 校長	岩越 豊雄
神奈川県立厚木南高校 教諭	山内 健生	新潟工科大学 工学部建築学科 教授	大岡 弘
福岡県立嘉穂高校 教諭	小野 吉宣	神奈川県立小田原城内高校(定時制) 教諭	原川 猛雄
中島法律事務所 弁護士	中島 繁樹	富士通(株) マーケティング本部	浜田 實
(社)国民文化研究会 事務局長	山口 秀範	山梨医科大学 生化学第一講座 教授	前田秀一郎
熊本市企画調整局 情報企画部 情報企画課	折田 豊生	北海道札幌西陵高校 教諭	本田 格
熊本県立教育センター 指導主事	白濱 裕	伊佐ホームズ(株) 代表取締役社長	伊佐 裕
山口県立下松高校 教諭	宝辺矢太郎	九州大学大学院 数理学研究科 講師	高瀬 正仁
(株)日本興業銀行 証券部 調査課長	小柳志乃夫	久留米大学附設高校 教諭	名和 長泰
(株)中央塩ビ製作所 取締役	星野 貢	海上自衛隊第2術科学校 技術教官室	銚 信弘
不動産鑑定士	松吉 基順	亜細亜大学 総合企画部 広報課	平楨 明人
亜細亜大学 名誉教授	夜久 正雄	福岡県立水産高校 教諭	菅原 亨二
市ヶ谷漢方クリニック 院長	桑木 崇秀	北九州市立医療センター 放射線科技師	森田 仁士
		日産自動車(株) 宇宙航空事業部営業部	内海 勝彦
		広島防衛施設局 施設部 施設企画課 課長	山根 清

羽後信用金庫 川口支店 支店長代理
 (有)つりばし荘 専務
 熊本製粉(株) 住宅事業本部
 南国殖産(株) 経理部 経理課
 福岡県立春日高校 教諭
 日本真空技術(株)
 安信住宅販売(株) 新宿センター 課長代理
 神奈川県立厚木東高校 教諭
 (株)日本教文社 第二編集部
 熊本地方法務局 大津出張所
 (財)千葉県国際交流協会 交流推進課
 (財)世界聖典普及協会 事業部 業務課
 (社)国民文化研究会 会員
 福岡県労働部雇用保険課徴収係
 (社)国民文化研究会 会員
 (株)志門塾 生涯学習部 講師
 日本会議
 日本青年協議会
 日本青年協議会
 新聞記者
 日本青年協議会 学生局 事務局長
 アサヒ飲料(株)マーケティング部商品企画一課
 ギャラリー喫茶 はえゆ

須田 清文	合宿運営本部	山根 清・白濱 裕・小柳志乃夫
大塩 耕三		内海 勝彦
吉村 浩之	指揮班	大日方 学・古川 広治・茅野 輝章
京田 清人		澤部 和道
與島 誠央	事務局	磯貝 保博・徳田 恒稔・秋山 信之
北浜 道		蘇原 幸枝・亀井 正弘
松吉 基光		神奈川県立荏田高校二年 網屋 孝一
大日方 学		横浜市立茅ヶ崎中学校三年 網屋 庄二
坂本 芳明		淑徳中学校三年 飯島 明子
徳田 恒稔		淑徳中学校三年 浜田 怜子
秋山 信之		淑徳中学校三年 大島 一恵
松谷 浩陽	放送・記録班	森田 仁士・松吉 基光
土井 郁磨	医務班	前田秀一郎
古川 広治	写真班	中尾 曜子
清水久仁子	見学者	陸上自衛隊 普通科教導連隊重迫撃砲
三林 浩行		
茅野 輝章		桑木夫人・田中 和子
松岡 篤志		
大葉勢清英		
福田 仁		
鈴木 考将		
澤部 和道		
星野有佳子		

走り書きの感想文集

これは閉会間ぎはの一時余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままで掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第三回目的のものです。



第一班—男子学生—

特に短歌の創作がおもしろかった

(早稲田大学 政経 三年 左近田崇仁)

この合宿教室は「言葉を鍛える」ところであると知人に勧められて参加した。内容はどれも充実したものであったが、私には特に短歌の創作がおもしろかった。短歌をつくるのは初めてのことであったが、班員と長い時間をかけて批評し合うなかで短歌には嘘を詠めぬことを知らされて、まさに「言葉」の大切さを学びました。

そして小柳陽太郎先生の御講義をお聞きして、歴代の御皇室の皆様の歌の持つ意味の深さを改めて実感しました。楽しく学ぶことのできた五日間でした。お世話になった皆様、ありがとうございます。

富士山のふもとに宿舎でよき友とよき師に恵まれ学ぶは楽し

初めて天皇陛下の御心を実感できた

(同志社大学 法 一年 石井一賢)

この合宿で心がけたことは二点あった。一つは新しい仲間との出会いを大切にすること。もう一つは自分の心を閉ざすことなく何にでも新鮮さを感じ驚き、そして自分が感じたことに素直になること。全国各地からの班員と講義を聞き討論をして夜遅くまで語り合ったことは非常に大きな経験となりました。このような仲間とのつながりをこれからも大切にしていきたいと思いました。小柳先生の御講義

に最も感動しました。これまで「天皇」と聞くだけで心を閉ざしていたのですが、今回は初めて心から天皇陛下の御心を実感できました。国民の苦しみをわがことのように受け止め、また国民を信頼される御姿が身近に感じられました。そのような御姿に何とかしておこたえたいと思いました。まごころの通い合う日本文化を自分も受け継いでいきたいと思いました。

友と語り友と学びしこの日々はわが一生の思ひ出にならむ

努力しなければ大切なものは認識できない

(慶応義塾大学 法 二年 斎藤 崇)

人間の性質として怠惰というものがあり、善悪よりも楽な方を選びがちです。従って努力を怠り大切な事を見つめようとせず、自分の狭い視界に入ることしか受け入れられないのです。自分の思想に合わないものは否定することで解決したと思ひ込んでしまいます。しかし大切なものは努力なしには認識できるようになりません。

自分でゼロから大切なものを見つけ出すことは難しい事ですが、我々にはそれを教えて下さる方々がいます。まだ私の考えは貧弱であり、時には楽で単純な思想に傾きがちです。しかし、今回これまで多くの先生や先輩の方々が努力され実践されてきた事を知りました。このことが私の思想の基盤となり、楽なことに流れようとする自分を引きとどめる力になると思ひます。

富士山のふもとに集ひし同胞と共に語りぬ日の本の国を

非常に感銘を受けたが不満も……

(東京学芸大学 教 四年 鹿島謙輔)

何の予備知識もなく参加したが、すばらしい講義や行事に非常に感銘を受けました。普段、学校などで否定されてしまう自分の考え(祖国を愛し祖先を敬う)が、ここではあたり前のように語られているのがとても新鮮でした。しかし討論をするなかで分かったことは「他の人と自分は違う」ということです。日本人だから日本文化を愛すべきで和歌に感銘を受けなければならないという空気が漂っていて気持ちが悪く、日本を愛していてもつまらないものはつまらないのです。

だけれども基本的に祖国を愛す祖国を敬うというのは僕も強く想うところであり、当然のことだと再認識させられました。ですからこの閉鎖的な狭い空気さえなくなれば素晴らしい合宿になると思います。

合宿の集ひ終りて感銘と不満と自省で複雑なりけり

情感の豊かさが詰ったのが日本の歴史だ

(佐賀大学 理工 五年 和田晃次)

合宿を通して感じたことは、情感の豊かさが詰ったのが日本の歴史であったということでした。言葉、和歌の中には人の思いの切実さが籠められており、それが時空を越えると山口先生はおっしゃいました。夜久先生が弟橘比売命が入水される古事記の記述に「菅置八重、皮置八重、絶置八重」の上に降りられたとあるのは、弟橘比売命の尊い行

カメラ・レポート1



開会式。主催者を代表して、(社)国民文化研究会理事長・上村和男先生が「わからない問題も、大切に胸に抱いて過して欲しい」と挨拶された。

為にそのように書かざるを得なかつた編纂者の心情がある
と指摘になられたが、本当にすごいことだと思ひました。
自分もその生命に感ずる豊かな心を持ちたいと思ひました。
また小柳先生が孝明天皇の御宸翰に触れながら、天皇と国
民の間に通ひ合うものとは母と赤児にも似た純粹で一途な
心であり、それが連綿と承継がれてきたのが日本の歴史
ではなかつたかと述べられました、とても印象に残りま
した。我々にとつての文化防衛とは、この心のつながり合
ふ情感の世界をみずみずしく伝えていくことではないかと
思ひました。

風呂上がり宿舎にもどる道すがら日ぐらしの声高く響けり
日ぐらしのしき鳴く声を聞き居れば身にしむ如くに心すがしも

合宿に欠けていた点

(福島県立医科大学 一年 斎藤揚三)

この合宿で行われていることは正しいことと思ひます。
しかしかたに正しくとも一般の人に届かなければ単なるひ
とりよがりにすぎないと思ひます。日本が民主主義の国家
である以上、多くの人の共感を得られなければ世の中を変
える力にはなりません。世の中を変えるのは政治とマスコ
ミだと思ふ。その観点が少し欠けていたのではないでしょ
うか。「国体」を守るには、我々だけでなく日本国民が伝統
を守つていかなければならないのですから。もうひとつ欠
けていたのは、日本を他国の侵略からどう守るかという防
衛に関する議論です。この議論なくしては、「国体」もなにも

ありません。他国から侵略されないようにするにはどうし
たらいいのか。アメリカは他国です。それほど信用できる
でしょうか。日本一國で防衛を完成させる。日本がきちん
とした軍隊、核兵器を持つことが「国体」の議論の前提だ
と思ふのです。

天皇の御心知りてわが胸は生ける指針を得たりけるかな

人との付き合ひを考へさせられた

(東京大学大学院 M二年 東中野多聞)

六年前に初めて参加し、今夏で四回目になります。その
為大学四年生のつもりで参加したので、班員との年齢差を
感ずることなく話が出来ました。

合宿といふ集団生活を通じて考へさせられたのは、人と
の付き合ひといふことでした。相手に本當に自分の考へ方
を通じさせるには、相手の気持ちに自分の気持ちを合はせ
なければならぬといふことでした。それは相手の話して
ゐる内容や自分の話す内容に気を取られることなく相手の
気持ちを考へるといふことです。素直な気持ちで無意識に
出た言葉の方がより強く相手の気持ちに届くといふこと
でした。

今後は相手の言つてゐることがより正確に自分に伝はる
やうに努力していきたいと思ひました。

富士山の広きすそのに集まりて友と語らふ日々は樂しき

第二班 男子学生

心豊かになつてゆく自分を感じた

(佐賀大学 農 四年 大串直也)

今回の古典輪読で弟橘比売の入水される、その身をかへりみず皇子をお慕ひするお姿が、今尚皇后陛下の御心に息づいてゐるのを感じた。他者への没入。身はいかにならうとも、陛下を思ふこと、陛下もまた我々の上を偲ばれてゐることに何か「いのちの響き合ひ」とでも表すべき、大きな「何か見えないもの」を感じ、心豊かになつてゆく自分を感じた。目に見えぬものを感じた、と言へば慰霊祭である。小田村先生をはじめとする「大学正常化」の思ひに殉じられた方々が、あまた国難に殉じられた方々が降りてこられるのを感じ、双肩が重く感じられ、残り少ない学生生活の間になんとしても佐賀大たらしめたい、と強く決意することができた。

今尚も天皇すめみまいただくわが国に誇りもちませよるくになまづ国民

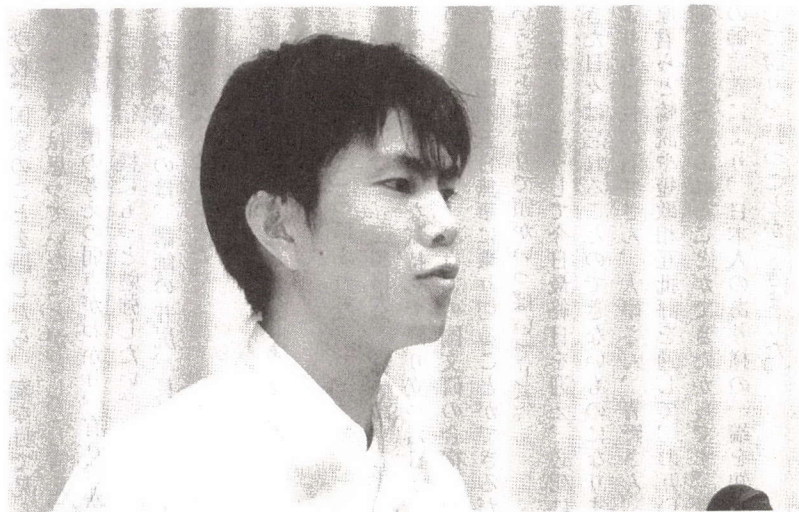
小田村先生のご遺志を受けつぐものとして詠める歌

國のため一人一人がいかにせむと問ひつつ學ぶ大學であれ

一本の縦糸を実感した

(日本大学 通信教育 石井信博)

古事記の輪読を通して「古事記のいのち」という我が国の歴史に流れ続けている一本の縦糸が存在しているのだということを実感いたしました。今まで大東亜戦争を戦われ



カメラ・レポート2

参加学生を代表して、帝京大学法学部四年・横畑雄基君が、「皆さんと共に歴史を学び、現代の問題を考へたい」と参加者に呼びかけた。

た先人の方々ははじめとして、勇敢でスケールの大きく、また、きめこまやかでまごころを尽した方がたくさんいらっしゃったことを誇りに思っております。けれどもあらためて気づかされたことは、そのような多くの先人の方々は「古事記のいのち」を身をもって顕しておられていたのだということ。倭建命のような勇敢な男性が、又、弟橘比売命のような愛と自己犠牲の精神を持った女性がたくさんいらした。言い換えれば、日本人はずっと倭建命や弟橘比売命を美しいと感じる心を持ち続けてきたということだと思います。

日本の歴史に流るる先輩のいのちにつらなる人でありたし

感銘を受けた

(長崎大学 教育 三年 辻 雅充)

最後の参加者による全体自由発表で多くの方が言われていることが、私自身のことを言われているように聞こえました。強く恥じています。

この合宿に参加し、多くの方が言われたことに感銘を受けました。学びとすることも多かつたと考えますが、私自身、まだ天皇に重きを持っていないので、持てる時が来るのを待ちたいと考えます。

合宿で得たものいろいろありたれど生かすも殺すも我次第なり

もつと勉強したい

(大正大学大学院 文 M一年 青野 英海)

日本のことについて考えさせられた。

学校で国家のことを話したら、変な目で見られてしまうが、ここでは思っていたことがどしどし言え、心がさわやかになり、僕の考えの弱点がわかり、有り難かった。

この合宿を機にもつと勉強したい。

ただ不満なのは、講師の井尻、長谷川両先生の本が一冊も売られていないことだ。

合宿をへて

国のこと天皇のことを学び合ふ友達にあへて心安まる

真剣なところにふれた

(獨協大学 外国語 一年 中田 俊太郎)

御殿場駅に不安な気持ちで降り立った日がつい昨日のように思っています。私はこの国文研の合宿は初めてで、果たして四泊五日無事に乗り切ることができただろうか、ということばかりで頭がいっぱいでした。

しかし、こうして今日最終日を迎え、必死に走り抜けてきた日々は忘れることのできないものになりました。なによりも班長の石井さん、大串さん、青野さん、辻さん、幸原君らと輪読や短歌相互批評を通して、お互いの誠実で真剣なところにふれることができたからです。私は諸先生方の御講義により、日本人のあり様の一端を知り、日本人として誇りを持つことができました。

合宿をともに過ごししみ友らとの楽しき思ひ出決して忘るまじ

濃い中味だった

(学習院大学 法 一年 幸原 正芳)

「普通の人達ですね」これが私と一緒に来た大学の部活の先輩と交わした最初の言葉でした。私は最初にこのような合宿の存在を知らず、ましては参加するようになろうとは思ってもみませんでした。最初先輩から誘われた時、変な奴ばかりなんじゃないのかなと思っていたのですが。

合宿の中身に関しては今思い返してみても改めて思うのですが、濃い中身だったと思います。今までふれたことのない話の連続で、しかもその分野では第一人者の方の話とあって、講義中も講義が終ってからも自分の頭の中で情報の整理に終わっていません。

班室で初めて会ひし七人が日を追ふにつれ親しさましくる

第三班—男子学生—

マッカーサーへの直訴状に陛下を思ふ民の姿を
感じた

(帝京大学 法 四年 横畑 雄基)

「今現在の日本がおかしいのは、我々の責任かもしれないが、しかし学生たる諸君は、それを理由に投げ出してはいけない」とおっしゃるその表情に、私も、このままではいけない、と感じたのです。小柳先生のお話の後の班別討論には、山口先生も我が班にいらして下さいました。そこで輪読したのが、伊藤たかさんの書かれた「マッカーサー

カメラ・レポート 3



オリエンテーション。合宿指揮班長の神奈川県立厚木東高校教諭・大日方学氏から合宿生活を送る上での諸注意につき説明がなされた。

への直訴状」でした。民を思ふ陛下と、陛下を思ふ民……。本来の我が国のあるべき姿をこの中に見いだしたやうな気がしました。しかるに我々は一体何なのだらうか！ さう思ふと、山口先生の前でもあり、さらに心にくるものがあり、涙を流してしまひました。昭和天皇は、「よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそち」といふ御製を詠まれてをられます。我々は、その大御心に応へる事ができるやう、日々努力を重ねていく事が必要なのだと思ひました。

班別討論

班別に分かれて話す折もまた班長としての役目おふらん友の声聞けりといへどその言葉うまくまとめることの難しさ

しかれどもともら皆して懸命に言葉出し合ふ我が班別討論

友ら皆に支へられつつ班長をつとめられをることに感謝す

山口先生のお話よりはじめる第四十四回合宿を終へて

我々の責任として日の本の国柄守る気概持ちたし

合宿の道統をして我々の誇りと思へば力わくなり

「陛下の御身にかかることだけは忍びがたい」

(九州大学 経済 四年 石井 英俊)

小柳先生の御講義は、大変感銘深かった。幕末、昭和、平成と、三つの時代のお話をなされた。幕末にあつては、三条実美が、大宰府におちねばならないことになつても、「大君はいかにあます」とうたい、京にかえりては「かへりきまさぬ君ぞかなしき」と嘆いた。昭和、終戦にあつて

は、伊藤たかさんのように名もない国民一人一人が、自分の命にかえても、陛下だけはお守りしたいと訴えた。そして、私が考えさせられたのは、平成の御代は、陛下の御聖徳、御言葉は述べられたが、国民の姿はなかつた。まさしく、自分達自身が問われていると思わされた。

そして、そのことを考えるときに、最も感動させられたのが、伊藤たかさんのマツカーサーへの直訴状だった。敗戦国の民としてどのような惨苦も甘受する。しかし、陛下の御身にかかることだけは忍びがたいのだ、と必死に訴える言葉一つ一つが心に残った。

小柳先生は、ここが戦後の原点だと語られたが、まさにそのことを忘れてはならないと思つた。「朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ、忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ」との御言葉はかくも悲しい、かくも美しいものだったのかと非常に思わされた。長谷川三千子さんが終戦の御聖断の中に、最も国体が明らかになつたと話されたが、あまりにも悲しすぎる、あまりにも美しすぎる、そう思わされた。

この合宿は、もっと深く、もっと暖かいものだった

(亜細亜大学 経営 三年 福田 進治)

私は、この合宿は、単に日本の昔の文化を知り、それについて議論するものにすぎないと思つていました。しかし、この合宿は、もっと大きく、もっと深く、もっと暖かいもので、現在、終戦以来二度目の危機を迎えているこの日本国家を守りたいという気持ちでした。正直言って、今の自

分は、今回の合宿の意義や思いをほとんど理解できませんでした。今までは市場原理やアメリカニズムが最も効率のよい国家機能で、国家が裕福になれば民も幸せになると思っておりましたが、現在の日本がかかえる問題は、目先の経済的裕福さに忘れさせられていた国家に対する想いが欠けていたということでした。

―別れ日のみなのまなざしきらきらと日本の将来大安と思ふ

天皇と国民の関係は母と子の関係

(武蔵工業大学 工三年 中尾 絃輔)

講義の中で一番印象に残っているのは、小柳先生の講義で、僕が今まで理解できなかった天皇と国民の関係を、母と子の関係であると言われた事だ。又、御製や直訴状はそれをより具体的に理解するのに十分であった。つまり、そこで感じたことは、我々日本国民は、天皇の慈愛の下それに応えるために日々励まなければならないということだと思ふ。僕はこのことを心に刻み、まずは大学でより勉強に励み、それから就職し、社会に少しでも役に立つよう努力したいと思う。それが陛下の我々へのお心の苦しみを少しでもやわらげることもなるし、日本がより良くなることにつながるのではないかと思うからである。

合宿で誓った言葉忘れずにさらに己を磨かむとす

陛下を思うあまり涙を流す班員に大変驚いた

(学習院大学 法二年 佐藤 洋平)



合宿導入講義。(社)国民文化研究会事務局長・山口秀範氏は「今の日本がをかしいとしたら、諸君の力でそれを正していくのが青年の生き方です」と訴へられた。

班別研修において「マツカーサーへの直訴状」を読んだところ、天皇陛下を思うあまりに涙を流す班員が三人もいたことに大変驚き、自分にはまだそういう心から湧き上がる思いがないことに気づきました。それはまだ、自分の中にも実感としての本当の日本人の心をもち得ていないということの表れだと思えます。

また、和歌に関しては、私は生まれて初めて人前に、自分の歌を披露し、批評をうけました。自分の感動を正確に表現する難しさ、その大切さを、少しですが分かった気がしました。そして何より相互批評で他の班員が私の歌に対し、また私の感動した心に対し、真剣に考え理解しようとしてくれたことに、深い感動と喜びがあり、和歌が大切だ、と言われるのはこういうことも言っているのかなと思えました。

心から大君思ひて流るらし友の涙に驚きにけり

心で感じたことを和歌に詠み大御心に近づいて
いきたい

(明星大学 人文 一年 久田 広光)

心で感じた事、心で思った事を、表現しないと相手に本当に理解してもらうことはできない。だから、古来より日本人は、和歌を詠むことで心の中を理解して姿にする経験を積み重ねられていき、周りの人達や陛下の大御心と一つになって、君臣一体の日本国が実現されてきたんだと、実感しました。

又、班別討論で、陛下は本当に国民と心を一つとされ、共に喜び悲しまれているんだという事を、御製から感じ、班友に涙を流し語ったが、山口先生に「君が感激した事はわかるが、思っていることが伝わって来ないから、和歌に詠んでみなさい」と言われた。しかしなかなか詠めず、自分は陛下の大御心に感じた感動を表現する経験を積み上げていなかっただと痛感し、これからは、心で感じた事等をどんどん和歌に詠み、心の体験を積み、少しでも、陛下の大御心に近づいていこうと思えます。

朗々とリズムをつけて和歌をよむ日本の心持たるる小林先輩

素直な自分の気持ち話を大切だと気づ
いた

(慶応義塾大学 理工 一年 堀江良明)

僕は、ほとんどこの合宿の内容を知らず参加し、そしてその内容は普段考えないようなことがたくさんあったので、大変疲れたけれど、得るものもたくさんありました。

その中の一つは、友と語ることです。今までは、自分の考えていることはささいなことだろうとか自明なことだろうとと思ってあまり話さなかったけれど、素直な自分の気持ちを話すことは大切なことだと班の人達と話すうちに気がきました。

また、先生方のご講義や班別討論をして、古代日本からずっと人の中に息づいてきた思想というものがあるのだなと思ひ、また天皇陛下はその心をずっと持ちつづけられて

いることに気づき大変感動しました。

輪読で偉人の心にふれしとき共感したりて力わきたり

率直に心と話せし班友と別れることはさみしきことかな

我が考へは小さきことであるけれど表現することが大切なりけり

第四班—男子学生—

心を開いて話しを聞いた

(早稲田大学 政経 四年 伊藤俊介)

日ごろから国文研の先生方に教わり学んでまいりましたが、それが一方で私の心の中になれあいと怠惰の心を生んでいたと思います。そこで今回は、初心にかえり、まず班員の仲間と心を開いて話せるように努力し、またご講義や班別討論においても耳をそばだて、しっかりと友の話を聞くようにしました。そうしましたら班員とすぐに打ちとけることができ、他班の人とも友だちになれました。ご講義の内容もしつかり把握できましたし、わからないところはお聞きし、班友とは充分に討論できました。また、しっかりと人の話を聞くことで、日本語のもつ美しさを感じました。それは、古事記を二度も輪読し、また短歌も声を出して朗々と詠みあえたからでもあります。

短歌の奥の深さを教わる

(北九州大学 法 四年 小松昭博)

僕は、アルバイトで国語の講師をしているので、古典文



朝の集ひ。「青年の家」を利用してゐる他の団体と共に国旗掲揚を行ひ、体操をして一日の研修が始まる。

カメラ・レポート5

法や言葉づかいには自信がありました。短歌は、あまりつくったことはありませんでしたが、つくって見るとなかなかの歌ができたつもりでした。しかし、班別相互批評でその自信はいとも簡単にくずされてしまいました。自分のつくった歌が人によってまったく違った解釈をされてしまうことに少なからず驚かされ、また、自分の気持ちを忠実に歌ったつもりが、その気持ちを自分自身で正確に把握できていませんでした。心を言葉で表すことは、こんなにも難しく、また短歌というものがこんなに奥の深いものだということを、この合宿で教えられました。

美しく飾れば消ゆる心なり飾らぬ言葉ぞまことを伝ふ

天皇の問題を理解できた

(東京大学 文 一年 石村善之亮)

この五日間は、非常に高密度な日々であった。講義では日本のくがらや古事記など我々が守っていかねばならないものは何かということに気づかせてくれるものが多かった。

なかでも小田村寅二郎先生をはじめとする多くの先人たちがいかに日本というものを考え守ろうとしてきたかということが痛いほどよくわかった。いまいちよくわからなかった天皇の問題も、小柳先生のご講義で理解することができ、得るものは大変大きかった。

また、いろんな考え方もつ仲間たちと知り合えてよかった。今までの大学生活の満たされない部分をこの合宿で

見つけることができ満足している。

天皇家を慕う国民性をうれしく思う

(近畿大学 理工 三年 蔭山武志)

天皇は国民に対していかに慈愛の念を持たれ、お祈りされていたか。僕は、天皇家はるか昔から今日に至るまで続いているということに非常に不思議だという想いを抱いていたが、何だかわかったような気がした。そして、その慈愛の心を慕い誰もが尊敬の念を持つという日本の国民性をうれしく思った。他国を考えると、敗戦に追い込まれると責任者が国民を捨てて逃亡するし、治めるといことは武力以外では考えられぬ、徳によって治めるとは考えられないのではないか。そういう面から見ても、日本の国民性の特殊さをうれしく思った。

壇上で心の熱き胸内を語る友らにわれ打たれたり

終戦の国民の涙に感動

(長崎大学 教育 三年 益富孝重)

一番感動したのは、終戦のとき日本国民が一同に涙を流したということだ。小柳先生はご講義の中で、いろんな違いはあったけど天皇に関しては国民皆一つであったとおっしゃったが、まさにその国民一体となった力が、戦後の復興を支えてこられたのだと思う。そして、心を一つにするということが、日本の強さであると思う。孝明天皇は將軍に宛てた手紙に、「私はあなたのことを自分の子のように思

っている。だからあなたも私のことを父と思ってくれ」という、なんとも素直で熱いメッセージをおくられている。昭和天皇は御身を投げ打ってまで国民を守られようとされた。このような天皇陛下がおられたからこそ、日本は一つになっているのだと思う。

班別討論にて

友とちの言葉に言葉で応へゆく心かよひて行くがうれしも

古典を読むことの素晴らしさ

(慶応義塾大学 法 一年 宝田寿哉)

この合宿に参加するまでは、なぜ国を守るのか、国の何を守るか、ということについては深く考えていなかった。

しかし、この合宿で日本文化の何が素晴らしいのか、また国のために尽くすには文化に対する理解を深めなければならぬことを教わった。そのことは、和歌創作や古事記輪読を通して強く感じられた。今までは歴史小説は読むことはあっても、古典については全く理解できなかった。日本人のアイデンティティーを深める最善の道は古典を読むことだ、ということがよくわかった。日本文化に対する理解を深めなければならない。この合宿に参加して本当によかった。

合宿で学びしことを糧にして国を思ひて尽さむと思ふ

本当の心の動きに気付く

(京都大学 文 一年 服部源憲)



カメラ・レポート6

二日目の午前、拓殖大学日本文化研究所長・井尻千男先生による「アメリカニズムとどう戦ふか」と題する講義が行われた。先生は「共同体原理を失って私たちは生きていけるのか」と問はれた。

合宿で最も印象深く心に残ったのは、和歌の相互批評でした。これまでも和歌創作の経験はありましたが、改めて素直な感情を詠み込むことがいかに難しいか、考へさせられました。相互批評の時間に、宝辺・国武先生、班の先輩方から鋭い指摘をいただきながら、うはべだけでない心の奥底に湧き起った本当の心の動きに気付き、それを多少とも的確に表現することが出来たと思ひます。今までになくすがすがしい体験でした。また、班の友人の和歌を読んで、その人がどのやうな想ひでこの和歌を詠んだのかと懸命に考へました。このやうにお互ひに氣持を察しあはうとする努力の中から他者に対する思ひやりやまごころが生まれてくるのではないかと思ひました。

友どちの詠みたる和歌を味はひて思ひ述べあふ時のたのしき

第五班—男子学生—

この合宿をなくしたくない

(早稲田大学 第二文 四年 浦 義勝)

この会に出会い、合宿に参加するのも今年で四回目である。思い返せば、多くの先輩方にお教をいただけてきたと思う。大学一年の時、議論で人をやり込める事しか考えていなかった私に、ガツンと一発くださったのは、会員の小柳志乃夫先輩であった。私は、班員の前でワーと泣き出してしまった。あれから三年間、未だ課題多き私の性格でもあるが、今後も謙虚に学びを深めてゆこうと思つてゐる。

今年の合宿は、小田村寅二郎先生が逝かれて始めての合宿である。会員のひとりひとり、また、それに連なるうとする我々の中にも特別な思ひがあつた。

この合宿を無くしたくはない。ずっとずっと続けてゆきたい。

小田寅二郎先生に寄する歌

今は亡き大人を思ひてこれからの学びの道を励みてゆきたし

互ひを思ひ合ふこまやかな心づかひ

(九州大学 法 四年 星原大輔)

今年で三回目の参加となりますが、先づ今回は小田村先生の亡くなつたといふこともあり、自分自身にとつても特別な思ひがありました。さうした中ではれた山口先生の導入講義は非常に感動させられました。聲をつまらせながら、小田村先生の御遺志を受け継ぎ、国文研を護つていきたい、そして学生のみなさんと共に学んでいきたい“と言はれた時、一人の日本人として、一人の学生として、その決意、想ひは胸に迫るものがありました。

昨年の小田村先生の御あいさつは“悠久の国家理念を追憶することからスタートするしかない“といふものでした。今回の合宿ではその国家理念を学ばせて頂いたと思ひます。“蒼生之を以て安寧“の理念を我が身を捨ててまで果たされようとする孝明天皇、昭和天皇のお姿、そして天皇を仰慕する三条美実公、伊藤たかさんの姿。戒律などではなく“互ひを思ひ合ふこまやかな心づかひ“がまさに日本を

日本たらしめてきたのではないかと思はれました。

長谷川先生の御講義をお聞きして

国民をいかになるとも護るこそ天皇の道にあるらし

身はいかにもなるとも民を護らむと昭和の君は宣らせたまひき

民もまた身をかへりみず天皇を助け給へと文を送りぬ

君民の相通ひ合ふこそそ大和島根の国がらならむ

天皇陛下とはどういうご存在か

(学習院大学 法 四年 北島治樹)

この合宿では、天皇陛下という存在について以前よりも多くの事を知り、天皇陛下と国民の関係を理解し、心が大変なごやかになるとともに、学習院大学在學生としてあまりにも不勉強であることに恥ずかしくなりました。これからは天皇陛下と同窓であることを誇りに思い、かつ、そのことで自らを律し、日本の国柄について学問することに精進していきたいと思えます。

五班では班別研修で「どうしたら外国人や、天皇陛下に関心を持ってない身近な人達に天皇陛下とはどういう存在かということを知りやすく伝えることができるのか」というテーマで討論していましたが、答がでずに合宿が終わりました。どなたか答えることができる方は、どうか教えてください。ただけないでしょうか。私は深刻に悩んでおります。

天皇を外に伝える使命をば果せず我はくやしかりけり



真剣に御講義に聞き入る参加者。

実感あふれる言葉が心をうつ

(佐賀大学 経済 三年 市原智広)

今回感じさせていただきましたことは本当に人の心を傷ぶということです。自分はけっこうできていると思っていました。知的な班別討論で、ある種さばいている面がありました。和歌相互批評で、そのことに気づきました。みんな言う事をよく聞いていて、色々なものに感動し、気づき、実感しているなど思われ、自分はその人の本当の姿を見ていなかったなとかえりみさせられました。

小柳先生のご講義では、実感あふれる言葉がこうも人の心をうつものかということを感じさせられました。日本を変革するというのは、ことを敏感に感じ、又、情緒あふれる言葉を実感していくことからだと思います。世界への発信は日本を知ってからだだと思います。

日の本を変革せんと志原点はしきしまの道にぞありける

数多くの宿題を与えられた

(関西大学 文 三年 寺田剛司)

非常に様々なものの考え方にじかにふれられて、今後、自分が学問をする参考になった。大学では、どれだけ日本の危機的状況を他の学生に語っても、徒労となっていた中、この合宿では、それを直接考える機会を、十分過ぎる程与えられた。また、初め、どうなることかと、心配していた古事記の論読や、和歌を詠むことがどれだけ日本の将来にとって重要か、また、やってみると興味深いものであるか

を知り、貴重な体験となった。実際、挑戦してみると、自分が和歌や古事記に対して持っていた既存のイメージが、いかに陳腐なものであるかを悟った。

私を含めた学生は、同時に数多くの「宿題」を与えられたのも事実である。

もうこれでこの場を去ると思ふればいと名残惜し御殿場の日々
よき友の話をいく度も聞き入ると我が心には感動残る

「人の話をよく聴く」ことの大切さ

(東北栄養専門学校 二年 原田雄亮)

今回、第44回全国学生青年合宿教室に参加させていただいた事は、自分の将来に多大な影響を与えることになると思います。普段、考えることのなかった日本の歴史、文化、国がら、また代々の天皇について班員のみなさんと学び、語り合うことができたことは非常にいい体験となりました。

その中でも「人の話をよく聴く」ことの大切さを強く感じました。講義の後に、班別研修があるという事は、大変意味のあることだと思います。やはり、自分一人で講義を聞き、考えるだけでは、なかなか話の神髄を見いだすことができないので、みんなの感想、意見を聞きながら「答え」を出していくということが、自分にとって、たまらなく新鮮でおもしろかったです。

迫り来る友との別れ惜しみつつ我らの思ひ雨にてたとへん

日本に対するイメージが一変した

(防衛大学 理工 一年 宮川貴仁)

この合宿に参加して今まで私がついていた日本に対するイメージが一変した。この合宿に参加しようと思った動機は、今までの物事に対する見方をより多角的にしようと思ったからです。そして物事を深く考えるということが苦手だったので、今まで以上に思考を深めるということを目標にしてみました。

結果は、物事、特に日本の伝統と文化について新しい一面を知ることができ、古事記にとっても興味をもちました。

この合宿から帰ったら日本の神話に関する本を読み、ここで得たものを忘れずがんばっていきたいと思う。

国憂ひ富士に集ひし友どちの熱き思ひぞ永遠なることを

第六班—男子学生—

大切な人、大切なものとは何かを考えさせられた

(麗澤大学 国際経済 四年 鈴木良登)

昨年阿蘇合宿に初めて参加し、そのときの思いが忘れられず、今年もまた参加しました。微力ながらも班長として合宿を無事終えることができたのは、班付の先生方、班員のみんなのおかげだと思っています。

合宿での講義は、山口先生の導入講義が一番印象に残りました。先生の国への思い、小田村先生への思いが強く感じられ、大切な人、大切なものとは何かを考えさせられる

カメラ・レポート 8



質疑応答の一コマ。

とともに、「見えないものを信じる力」は、本当に難しいものだと思います。

また、みんなが助け合って充実した班別研修ができたことを、本当にうれしく思いました。合宿後、みんなそれぞれの道を歩んでいきますが、共に頑張っていきたいと思えます。

山口先生の講義をお聴きして

渾身の力を込めて師の思ひ受け継ぐ姿に心打たる。

つた 「古事記のいのち」を感じ、日本の国がらを知

(島根大学 教育 五年 三島 明)

「古事記のいのち」という夜久正雄先生の御言葉が心に残った。夜久先生は、千三百年の時を越えて私たちの心に訴えかけてくるもの、それが「古事記のいのち」だとおっしゃられた。私の感じた何とも言えぬ快さ、響き、感動。これは「いのち」―古事記の「いのち」が私の中に入ってきたのだ。

夜久先生の御言葉、御姿は、いのちが躍動し、先生が古事記の「いのち」を一身に受け止めておられるようだった。私もまた、夜久先生の御姿から、いのちを感じていた。

小柳陽太郎先生のご講義は、日本の歴史を貫く「まごころ」の世界であった。それは、国民にまごころで接してこられた天皇にまごころで応えてきた国民の姿である。まごころとまごころで結び合う世界、それこそが日本の国がら

なのだ。

胸内に湧き起こりくるよるこびは古事記のいのちと師はのたまひき
千年もの月日を越えて我が内に蘇りくる古事記のいのち

日本人としてどう生きるか

(日本大学 文理 四年 山内曉生)

今回の合宿のテーマは「日本人としていかに生きるか」という点にあると思った。自分にとっては非常にむづかしい問題であり、すぐに答を見つけることはできない。人にはそれぞれ生きる道があり、それは、社会における自分の役割や周囲にいる人達との関わりをひっくり返って考える必要がある。自分のやりたいことだけを追求していると、流行に流されやすい軽薄な人間になってしまう。

このことを踏まえ、日本、日本人というものを考えると、先人の教えや伝統をよく理解する必要がある。古くからの考えをよく理解し、その延長線上に新しい考えを取り入れていくことが必要であるし、それに向けて努力していかなければならないと思った。

まごころを持ちたることの大切さ日々の暮らしにいかにかさん

長いようで短い充実した五日間だった

(福岡工業大学 工 二年 小林広和)

今回で二回目の参加でしたが、長いようで短い五日間でした。この合宿では得るものが本当に多く、とても満足し、また、短い五日間を惜しく思います。

今回の合宿で大きく心に残ったことは、まず、かけがえない仲間の輪がまた一段と広がり、絆が深まったことです。次に昨年と同様に短歌創作が印象に残っています。また、輪読を通して、古事記のおもしろさを知ることができました。

悪天候で富士山に登れなかったことと、夜の集いで古事記の劇をするつもりだったのに申し込みを忘れて参加できなかったことは、やや心残りです。

来年は、昨年、今年の経験を生かして、さらに充実した合宿にしたいと思います。

合宿最終日を迎へて

友らとの別れを惜しむ吾知らず時間は無情にすぎゆけるかも

短歌を學んで天皇陛下の御心に觸れることができた

(學習院大学 文 二年 高橋雅樹)

私が特に感銘を受けたのは、短歌相互批評でした。十分考へて書いたつもりのことばでも、皆で相互批評をすると、本當は自分の氣持を率直に表はしてゐないといふことがはっきりと理解でき、自分でも納得して間違ひを認識することができました。そのほか、他人の歌を批評することにより、その人の感情や性格を深く知ることができるものであり、その人の驚きを覚えませんでした。

また、御歴代の天皇方の御製を拜誦しますと、どの天皇方の御製も國の行末を思ひ、國民を安きに置くことを願は



レクリエーション。いざ富士山へ。バスの車中にて。

れた御心が沁々しみじみと思われます。これは、短歌を學ばねば感じられないものです。歌を通して天皇陛下の御心に觸れることができたのが、何より嬉しいことでした。

全體感想自由發表の折に詠める

さまざまに思ひを述べし人々に我的心も響き合ひたり

歷代天皇の御製を拜して詠める

をりふしにすめらみことの詠ませけるおほみうたにぞ胸を衝かる、

正しい道に向かつていきたい

(東京農業大学 応用生物化学 一年 菅間 勇)

いい勉強になりました。この一ヶ月色々考えて、初めて人生の岐路に立つたと思います。ここで逃げて楽な道へ行くことも考えました。しかし、逃げてばかりはいられません。正しい道は「いばらの道」である。大変だとは思いますが、向かつていきたいと思えます。

大切な友との別れはさみしくとも置いてゆかねば前には進めず

様々な課題と糧を与えられた

(長崎大学 教育 一年 野元幸憲)

今回の合宿は、様々な課題と糧を与えてくれました。そこそこの常識を持ち、教養も備えていたつもりの方としては、講義を聴いていて内容がほとんどわからなかったことはショックであり、つくづく自分の無知を感じました。

しかし同時に気付いたこともあります。人と人とがこん

なにも真剣に話せる所があったことは驚きであり、一人の人間の考え方に対してみんなが真剣に考えてくれる、こんな空間が日本にあることをとても嬉しく思いました。

また、素晴らしい先輩にも出会いました。足下のおぼつかないような自分に気をつかつてくれる人の存在がとても嬉しく、今まで自分がいかに人と人とのつながりをないがしろにしていたかも痛感しました。

全体感想自由發表にて

真剣に思ひを語る友を見て友の思ひの重さ感ぜり

第七班—男子学生—

国柄の本質にせまり得た

(福岡教育大学 教育 五年 別府正智)

まず「日本のくにがら」について心に実感し涙があふれてきました。終戦の折、昭和天皇は国民を『身はいかならむとも』と御いのちをかけて守られる。そして一方国民は『陛下をわがいのちにかへても守りませ』と願ひ血判にて直訴した。この君民のまごころの世界こそが日本のくにがらである。長谷川先生は御聖断による『終戦』、このこと自体が国体であると言われましたが、心にしみる様に実感しました。とりわけ伊藤たかさんが心血込めて書かれた文を読みつづ涙があふれて来ました。

更に心打たれたのはそのような陛下の御製、伊藤たかさんの直訴状、古事記を学ぶ中で、班員の心が変わっていく

ことです。感いつつも陛下の御心に心寄せ、日本人としての自己を問い直す姿は「まことにふればまことがあらはれる」との小柳先生の言葉そのものでした。

私は今まで国文研の合宿に来て、たとえ今はどうであっても、必ず必ず日本人として目覚めよみがえらという絶対の確信を頂いたように思います。昨年、天皇のことはたとえ頭ではわからなくても、日本人の血が感応するのだと小柳先生は言われました。それを体験してきた一年であり、今年は合宿で体験させられました。しかし「安穩としてもそれはよみがえらない。自分たちの手でよみがえらめよ。」と強く言われたのが山口先生であったと思い起こされてなりません。小野先生は祭文の中で「文化防衛の戦士として生きなむ。」と言われた。悠久の国家理念の追憶を行い、学び、実感し、言葉を鍛え意を決していく場が、この合宿教室であると思われた。山口先生の涙ながらの言葉は志を受け継ぐ者としての尊い姿に見えた。また自分もかくある先輩につづきたいと思う。

師のお言葉をわが心として

(明星大学 人文 四年 小林春輝)

私はこの合宿で多くのことを学ぶことができました。その第一は、友と心を寄せ合って語らうことの楽しさ、難しさでした。

講義においては、古事記や国体の思想を学び、また和歌創作・相互批評を通して一つ成長することができたことに



レクリエーション。富士山麓にバスから降りて。

喜びを感じます。たった四泊五日という短い間に充実した時を過ごせたことを、何よりも故小田村寅二郎先生をはじめこの度も合宿を運営された諸先輩方に感謝申し上げます。この感動を合宿に限定したものにせず、学校生活で、社会で活かしていきます。「自己の内側から厳しく生きる」という小柳陽太郎先生のお言葉をわが心として、仲間と共に研鑽していきます。合掌

いつはりの心を和歌にはあらはせぬまこと伝ふるしきしまの道

「男の器」が大きくなった

(千葉商科大学 商経 四年 武内裕一郎)

私はこの合宿に初めて参加し、ほんの少し、「男の器」が大きくなったと感じました。私の参加理由というのが他の班員とは大きく隔たりがあり、合宿初日はどうやって逃げ出そうかと考えをめぐらすばかりでしたが、多くの先生方の講義及び班別研修、輪読、和歌創作を通じ、次第に自分の心が素直に開いていくのを感じとることができました。

班員の足をひっぱり続けて大変申し訳なく思っています。班付の小野先生、様々な御指摘、御助言ありがとうございました。

合宿最後の日に

別れぎは苦楽共にし良き友に胸に秘めたる大粒の涙

心が通いあつた時の喜び

(大阪外国語大学 外 二年 金子明弘)

僕は合宿に何度か参加させて頂いて以来大いに学ぶところが多く、また充実感を覚えてきましたが、いまいちは心でしつかり受けとめることができなかつたようです。今回僕は心の迷いを断ち切ることができるとも思えないと、期待してこの合宿に参加させて頂きました。今この合宿を振り返ってみると、講義中居眠りした自分が思い起こされ、自分が悔しくなさげなくなります。しかし得るものも確かにありました。

短歌相互批評において人の心情をくみとることの難しさ、心が通いあつた時の喜び等、一生心に留め活用していきたいと思えます。

班友の何事にも真剣に取り組む姿勢を心の中に据えつけ、和歌の勉強を続けていきたいと思えます。

班友の真摯な姿勢受けとめて我もやるぞとたく誓ひし

和歌を感じる心を鍛えたい

(静岡大学 教育 一年 斎藤元暁)

この合宿で、古事記、天皇、和歌について、そこにあるつながり、そこにあるまごころ・伝統を知る機会が持てたことはたいへん貴重であつたと思う。

現今のマスメディアを通してでは、これらはなかなか表立って出てきにくい事柄である。自分の知識のなさからかもしれないが、天皇が詠まれた和歌に深く感動する心、天皇の尊さというものは、そう簡単には、その心を実感できるものではないと思う。この点は書物を読んだり、和歌を

感じる心を鍛えて、その心情にせまっていき、深く考えた
いと思う。

また班別研修中に、相手の意見を受けとめ、その人がど
ういう理由で言ったのかを深く考えることに、改めて重要
さを感じた。これからの生活の中で忘れないようにしよう
と思った。

天皇の和歌を通じてまごころのあらはれたるに心寄せけり

国家への素直な気持ちを抱けた

(防衛大学 人文社会科学 四年 清水洋平)

素直にありのままを感じる。そんな心の重要性を知らざ
れた感がする。

イギリスの劇作家で有名なバーナード・ショーが語った
「愛国主義とは自分がたまたま生まれた国を世界で一番よい
と固く信じることである。」という言葉がある。この言葉の
中にもかなり割り切ったドライな視点が感じられる。しか
し事実も言い表わしているように思う。

我々人間生活を考えた場合、基本となるものはやはり家
族であり帰属する団体若しくは学校である。こうした共同
体、とりわけ家族に至っては、自分の親は選択できない。
しかし我々は生まれた時、その事実を受け止め自分の生れ
た家を大切にしようとする。それが自然な感情というもの
だ。

しかしながら事が国家レベルの問題に至ると、そうはい
かないのが日本の現状である。自分が生まれた国に対して



二日目の夜。「古事記—倭建命」と題して、昭和音楽大学講師・国武忠彦先生による古典輪
読導入講義が行はれた。先生は倭建命の雄々しさと悲しさを、時にはユーモアを交へながら、
眼前に彷彿とさせるが如くに話してゆかれた。

素直な感情が抱けない日本の現状下で、この合宿は国家に
対する素直な気持を抱かせてくれる大変有意義なものであ
ったと思う。

合宿を終へて思ふ

素直なる感謝のこころ忘れずに進みてゆかむわが人生を

第八班 男子学生

「まごころ」のある豊かな文化

（九州大学 医 一年 中島健太郎）

私はこの合宿を通じて、日本のくに行らについて学び知
ることがいかに大切かということ強く感じました。敗戦
後の日本が歩んできた道は、一見華やかで、先進国として
の役割を十分に果して来ました。しかしそれは物質的な豊
かさを求めていたにすぎません。敗戦以来、日本は精神的
な心の豊かさを見失いつつある様に思います。古典や和歌
を読んで改めて感じたことですが、日本という国は「まご
ころ」のある豊かな文化を持っているのです。そのすばら
しい文化が今まさに失われようとしている…そういう認識
を持つことができました。

もちろんこれは問題の把握にすぎません。大切なのは
我々が日本をこの危機から救うには、どのようなことをし
ていかなばならないのか、ということ。それに対する
自分なりの答を見つけるのはたやすいことではなさそうで
すが、少なくともこの合宿に参加したことが、今後の日本

を考えていくきっかけになりました。その点で、私にとつ
て大変有意義な4泊5日であったと思います。班友にも恵
まれ、いい思い出を作ることができ、楽しい合宿でした。
ありがとうございました。

班友に恵まれしこの合宿は思ひ出深きものとなりたり

言葉の正確さを非常に要する文化

（北九州大学 法 三年 松岡貴之）

自分がこの合宿で学んだこと、より理解が深まったこと
は二つあると思います。一つは人とのつながりの大切さ、
二つ目は特に短歌においての自分の感情や意見を正確に他
人に伝えることの難しさ大切さです。私の班友には特異な
性格の人が多くて、あらためて世の中には様々な人間がい
る、十人十色だな、というのが最初に顔を合わせた時の印
象でした。四泊五日間彼らと、また與島先生、鈴木先生と
共に過ごせて本当に楽しかったし、私が初めて接する考え
方もあつたりして、とても勉強になったと思います。

この合宿に参加するまでは、感情、意見を正確な言葉に
して他の人に伝えようとしたことがなかったのか、そのこ
との難しさをそれほど感じませんでした。短歌の相互批
評を行なっている際、言葉の正確さを非常に要するこの文
化に驚かされました。この経験が、これからの人生の様々
な場面で役立つことを期待しているところです。

今回の合宿での班友、先生達の出会い、出来事を良い思
い出として大切にしていきたいと考えています。

班友、與島先生、鈴木先生と知りあへて
友と師と別れる時がせまれども共に過ごしとき忘れがたし

一年後には皆が括目して見る様になって帰って
きたい

(高根大学 法文 一年 池田敏晃)

私がこの合宿で思ったことは、もっと勉強をしなくては
ということである。井尻先生や長谷川先生の御講義は大変
すばらしかったのだが、専門的な話になると意味がよく分
らないところや難かしいところがたくさんあり、これらの
御話の意味が分かったら、もっと先生方の言われたことや
御講義の内容がもっとよく分かるのにと口惜しく思った。
そして、家に帰ったら一年間しっかり勉強をして、来年の
この合宿の御講義では話の内容が全部理解できる様にした
い。また、討論の時も今回御指摘をうけたことが充分に実
行できる様にした。

一年後には皆が括目して見る様になって帰ってきたい。

最後になりましたが、すばらしい御講義をして下さった
講師の先生方、班別研修において様々なアドバイスをして
頂いた先生方、そして私の所かまわない下らぬ話につきあ
ってくれた班友のみなさん、どうも有難うございました。

合宿最終日に詠める

辛きこと楽しきことを荷とともに鞆につめて今日家路につく

矢の如く過ぎ去り行きし今日までを思ひ返しつつ荷づくりをする

縁あらば再会せむと思ひつつ友らの顔をさりげなく見る

カメラ・レポート 12



班別研修。御講義の後は各班に戻り、講義のポイントを確かめ合ひながら、感想や疑問を出し合ひ、理解を深めてゆく。

合宿で出会えた偶然は一生の大切な宝物

（九州産業大学 経済 一年 深田恭兵）

発表では上手く言えなかったので、文に書きたいと思います。本当に来て良かった。この五日間という短期間で自分を見つめ直すことができました。こんなに感動したことは今まで自分にあつたのだろうかと思いました。

小柳先生の「道は近し」という御言葉を、今は理解とまではいきませんが、感じることはできます。

班友、奥島先生、鈴木先生、次はいつ会えるかわかりませんが、会った時にはもっともっと成長し、皆さんに出会えた偶然を、一生大切な宝物とします。

いつも一緒に居るときには言えないから、文に残します。ありがとうございます。

私にこの合宿で関はっていただいた人達へ

止まりては後押し給ふ熱き師と思ひを交はす友を得にけり

合宿にて得られしことの喜びを胸に刻みていざ進まむとす

なんだかうれしくて涙がこぼれて仕方がない

（早稲田大学 社会科学 四年 白石資隆）

合宿が終わろうとする今、私の胸に広がっているのは、人を信ずるといふ喜びであります。全国各地からそれぞれいろんな思いをよせて集まったわけですが、その中には不満だらけの人もいたと思います。しかし、寝食を共にし、多く語り合ったすえ、今あるのは別れのさみしさや、多くの思い出と思えます。私も今、そんな班友達や多くの仲間

達にありがたさと別れのさみしさを感じております。しかし、それ以上に感じるのは、そういった仲間を大切に思うみんなのきれいな感情であります。人にはそれぞれ多くの欠点がありますが、こうして合宿が終わろうとする今になって、みんなの顔を見ながら私が感じるのは、その人の心のきれいなさです。人として、友を想い、国を想い、少しでも向上しようとするすばらしさです。みんながそういう心をもっているのかと思うと、なんだかうれしくて涙がこぼれて仕方がありません。ただ今は、私の心をこのようにしてくれたこの合宿に感謝しております。そして、このような合宿を作ってくれた先輩達の志を継ぐべく、命の限り、国のために尽くしていこうと改めて感じました。本当にありがとうございます。

—合宿が終はらうとする今、奥島先生におくる

子の如く心尽されし先生のなまりし声を生涯忘れじ

感動の胸にせまる涙はなつかしさと喜び

（福岡教育大学 教育 二年 小林国平）

私は今年で二度目の合宿となります。私はどんな講義を受けても、どんなに胸を打つ映画を観てもなかなか涙を流せない男でした。それが今年、小柳陽太郎先生の御講義を受けている内に、天皇陛下が常に国民のことを思っておられる御製をいくつもお聞きし、また皇后様が象徴であられる天皇陛下のことを気づかっておられる御言葉にふれ、そのお姿に日本の父母を感じ、日本人として生まれたことを

心からありがたいと感じ、今までなかった熱いものが私の胸にこみ上げてきました。何とも言えない気持ちのいいものでした。また私はその講義の内に、自然と四首も和歌をスラスラと詠みあげたのです。昨年の阿蘇における夏合宿以来、福岡にて輪読会、勉強会に参加してきたこの一年の積み重ねが、小柳先生の御話を私の胸の奥底にとどかせてくれたのだと思います。感動の胸にせまる涙は、生まれて本当に何回目だろうかというような、なつかしさと、自分にしか分らない喜びを与えてくれました。

小柳先生の御講義を聞きて

いづくしみ深き天皇とお后は国民抱く父母のごと

天皇の御心にひたすらこたへまつらむとときます御声は胸に響き来

第九班―男子学生―

今後の生活の励みに

(新聞記者 福田 仁)

就職三年目、社会人としては初の参加で、とりわけ学生班友との語らいは新鮮でした。今後皆を思い出すことが、生活の上での励みとなりそうです。また自らの学生時代も振り返り、こうした生きた学問の場がいかに貴重か、改めて痛感しました。

み友らと古事の記読みゆけばみ祖の心胸にせまり来



カメラ・レポート 13

御講義の後、長谷川三千子先生は班別研修に参加されて、学生の質問に丁寧に答へられた。

心開くことを学んだ短歌相互批評

(佐賀大学 経済 四年 小宮 宏)

「心」の大切さを学んだ。開会式で今回の合宿にあたり「心を開いて語り合おう」と言われた。このことを肝に銘じ合宿に臨んだのであるが、なかなか難しく実践できなかつた。

しかし、天皇陛下が国民のため心寄せ続けられている御姿に触れ、「心を開く」ということはまず他者に心を寄せていくことではないかと思うようになった。古事記の輪読で多くの和歌に感動したが、それは古代の人々の素朴で素直な心の想いを歌っているからではないかと思った。千三百年前の和歌に私たちが感動できるのは、先人たちが大和の心を大切にして育んできたからだと思う。短歌相互批評の時間で、私なりに少しは他者に心を寄せられたと思う。こういう風に、互いに心を寄せ合う中で日本の心を受け継いでいきたいと思う。

清き、直き心を持ち続けてきた日本、そして素朴で素直な心を歌い上げる短歌という文化があるこの日本を、私は大変誇りに思う。この日本の国がらをもっと大切にしていきたい。

大いなる志抱きし同胞と新しき日本ともに造らむ
素晴らしき心育みし伝統を我も継がむと心に誓ふ

自らの無知に気付いた

(亜細亜大学 法 四年 清田直紀)

「出会い」の大切さ、日本の言葉、心の美しさ、人々の「想

い」の尊さなど、いろいろなことを感じました。
また自分の内面について見つめることの大切さ、大変さにも気づきました。友達や班付きの方々との語らいの中にそういうことが存在しているのだなとも思いました。自分という一人の人間は、「他者」との交流・語らいなどによって存在させられているんだなと気付くことが出来たのは、自分にとつても大きいです。

一番重要だなと思ったのは、「自分がいかに何も知らないかを知る」ことでした。少しづついろんな話を聴かせていただき、知ることができる度に、その何倍もの知らない事がでてきました。このことに気づき「謙虚でなければいけないなあ」と思いました。そして勉強を積み重ねていくことが今の自分には大切なのではないかと感じました。

志ともにする友にめぐり逢ひ語らひあひし日々の楽しき
日の本のみに生くる幸せに気付きし心に喜びありけり

真実と思えるものに出会えた

(学習院大学 法 三年 森川洋一郎)

今回のこの合宿での目標は、国文研の考え方とはどういうものか、この目で確かめることだった。偏った思想か？だとすると、周りの人間は皆染まっているのか？「虎穴に入らずんば虎児を得ず」の心境だった。講義、討論を重ねるうちに、僕まで染められるかもしれない。でも、そこで自分の考えをぶつけ、そして本当はどうかを見極めたかった。

さて、特定の思想だと思っていた国文研の理念の正体。手探りで確かめていく中、どうやら真実らしいと思えるものが沢山見つかった。それは何とも嬉しい事だった。

東京に帰ってからは、ここで得たものを土台にし、その上に立って、本当に正しいものは何なのかをさらに追いかけていきたい。そう努力し続ける事が、自分に正しい方向を教えてくれる指標となってくれるなら、もう最高に嬉しい。

合宿感想文を書く折り、顔を上げて周りを見れば

下向いて最後のまともを書くみな的心はいかに未来はいかに

文を練る今この時の静けさは明日の日本の活力となるか

くにながらわす古事記のおおらかさ

(長崎大学 教育 四年 外村聖典)

一番心に残りましたのは古事記の輪読でした。倭建命のお話しは、悪い所も、いい所も書かれてあり、非常なおおらかな世界だと思われました。熊曾建と戦う場面では躍動を感じ、弟橘比売の場面では作者が大切に言葉を書いていっていることを知りました。特に私を感じましたのは、倭建命が最期おかくれになる時に残した歌でした。その歌は自分の運命に対して決して嘆くのではなく、「倭は国のまほろば」と美しく詠い上げていること、故里を思う気持ちでした。また「その大刀はや」と詠っている歌には、最後まで使命をまっとうしようとしたお心が偲ばれてきました。日本のくにながらを考えると、このおおらかな心

カメラ・レポート 14



熊本市役所勤務・折田豊生先生による「創作短歌全体批評」。先生は二百首からなる歌稿のうち約二十首を取り上げ、一首一首丁寧に作者の気持を推し量りながら、鑑賞及び批評をしてゆかれた。

が悠久の日本をあらわしていると思われました。

日本のくにならについてもう一つ思われましたのは、小柳先生のご講義の中で「内側から日本の伝統を厳しく生きる人が日本を救う」とありました。そしてその言葉から思われてくるのは昭和天皇の終戦の御製でした。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

昭和天皇はたおれゆく民を思われてはご自身を顧みられ、ご自分を顧みられては民のことを思われて、絶えずご自分を厳しく見つめられていたのだと感じました。そのような陛下の姿に心動かされ、お応えしようとしてきた国民がおり、そこにこそ日本のくにならがあらわれてくるのだと思いました。しかし、今上陛下にお応えできていない現状があると思います。内側から日本の伝統を厳しく生きるとは陛下のお姿にお応えすることだと思われるのです。日本のくにならを実践するためにおおらかさと厳しさをもって日々の生活を送りたいと思います。

共に学び語り合ふ時は短くも絆深まる不思議さ思はゆ

第十一班—女子学生—

日本に生まれてきたことをうれしく思う

(九州女子大学 音楽 四年 石松知恵)

「日本の御国の姿はかよひあふ心にぞあると師の君のたまふ」。合宿でこの歌を詠ませて頂きましたが、講義や輪読、相互批評を行う中で、少しでも実感できるようになり、その様な日本に生まれてきたことをうれしく思っています。古事記や御歴代天皇の世界には、事実や理論では語れない大切な世界があると思います。それは小柳先生の御講話の中にもあるように、母が子を思う慈愛の心で成り立ってきたということ。陛下にいついかなる時も、国民を思う御心があったからこそ、自然に国民もその心に感応し、戦後も国民一体となり復興が成し遂げられてきたのだと思えました。それは目に見えないものではありませんが、その見えないものを大切にしてきた、耳を傾けようと心を働かせてきたのが、日本の国民だったと思います。

合宿を運営されておられる先生方の、小田村先生の志を受け継がんと熱く語られる姿にとても感動しました。小田村先生は「日本を本来の国家にするためには、悠久の国家理念の追憶からスタートするしかない」とおっしゃっています。今の国の状況は、皇后陛下の御歌にもあるように、天皇陛下がどれほどの任を担い、苦しまれておられるか、計り知れません。だからこそ、自分の場においても、ここで学ばせていただいた心かよい合う世界を表わしていきたいと思えます。

班友と共に学びて日の本の心育むことこのうれしむ

先人の心を大切にしていきたい

(東北女子大学 家政 三年 小野慶実)

この合宿は二回目で、今回で更に日本についての理解が深められました。先生方の御講義を聞き、天皇の国民に対する慈愛、その天皇を守るため心を一つにして戦い亡くなった人々がいることなど、歴史の重みを思いつつ、先人の心を大切にしていきたいと強く感じました。

古事記の輪読及び短歌創作によって、日本文化の特徴とも言える「真心」を学ぶことができて、とても嬉しく思います。千三百年も前に書かれた書物を読み、味わうことの出来る素晴らしさ、ありのままの心を短歌に詠む楽しさ、これこそ日本の本当のよさなのだと思います。

我国に受け継がれて来た伝統を大切に、温故知新の精神を持って自分の国を愛していきたいと思えます。このよくなことを教え、気付かせて下さった先生方や班友の方々、本当に有難うございました。この合宿で、同じことについて考え学び、共有できたことについて感謝致します。

先人の命をかけて戦ひし国への思ひに心打たれぬ

班友の姿から学んだ

(島根大学 法文 一年 福西明子)

二日目くらいまでは、知らない人達と班を組んで過ごす事に抵抗があり、すごく緊張をしていました。班員は皆学年が上だった事もあり、班の中での楽しい雰囲気を感じつつも、なかなか馴染めませんでした。しかし班別研修で



班別短歌相互批評。作者の気持ちを確認しながら、歌の表現がよりの確になるやう班員皆で心傾けて添削してゆく。

感想を言い合った後、部屋に戻った時に、班員の一人が「私の言いたい事を上手く言ってくれて良かった」という事を言ってくれたのが妙に嬉しかったです。

先生方の講義は、普段本で学ぶよりもかみ砕いたお話で分かりやすく、込められた思いには、日頃ほんやり生きていく身が恥ずかしく思われました。班では、皆をまとめ感想を言い合うのを促す班長さん、言葉少ない私に明るく話しかけてくれた班友の皆の姿から、色々学びました。

この合宿は良い体験でした。このことを成長の糧にして、今回得られなかったものを得るために、再び成長して合宿に参加したく思います。

朱富士を見むと目覚ましかけし朝窓辺で雨音ききたくやしも

友と心から打ち解け合えた

(東北女子短期大学 生活 二年 菊池美穂)

この合宿に参加する班友にはじめて会ったとき、この人達と自分の思いを語り合えるのかという不安な気持ちでいっぱいでした。しかし班別討論等、毎日の生活をともにしていく中で、次第に心から打ち解け合うことができ、とてもうれしく思っています。

以前から外国に興味を持っていました。外国へ一度足を踏み入れ、世界の広さを感じ、様々な考え方や物事のあり方等を学んでみたいと思っていました。しかし世界に目を向ける前に、母国のことを知らなければ外国へ行ってもどうしようもないということに気付きました。

この合宿を通して、日本の国柄を本質的に解ってきたような気がします。これを機に、更に母国である日本について学び、そして感じ取っていきたいと思います。合宿に参加して良かったです。

心から打ちとけあへる班友とわかれのときはかなしかりけり

新たな考え方、物の見方を発見

(中村学園大学 家政 二年 松田幸子)

今回初めて合宿に参加しましたが、講義などを受けていて今まで積み重ねてきた考え方、物の見方とは全く違ったので、この合宿で四泊五日も無事やっていけるのか不安でした。

私は今まで日本を国という形で見たことがなかったように思います。私の目は常に「ヒト」という生き物に向けられていました。日本を考える時も日本人の集合体として見ていました。だからこの合宿は未知の世界でした。

先生方のお話や、友達の意見を聞いてみると、たまに反発心も起こりました。普段から思っているのは、物事を一方から見えないことです。一方だけからしか見ていないと考え方にもかたよりが出てくると思うからです。

今回の合宿を通して新たな考え方、物の見方を発見しました。それから日本の国というものや、天皇に関する色々な疑問がわいてきました。これから勉強し考えて、自分を確立していきたいと思います。

たくさんの人と出逢へしこの集みみな言葉の心をにぎざまん

「古事記」の講義と輪読に心が躍動

(長崎大学 薬 二年 日高秀子)

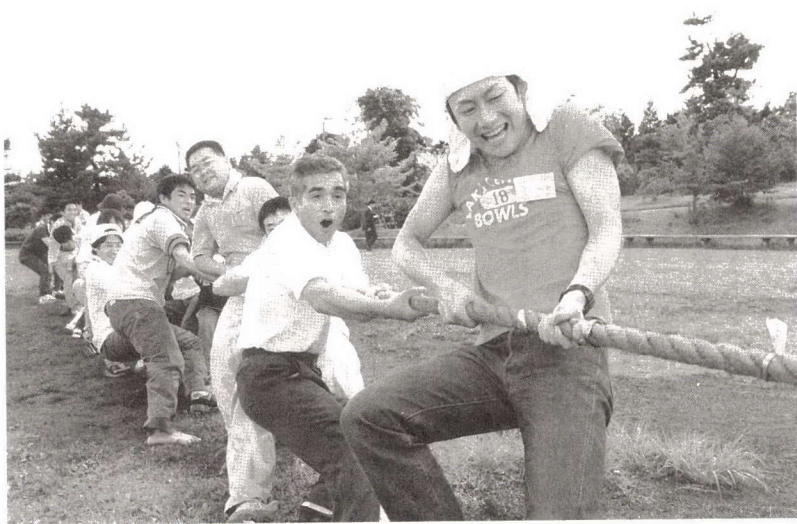
今回の合宿教室で考えさせられたのは「日本」でした。それは国・文化・歴史など、かなり多岐にわたりました。そして多くの発見がありました。天皇と国民は長い年月をかけて、君臣の情を培ってきたこと、共同体原理というすばらしい風習があること、神話から連綿として続いている歴史があること、でもこれは発見というよりは気づくことだと思えます。今まで気づいてこなかったのです。このことは、日本に対する考え、思いを一変させました。日本は世界に対して一歩も引けを取らない国だと思いました。

合宿中、古事記を読む機会を得ました。古えの人の思いが感じられた時、何とも言えない嬉しさを感じました。「人には三つの知るがある。頭で知る、体で知る、心で知るというものだ」とおっしゃった言葉が思い出されて、これが心で知るといふことなのかと思いました。そして、今まで頭で考えすぎてきたのだと反省させられました。頭で考えること全てを否定する気はありませんが、心で感じることをもっと大切にしなければいけないと思いました。

古文を読んで心が躍動しましたので、古文を、できれば日本の歴史の源である古事記を勉強していきたいと思えます。

心にて感ずることを大切にこれからの学び重ねゆきたし

カメラ・レポート 16



レクリエーション。国文研杯争奪綱引き大会。参加者は前日雨で折角の富士登山が出来なかった不満を、綱引きで晴らした。

第十二班—女子学生—

陛下の親が子を思うような無私の精神に感動

(長崎県立大学 経済 二年 橋本陽子)

小柳先生の「日本の歴史を貫くまごころの世界」というご講義で、天皇陛下の親が子を思うような深いまなざし、無私の精神というものが感じられたように思いました。

この中で終戦の日の朝日新聞が紹介され「静かながらもそこには嵐があつた。感情の嵐である」と当時の国民の心を読まれた時、自分の中にすごい緊張感と驚きとが突き抜けたような感じを受けました。「日本は負けたからくやしきではない、国を守りきれなかつた、愛する人たちを守りきれなかつた、また天皇陛下を守りきれなかつた」という苦しさがあつたのではなからうかと思ひました。そういう国民の守りきれなかつた苦しみを、一番切に感じられたのが天皇陛下ではなかつたかと思ひました。私は今まで皇后陛下の「国の歴史にも喜びの時、苦しみの時があり、そのいずれの時にも国民と共にあることが、陛下の御旨であると思ひます。」という言葉にありがたいという思ひはあつたけれど、国民の苦しみ悲しみを切に感じられ「爆撃にたふれゆく民の上を思ひいくさどめけり身はいかならむとも」と詠まれたのかと思うと、本当に親が子を思うような天皇陛下の暖かさが感じられました。

孝明天皇の思いに幕末の志士が立ち上がったように、天皇陛下の思いに国民が立ちあがる「まごころ」の世界が歴

史を築き上げたと思ひます。そういう暖かい国に生まれてうれしいと同時に、そういう感覚を常に感じられるように、伝統を学び、和歌に接し、自然をいとおしむような日本人の感性を見いだしていきたいと思ひました。

清らかな涙を流す空間があつた

(福岡教育大学 教育 三年 相浦佐知子)

私は今回三度目の参加となりましたが、いつのまにか班の学生の中では最年長で、様々の面で自分の在り方を省みさせられました。

今回心に残つたことは、和歌相互批評の時の班友のことばでした。私は合宿を通して自分が日本の国に生まれ、生きていくことに大きな喜びを感じましたが、ある班友が同じ思ひを和歌にしています。その歌をみなで唄んだとき「自分も初めて生きていくことを実感した」という感想ができました。私自身初めは素直に感動できず、ずいぶん抵抗感、拒絶感があり、初参加のときは班員のほとんどに共感していませんでした。しかし今回、班のみんなは、日本に生まれ、天皇陛下をいただいている喜びを共有していました。私は本当にそこに共同体というか、まごころの通じ合う世界を見たような気がします。

また、班別研修に来て下さつた長内先生が「清らかな涙をたくさん流して下さい。それがまごころの始めなのです。そして自分の内側から日本の伝統を生きてください」とおっしゃったことが大変印象に残りました。天皇陛下と国民

の想いが呼応しているような、まごころの通い合う世界が日本の国がらだと思えます。清らかな涙を流すそういう空間がここにはありました。そういう合宿を守られてきた、また守つていこうとされる国文研の先生方に感動し、感謝いたします。

先生たちの心を込めて若人に伝へし言の葉胸にとどまり
日の本の国がら学び我もまた伝へて生くる人となりたし

とても勉強になり楽しかった

(昭和記念館設立準備会 木村有紀子)

初めて国文研の合宿に参加させて頂きました。今までこの様な素晴らしい合宿が開催されていた事を知らなかったのが残念でならないぐらい、とても勉強になり楽しかったです。

講義の中では天皇陛下の御聖徳にふれ、又、久しぶりに昭和天皇の御製を耳にし、忘れかけていた大和魂がよみがえりました。

日本人としてこんなにも素晴らしい天皇陛下をいただきながら、恩返しが出さず、私欲に悩む自分が情けなくなりました。

大東亜戦争中、多くの国民が流した「血と汗と涙」を無駄にせず、20世紀中に、誇りある日本をよみがえらせるべく、元の生活に戻つても、精一杯頑張らねばと心を新たに致しました。

又、短歌相互批評は、人の気持ちを理解する上でも、日



「慰霊祭」。戦時平時を問はず、祖国日本の為に尊い命を捧げられた方々の御霊を、屋外に設営された祭壇で心を込めてお慰めした。

本の文化を学ぶ上でも、とても大切なものだと思います。それは私にとって初めての経験でありましたので、勉強になりました。この行事を通して思いやりの心が育まれるのではないかと思います。

班員、班長さんにも恵まれ、本当に楽しい合宿となりました。ありがとうございます。

御製よみ樺太真岡のおみならの美しきさまよみがへりこし

これからも是非参加させていただきたい

(東北女子短期大学 保育 二年 豊川祥子)

私は今回初めて合宿教室に参加させていただきました。当初はたいへん不安な気持ちでいっぱいでした。このような内容の講演を拝聴する機会はありません、又短歌創作もはじめてでした。こんな私が参加して良いのかと思いましたが、班の方々と共に過ごすうちに、そのような思いはすっかりなくなりました。班別討論ではあいまいな発言ばかりなのにもかかわらず、班の方々はうなずきながら温かく見守ってくださいました。

慰霊祭では戦友をなくされた方々と、戦争を知らない私たちが、世代を越えて集いました。「今の日本は戦争がないからそれでいいじゃないか」と考えるのではなく、今ここに私たちが生かされているのは、当時の方々が命をかけてくださったおかげだと感謝することの大切さを強く感じました。

五日間を過ごすなかで、たくさんの方々とお会い、たく

さんのことを感じ、自分を見つめなおす機会となりました。これからも是非参加させていただきたいと思います。

皆さん、本当にありがとうございます。

班友と熱く語りし日々想ひこのままたま時とまれと願ふ

友に我が日本のことを話したい

(東北女子大学 家政 二年 福士紅美)

私は大学側の紹介で初めてこの合宿教室に参加させていただきました。普段から日本について学んでいる方々に比べ、全くと言っていいほど知識のない私は合宿が始まる前、班別研修や講義などについてゆけるかどうか不安でいっぱいでした。

実際、参加してみると、私の想像していたものとは違いました。みなで話し合うことにより講義の内容を深めたり、輪読することによって新たな日本を知ることができ、今までわからなかったこと、気づかなかったことをたくさん吸収することができました。

また、合宿中寝食を共にした班友との交流が不安な気持ちを吹き飛ばしてくれました。とても密な日程の中、そして五日間という短い期間で、あんなにも仲良く楽しく語ることができたのは、日本のことをもつと学びたい、守り、受け継ぎたいという気持ちを共有しているからだと思えます。

青森に戻ったら、合宿に参加できなかった友達に、班友のこと、合宿のこと、そして我が日本のことについて話し

たいと思っています。そして自分でもっと勉強し、来年も合宿に参加できたらと思います。本当に有難うございました。

心寄せ語りひ涙す班友とまた会ひたしと願ひてやまず

たい 日本に生まれた喜びを日本の歌にたくしてゆき

(国立音楽大学 音楽 一年 松下加奈)

唱歌の歌詞に「富士は日本一の山」というのがありますが、まさにそのとおりの空高くそびえたつ富士のふもとでの合宿で、多くのことを学んだ。

小柳陽太郎先生の「日本のくにがら」の御講義の中で、自分の身はどのようになっても構わないから国民を守りたいと思われる天皇陛下の御姿と、天皇を慕う君臣の情の美しさに感銘を受けた。またそれは大東亜戦争時だけであつたと思っていたが、孝明天皇の御宸翰と三条実美の和歌をよみ、常に国民を思われる天皇と、天皇を慕う国民はいつの時代にも存在していたのだということにも感動した。

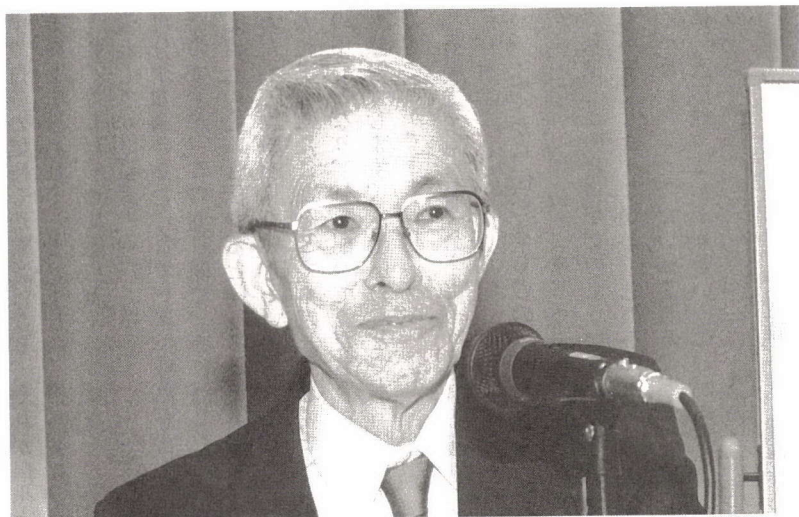
このような素晴らしい日本に生まれたことを私は誇りに思う。陛下のおられる日本に生まれた喜びを、日本の歌に託してゆきたい。

天皇の御国に生まれしよろこびを託してゆきたし日の本のうたに

自然に心を開いて語り合えた

(国文研 清水久仁子)

カメラ・レポート 18



四日目の午前。国民文化研究会副理事長・元九州造形短期大学教授・小柳陽太郎先生による講義「君臣の情—日本の歴史を貫く“まごころ”の世界—」。先生は「日本は天皇といふ御存在によって“まごころ”が一筋に守り伝えられてある。皆さんは天皇のお気持ちをお褒めして生きていただきたい」と述べられた。

この度の合宿では、班の皆々と自然に心を開いて語り合えたことが最もうれしいことでした。時には涙が止まらなかつたり、又、おなかが痛いほど笑つたりと、時間がアツという間になくなることがしばしばでした。

又、ご講義では山口先生・長谷川先生・夜久先生・小柳先生等々、大変立派な先生方が、あんなにも心をこめられ、私たちにお話し下さったことは、内容とともに、自分の人生を生きていく上で、強いはげみをいただいたように思います。

ふり返ると食事や清掃の時間まで思い出深く、もう合宿が終ってしまったかと残念ですが、ここで学んだことを生かして、これからはもつとがんばっていききたいと思ひました。

本当に皆様有難うございました。

あまりにも合宿のとき短かくて今日は友らと別れゆくかな

第十三班—女子学生—

感じたことを素直に人に話す大切さ

(国立音楽大学 音楽 一年 田中妙佳)

今回、合宿初参加で私が一番得たことは、自分が感じたことを感じたままに素直に人に話すことの大切さと、思いを言葉にする難しさです。初めての短歌創作や講義などで、難しく深く理解することができなかつたり、戸惑いもありましたが、班員の皆さんが温かい雰囲気と一緒に気持ち

を感じてくださいました。短歌創作では、日々学んでゆく中で自分の気持ちが複雑になり、それが出来上った歌にもそのまま表われてしまいました。相互批評の時に、沢山感じたのならば一つの歌に書くのではなく、一つ一つの歌に表わしていけばよいのだと教えていただきました。今まで、自分が知識のないことで立派な意見が言えないと考えていたのですが、この五日間で、心に感じたことをそのまま言えば人の心にも伝わるということを実感し、これからも澄んだ心で物事を見ていきたいと思ひました。この合宿で友人に出会えたことをとても嬉しく思ひます。合宿中、私達の中心となり、気を配ってくださった指揮班などの皆様にも感謝致します。富士山のもとで本当に充実した日々を過ごすことができました。

五日間今から思へば早く過ぎ去りとう少し富士に残りたし

古くから伝わるものの素晴らしさを感じた

(東北女子短大 保育 二年 橋本みどり)

私は、この合宿がどのようなものか見当もつかず、とても不安でした。しかし、その不安も班友の皆さんの温かい心づかいによってだいたい忘れることができました。二日目に一人が帰ってしまうということがありましたが、その人の分まで頑張つて学んでいこうと決意しました。

諸先生方のご講義は、大変難しく、理解するのに人の二、三倍かかるくらいの内容の濃いものでした。その中で、私は、日本のあり方・古事記などの古くから伝わるものの大

切さや素晴らしさを感じられたと思います。今まで全くと言
っていい程接してこなかった内容ばかりでしたが、時間を
見つけられたら、是非、様々な分野の事を学びたいとい
う気持ちを持たせてくれた合宿教室でした。

短歌創作も、まだ未熟ですが、楽しく思えたので、これ
からの生活で感動した事などを歌いたいと思います。そし
て、今私にできることを考え、見つけ、実行できたら幸い
です。本当に有意義な合宿教室でした。ありがとうございました。
ました。

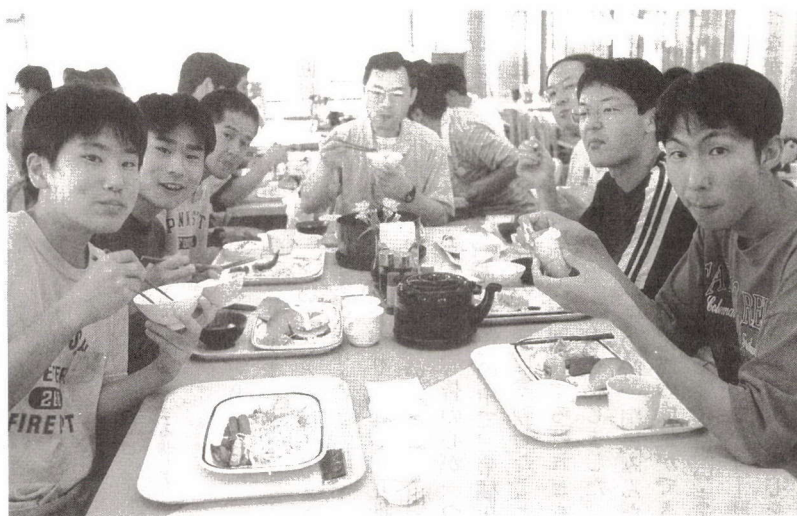
富士山のふもとにおいて学びたる青年いかに日本を思ふ
五日間涙流して語り合ふ班友の姿をわれは忘れじ

和歌によって友と心がつながった

(長崎大学 教育 三年 中園まどか)

とても感動したことは、和歌によって友と心がつながり
合うということでした。二日目に、友が一人帰ってしまう
という悲しいことが起こりました。班員が涙を流し、真心
を友に尽くしていききましたが、心が通じ合わないまま別れ
ることとなってしまいました。私達は、何とはなしに重く
感じる苦しみもちながら行事に参加していました。

そんな時、第一回和歌相互批評が行われ、皆が一人く
の和歌に対して心を寄せていきました。和歌から、友が何
に感動したのかという心のさゆらぎが分かりました。相互
批評が進む中で、班員の顔には笑みがこぼれ、心が通じあ
っていくことを感じずにはいられませんでした。「和歌は、



食事風景。各班毎に食卓を囲み、おいしい料理に会話も弾む。

人と人の心を通じあわせていく力がある。」という言葉を本
当に実感した瞬間でした。

また今回、強く感じたことは、合宿のプログラムが全て
といつてよい程、小田村先生の御言葉、「日本の国を本来の
国家にするためには、悠久の国家理念の追憶からスタート
するしかない。」に集約されている様に思われました。それ
は本当に古事記や万葉集に示されている国家理念を、私達
が学ぶことだと思いました。

いよいよと終はりが近くなることに友との別れがつかくなるかな

友というのは素晴らしい

(鹿児島大学 農 四年 葉棚奈緒子)

お互いの心を通い合わせ、共に泣き、共に喜び、そして、
共に笑うことができて、「本当に友というのは素晴らしい」、
そう思った合宿でありました。

現在、私の心の中に強く印象に残っておりますのは、小
柳陽太郎先生の御講義です。遠い昔から、陛下と国民の間
に大変強い結びつきがあったという事実、そこに通い合わ
された真心を文という形を通して拝することが出来まして、
そのことにあらためて深い感動を覚えました。そして、日
本人であることの誇りを強く感じました。

「陛下が、国民の叡智がよき判断を下し、国民の意志が
よきことを志向するよう祈り続けていらっしやる。」という
皇后陛下の御言葉が、これからの自分の生きてゆくべき指
針をお示し下さったように思いました。上下睦び合い、喜

びも悲しみも共にしてきたという日本の国柄に思いをいた
すとき、深い感動を覚え、又、心と心の通い合いを大切に
して言葉を生み出す営みを大切にしていきたいと思いまし
た。本当に有り難うございました。

うれしきと尊しと思ふ心知る友らとともに学びしことを
共に泣き共に喜びすこし来し友らとの別れせまる悲しも

まごころを深く考えさせられた

(佐賀大学 教育 四年 橋本さつき)

今回は、「まごころ」ということを深く考えさせられまし
た。主に三つのことが印象に残りました。

まず一つは、班友とのつながりが和歌相互批評で深まっ
たことです。お互いの和歌のいいところを出しあったり、
気持ちを汲んだりしていく中で、皆の心が一つになってい
きました。二つめは、「古事記」の中で、弟橘比売が走水の
船の上から入水される時のお歌に感動したことです。この
お歌から、比売が倭建命とお別れするけれども、もう何も
悔いを感じないどころか、意志を感じました。そして、三
つめは、長谷川先生が、「終戦の時、国民みんなの心は一つ
になったのです。だからあれだけの成長ができたのです。」
というお言葉をおっしゃっていたように思います。

このように、まごころは、縦のつながり―歴史―、横の
つながり―共同体―というように、人々の心をつなげてゆ
くものだと思います。そして、それを最も実践されていら
っしゃるのが天皇陛下だと思えます。

学生に語られし先生（おんげんせい）の御言葉を胸にきざみて励みゆきたし

人の話を聞く事の難しさを感じた

（武蔵野音楽大学 音楽 四年 小林祐子）

今回の合宿で感じた事は、人の話を聞く事の難しさでした。班の話し合ひの中で、それぞれの感想を聞くと、この様な事を思ひました、ここが分かりませんでしたなど、皆それぞれが思ふ事を素直に話してくれました。

しかし、私はそこからのやうに話を広げ、深めていったら良いかいつも悩んでしまひ、言葉が詰まる事が沢山ありました。班員一人一人の話を、もっと自分の身に置きかへて深く理解することが出来たなら、もう少し自然に話し合ひを進めてゆく事が出来たと思ひました。しかし、十三班の皆は、私の話すことに一生懸命耳を傾けてくれました。そして、どのやうに話し合ひを進めていったら良いか一緒に考へたり、助言もしてくれました。

また、生活を共にする中で、本当に一人一人の思ひやりを感じました。大学最後の素敵な思ひ出となりました。ありがたうございました。

班友の一つ一つの真心に自分も何かで応へたいと思ふ

もっと強い自分になりたい

（東北女子大学 家政 二年 神戸真矢子）

始まったばかりの時は、このままでやっていけるのだからかと、不安な気持ちでいっぱいでした。班の仲間は、み



亜細亜大学名誉教授・夜久正雄先生は「古事記のいのち」と題して、「その当時の言葉がわかるといふ事は、千三百数十年前の人の気持ちが今の私たちに通じてくるといふ事で、これが「古事記のいのち」なのです」と話された。

ない人ばかりでしたので、がんばってみようと思いました。しかし、結局、私はもうついていけないという結論を出しました。あと一日でも帰らずにいたら、少しはがんばれたのかも知れません。でも、帰ることを決めた時点でどうにもなりません。国文研の方々に説得され、仲間にもはげまされたのに、本当にばかなことをしたと思っています。

でも、今の私では五日間参加していても何も得られるものはなかったでしょうし、自分を苦しめることになったかもしれない。これからは、もっと強い自分になるように勉強したいと思います。貴重な体験をさせて頂いて、本当に感謝しております。

やさしくて私の心に届いてたみんなの言葉忘れなかれ

第十四班―女子社会人―

自分を磨く為の合宿

(喫茶はえゆ 星野有佳子)

今年で5回目の参加です。参加することに皆の話もおだやかに聞けるようになり、班長も4回目ともなれば気負いもなく、自然に接することができました。この合宿は自分を磨く為の合宿だと思っています。私の班の人達には本を読まなければ学べないのではなく、感じたことやいいと思ったことを身近なことから実践していく心を学ぼうという風に伝えたいと思いました。私はバスや電車でお年寄など

に席をゆずることから始めて、徐々に相手の気持ちになつて考えて辛い苦しい時に力になってあげられる人を目指したいと思います。この合宿で思いやりの心が大切だということ学びました。その思いやりが表に現れるようになった時、日本人としての形が自然とできてくると私なりに考えています。

また来年この友どちと出会へるか夏合宿に思ひをはせる

心に残っていること

(鳥根大学 法文 一年 井田和美)

私が特に心に残っているのは夜久正雄先生の「古事記のいのち」という御講話です。その中で古代ペルシャの建国物語である「王書」は今でも誰もが暗誦できるのに対し、日本人のほとんどが「古事記」を読んだことがないとおっしゃっていました。私も古事記をきちんと読んだことはありません。そのことをとても恥ずかしく思いました。この夏休み、現代語訳されたものから読んでみたいと思います。そしてもう一つ心に残っているのは小柳陽太郎先生の御講義です。先生は天皇と国民の関係は親子の関係だと思っていました。天皇が一方的に国民のことを思っていたのではなく、子が親のことを思うように国民も天皇のことを思っていたのだと気付かされました。天皇の御製を少しでも読もうと思いました。

合宿で仲良くなりし友どちと離れがたしと我は思ひぬ

合宿の終はり近づき思ふのは久々に会ふ家族のことなり

日本人の真心を学んだ

(中村学園大学 家政 二年 井上香織)

初めてこの合宿に参加して一日目は帰りたいとばかり考えていました。二日目から講義の内容が難しく私にはついていけないとも思いました。しかし講義の後の班別研修で講義の内容などを理解することができました。私一人だつたら自分で勉強したり、理解しようとする力がしなかつたと思います。また、和歌を通して班員の心が伝わり、自分の歌を皆で手直ししたりして、楽しく詠むこともできました。そしてこの合宿で私が一番学べたことは人の暖かさや真心です。相手にあたたく接すればその人も他の人に親切になり、それが次から次へと続けばいいと思いました。その為にはまず自分が始めないとけません。「心で思っているでも行動に出さなければ伝わらない」と班員達と話し、どんなに小さなことでもいいから、人にあたたくしようと思いました。古事記や天皇のことについてはまだまだ勉強不足で分からないことばかりです。今回は人のあたたかさ・真心、次回は日本文化をと一つずつでいいからこの合宿に参加し、学んでいければ、と思いました。

良き友と別れゆくのは悲しけどまた来年と願ひ続けむ

合宿で学んだことを忘れずに

(東北女子大学 家政 二年 成田有起子)

私は今回初めてこの合宿に参加させて頂きました。参加するまでは一体どんな合宿なのだろうと少し不安でした。



「夜の集ひ」。屋外でキャンプファイヤーを囲みながら、班や大学別に寸劇や歌が披露された。

合宿が始まってからも班別討論でうまく意見が言えず、自分が合宿を続けられるか心配でした。しかし日が経つにつれ、自分の考えを言えるようになり、自信が湧いてきました。合宿の講義と討論で天皇陛下が国民のことをとても思っていてくれることがわかりました。私は今まで天皇についてあまり深く考えていませんでしたが、歌などを読んで天皇のお気持ちやお考えが分かりました。天皇陛下が私達のことを思っていて下さっていることは私に喜びを与えてくれました。とても感謝しています。合宿で学んだことを忘れずに、これからも頑張っていきたいと思えます。

友人と語り得たこと忘れずに生きてゆかむと思ひたり

深く考えさせられた言葉

(残波ロイヤルホテル 上原真紀)

昨年に続き二回目の参加でしたが、今回も多くの発見と感動がありました。昨年同様、天皇様と国民との間の情感を通して、日本人であることの誇りを感じずにはいられませんでした。そして小柳陽太郎先生の「今日の現代社会において青年はどう生きていくか」という言葉に深く考えさせられました。なぜなら日本人が持つ真心や心情を、感じるだけでなく、さらに何をすべきでどう生きていくかを考えるだけではならないということだと思つたからです。私には目指している道があります。合宿での発見は、私がおの道を目指しながらこれから歩んでいくに当たって、決してゆるぐことのない感激として深く残るものだと思います。

五日間、本当に有難うございました。

壇上へ上がりゆきたる友ら見て勇ましく思ひ胸こみあぐる

感動は言葉にできる

(東筑紫短期大学 食物栄養 二年 野口純子)

今回は和歌がとても心に残つた。感動・思いをそのまま表すことはとても難しいと改めて思つた。私は短歌創作の時間二度ともうまくできなくて、気持ちもややもやしていった。しかし相互批評で先生に御指導頂き、班員全員で気持ちを共有しようと皆が一所懸命考えている姿は嬉しく、人の歌ができた時はまた自分の歌のように嬉しかった。そして感動や自然は本当に言葉にできるということを知つた。気分爽快で晴れ晴れとし、すがすがしかった。「素直に正しく表現しないと言葉一つで自分の気持ちとずれが生じる」ことを学び、飾ろうとせず正確な言葉で詠んでいくという和歌に臨む姿勢が見えた気がする。和歌はただ詠むのではなく、正確に詠んでいきたい。また自分の気持ちと言葉が一致するようにしたい。

母が財布に合宿費用を入れてくれて

さりげなく入れてくれたるお金には言葉なくとも声の聞こゆる

「ただいま」と元気な声で言へずとも待ちたる母の笑顔浮かばる

合宿に参加して良かった

(大妻短期大学 家政 一年 小林紘子)

戦争について日本は悪かったと学校の先生に教えられま

したが、本当に悪かったのは日本だけなのか、同じ世代の人々も皆そんな風に思っているのか、そして日本の天皇とはどんな存在なのか、自分一人では考えきれないことを話し合ってみたいと思いい、今回この合宿に参加しました。先生方の講義を受け、班で研修をしていくうちに誤解していたことや疑問だったことが少しずつ分かってきたように思えました。そして日々平和に暮らせるのは天皇皇后両陛下、先生、友達、祖父母そして父母のおかげであることに気づき、感謝の気持ちで自然と涙があふれ出しました。皆で一つのことを話し合い、素直に自分の気持ちを語り、涙を流すという貴重な体験ができて、この合宿に参加して心から良かったと思います。

—あまたなる思ひはあれどなかなかペンがすすまずもどかしきかな

古事記の輪読

(福岡大学 科目履修生 諫山由紀)

今回とても心に残っているのは古事記の輪読です。日本の神話が当時の言葉そのままの響きで残されているということがどれほどすごいことなのかを感じ、千三百年以上も前と同じ言葉を自分が声に出して読んでいることに感動しました。「言向け和平す」や「幸でまして」などの言葉は何故このような字にしたのかと思いい、その意味を考えて尊敬の念を覚ええました。今の日本を本来の姿に戻していくことが我々の進むべき道であるということを思わされるとき、日本がどのように歩んできたのかを学ぶことが本当に大切



さあ踊れや歌へ。楽しい出しものが続々に登場した「夜の集い」。

だと思いました。君臣の間に育まれてきた情により残されてきた美しい言葉に触れ、感動する心を私も言葉に残し、和歌にして、日々心を磨いていければと思います。

君臣のあたたかき心かよひあひうまれし言葉美しと思ふ

第二十一班—社会人—

培はれた伝統の力

(中島法律事務所 中島繁樹)

国立中央青年の家は、合宿教室の場所としてどうにか合格であったと思ふ。心配された班別討論の場所も確保されてゐた。そのための準備にあつた方々のご努力に感謝したい。

井尻千男先生、長谷川三千子先生の講義もよかつた。小柳陽太郎先生のご講義を中心とした諸先生のお話に、多くの参加者が感銘を受けたやうであり、素晴らしいことであつた。

ただ弱点としては、現下日本についての政治学的分析の視点が少なかつたのではないかと思はれる。

この合宿教室の存在意義は、第四十四回を経て今日においても、全く失はれてはゐない。四十四回を経て培はれた伝統の力は今後とも合宿教室を存続させるものと確信する。

若きらがひとつに国がらを語り過せし合宿終はる

会場に若きらひたすら感想のペンを取るなり別れ近くに

いきいきとした発表に感動

(靖國神社 小山末吉)

小鳥の鳴く声に早起きでき、合歓咲くよき処、海拔七百の青年の家にて、合宿教室に参加させていただき洵に有難度うございました。宿泊の「からまつ」を清掃しベッドを元に直したとき初めて、準備をしていただいた山根清様以下の方々の御苦勞を身にしみて感じりました。感謝申し上げます。

参加者による全体感想自由発表による参加者の声を拝聴するにつけ、皆様のいきいきとした発表に感動致しました。何と言つても私には、大串直也さんの慰霊祭による心に残つた感想は、此の会の目的の最重要な要のように感じましたので、何卒御継続いただければと存じました。色々とお難うございました。

警蹕の声神さびてひびきけり御霊や天翔り天降りませ

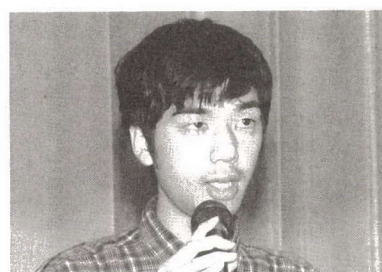
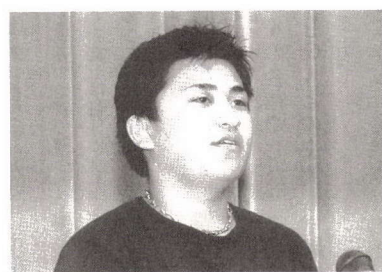
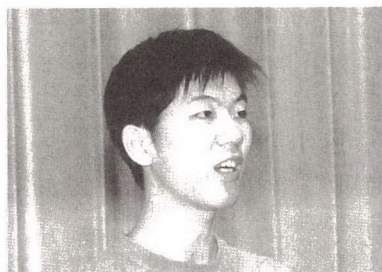
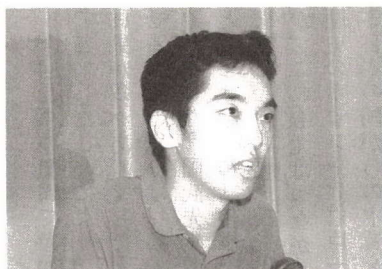
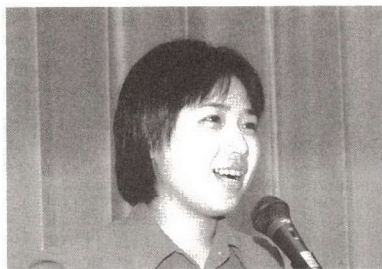
大御歌奏し奉れる師の御声ただ懐しきひたにききける

朝まだき鳥の啼り聞くにつけ厳しき暑さ忘れらるる

誠の日本の心を学び得た

(乃木神社 松吉宣和)

先人達の思ひが四十四回という年を重ね、国民文化研究会の基礎となつている慰霊祭。今年八回目の奉仕を無事終えましたことに感謝申し上げます。今年は特に小田村寅二郎先生が天に召され、先生の縁りある山口県より神籬をもつて参りました。私だけでなく参加者のほとんどが慰霊祭



「全体感想自由発表」。参加者は次々と登壇して思ひの丈（たけ）を述べていった。

への齊行に心をうたれたことと思います。

講義で日本の国体思想、市場原理と共同体原理を学び、古事記を通して誠の日本の心を学び得たと思いますが、これらの講義を実社会にどのよう^に普及させるかは、各自が身をもって社会に広くひろめてゆかなければならないと思います。

最後に、合宿に携わられた国文研の担当者に心より感謝申し上げます。ありがとうございます。ありがとうございました。

友ら集ひ富士のみ山に君が代を声高らかに歌ひあげたり

暗闇に神籬立てて師のみ霊むかへ奉りて拜み奉る

目に見えない価値に対する信仰と確信

(富士通株 浜田 實)

今回仕事の関係で参加が危ぶまれましたが、万難を排して参加したことにより、新たな友との出会い、新たな研鑽成果が多々ありました。山口秀範氏の小田村前理事長に寄せる感謝の思ひは、参加者に国文研の原点を思ひ起こしてくれました。国武先生の古事記講義は何と楽しく聞けたことでしょうか。神話の雄々しいロマンがひしひしと伝はって来ました。井尻・長谷川両講師の話は一見対極の内容ですが、これも元はつながってゐました。小柳先生のお話は、歴史のポイント、君臣一如のすがた、戦に敗れてもなほある日本の国がらの本質を教へられました。目に見えない価値に対する信仰と確信を再確認しました。学生諸君は目を輝かせて講義を聴講してゐました。事務局の皆さん、大変

お疲れさまです。

朝あけのしじまの中を進みつつ言の葉つむぐ楽しさ覚ゆ
きのふとは姿を変へて赤富士は朝日に映えて雄々しく聳ゆ
インドネシアゆ馳せ参じましし澤部大人の合宿に寄する思ひ尊し

私の大切な時間だった

(伊佐ホームズ株 稲田光博)

濃いスケジュールの合宿でした。寝食を共にしたご年配の先輩と若き清々しい人との交流も、私の大切な時間であったと感じて居ります。

少数派ではあるこうした集いの教えを、私なりに遠心力を持つて周囲の人に影響させて行こうと考えて居ります。ありがとうございます。

亡き友に誓ひし思ひを富士の嶺に残して帰る御殿場の里

自分を見つめた短歌創作

(日本植生株 榊井和則)

今回会社よりの命令との形で参加した為、当初は大変やる気もなく、長い五日間をすこす事、その間にたまっていく仕事への不安感で目いっぱいでした。ただ、短歌創作の為、一人ベンチに座って一時間ほど富士山をながめていると、「最近こんな時間を持っていなかっただな」と感じました。短歌を創る為ではありましたが、自分が今何をどの様に感じているのかを考えることができました。

班ごとの活動にこだわりすぎているかなと感じました。

勉強の為に参加している以上に、今しか会えない人とのコミュニケーションを取る事が重要なのではないか、全体での会合やイベント、分科会があればもっと楽しいのではないか、と感じました。

富士山ハイキング中止となり学生とバスケットに参加して球を追ひ二歩も三歩も遅れゆく惜しむらくは三十路の身体

日本の良き国がらを学んだ

(日本植生(株) 糸永 寛)

古事記や短歌を通して、日常生活で味わえないことをこの合宿で得ることができました。古事記は千三百年前の作者の言葉で気持ちりが現代まで伝えられ、また短歌も作者の読んだ情景がありありと伝わりました。これらは壊すことのできない真実であり、真実だからこそ現代まで残っていると思えました。天皇の御製では、国民を心配されることが歌われており、自分の知らなかった日本の国がらが理解できました。

短歌創作では、自分の思いを歌にすることが難しく、職員の方や松吉先生に添削して頂き、短歌らしい歌ができ、うれしく思いました。

この合宿で日本の良き国がらを学ぶことができ、日本人としての誇りを得ることができました。

日本の我が知らぬ真実知りて充実したと大富士を去る



閉会式で学生を代表して、福岡教育大学教育学部二年・小林国平君が「御製を通して両陛下の思ひがひしひしと感じられ、胸が熱くなりました。今の気持ちを忘れずに、多くの友と来年も又会ひたい」と述べた。

(山梨医科大学 教授 前田秀一郎)

今回二十二年ぶりの参加でしたが、昔日と変はりなく快く受け入れて下さった諸先生はじめ、会員の皆様方に御礼申しあげます。参加させて戴いて、大和言葉を正しく読み取る力を養ふことが、小田村寅二郎先生の仰った「記紀万葉時代からの史観を素に悠久の国家理念を追憶する」道に連なるとの思ひを新たに致しました。

第二十二班——社会人——

短歌創作を続けたい

(日本植生(株) 中村 剛)

本合宿で感じたことは、日本の伝統を知るには、政治、思想、天皇、古事記、短歌等さまざまな切り口があることを知りました。殊に短歌の持つ意味の大きさは意外でした。この短歌創作鑑賞の研修は特に印象的なものでした。今後、自分の表現力、感受性の鍛錬の為、折りにふれ短歌の創作を続けて行きたいと思えます。

班員の詠みし短歌より偲はるる彼のひとがらの温かりしを

平成の志士にならん

(新企業業(株) 杉村栄治)

四泊五日という短い期間でしたが、講義を聴き班員で語り又全体の雰囲気を感じていると「松下村塾とはこういうものだったのかな」と思いました。私は山口県出身なので

すが、山口といえは勤王の志士が多く出た地であり、その志士の心を自分なりに酌んでみると、自分には足りない事が多くあることに気付き恥ずかしく思いました。唯、今回の合宿で自分の進むべき道、目に見えぬものというのが、ほんやりとですが解ったように思います。私も平成の志士となるべく日本の心というものを大切にしていきたいと強く思います。

みともらと合宿終はりて離れども心は一つ国想ふこと

自分の学びの浅さを反省した

(林兼産業(株) 山中康司)

私は読書を通じて真正保守主義の立場から、日本の歴史や伝統について考えてきました。そして何故皆こんなことが分からないのかと傲慢な気持ちでいました。深く反省するところです。

しかし、この合宿で歴代の天皇の話や御製、古事記などに触れるにつれ、自分の蓄えてきたことは単なる小理屈であったことを感じました。大事なことは愛する人(人達)のために命さえも投げ出そうとする気持ではないかと気付きました。これは誰でも持っている実に純真で素朴な感情です。しかしこれが国を思うことに直接に、しかも決定的につながっていくと思えます。

これからは謙虚に、肩の力を抜いて大好きな読書が続けていきたいと思えます。もちろん大好きな日本をもっともっと知るために。

皇子思ふ弟橘比売に感じ入り我が浅学を思ひ知るなり

国のあり方を考えさせられた

(伊佐ホームズ(株) 青木一俊)

日本人として生きる尊さ、国のあり方ということを講議と班別討論の中で考えさせられました。

天皇陛下の国民を想う心の深さにも感動を覚えました。歴史にふれる機会、真実にふれる体験を生活の中にとり入れ、自分自身のこととして考えてみたいと思いました。

日の丸はためくみつ朝日背とともに汗するラジオ体操

真直に生きて来られた日本人を感じた

(札幌西陵高校 本田 格)

井尻千男、長谷川三千子両先生のご講義はもちろん、国文研の先生方のご講義にどれも感銘を受けました。特に今回、八十路を越えられた桑木崇秀先生、夜久正雄先生のお姿、お話しぶりに引きつけられました。ゆるぎない信念で真直ぐに生きて来られた日本人がここにいると思いました。そのお心を精一杯受け継ぎたいものだと思います。

道はぐれさまよひ歩く蟻ひとつたみの上にしばしたたずむ

学ぶ所が多かった

(福岡県立水産高校 菅原亨二)

今夏の合宿教室では、社会人班々長を努め乍ら全ての御講義を聴けても学ぶ所が多く有意義でした。御講義の流



主催者を代表し国民文化研究会副理事長・宝辺正久先生が、「素晴らしい日本の国柄に気づき、その心をお互ひに歌に詠み交はして、励まし合ひ交流を続けていませう」と挨拶された。

れは良く練られ、段階を追って学ぶことができました。

社会人班長として

かねてより知りたる如く語り合ふ友の姿に心安らく
み友らと共に学びし富士のさと楽しき思ひ心に残る

小田村先生の志を引き継ぎたい

(小田原市立下曾我小学校 岩越豊雄)

第一回目の短歌創作のためのハイキングは生憎の雨であつたが、今回の合宿のやうに、短歌創作や古典輪読に充分時間をとつたのはよかつた。さうした実習体験と「国体」の思想、日本の国がらに關するご講義が関連相応し、参加者の学びも深まつたと思ふ。

又国武先生の古事記の輪読導入講義が夜久先生の「古事記のいのち」のご講義によつてさらに理解が深まり、絶妙な組み合わせとなつた。

小田村先生亡き後の第一回目の合宿であつたが、先生の志に感応交流して感想を述べる学生に心打られた。私も先生のお志を引き継がねばと強く思つた。

若松の木立ちの間に日の丸の赤うつくしくみどりに映えたり

大いなる富士の裾野に齋庭いはいつくりみ魂よばひてまつるかしこさ
かがり火の映ゆる齋庭はさながらに大古のごとく神さびてあり
いにしへの手ぶりのまゝに国のためのちささげしみ祖先いづこしのびぬ

志を「受け継ぐ」と

(南国殖産棟 京田清人)

合宿初日の早朝、晴れ渡つた空に聳える富士山を眺めてゐるうちに、ラフカディオ・ハーンの「ある保守主義者」の一節が思ひ出された。「あなた方は目のつけどころが低すぎるんですよ。もつと上を見てごらん下さい。もつと高いところを……」この文章の全体像はよく思ひ出せないが、高々と聳える富士の雄姿とこの言葉が重なり合ひ、合宿の忘れ得ぬ思ひ出の一つとなつた。

事前合宿を含めて二泊三日の参加であつた。山口秀範先生の御講義は、冒頭から最後まで小田村寅二郎先生を追慕・追悼される内容と受け止められた。志の高さ・強さが胸を打つすばらしいお話であつたと思ふ。「受け継ぐ」と言はれた強い語調が忘れられない。井尻千男先生の御講義は非常に専門的で高度な内容であつた。個々を断片的にはある程度理解するものの、総合的に把握するといふ面から自らの力不足を感じた。「自分の生き方がどれくらゐマーケット原理に支配されてゐるのかを点検してほしい」と言はれたことを自らの中で再確認してみたいと思ふ。

大空を従へること聳え立つす桃色の富士の頂

仰ぎ見ればそのたびごとに姿変ゆ朝に夕に赤に緑に

翌朝に頂を目指す人ありか山際に白き灯りのともりて

第二十三班—社会人—

心に残る合宿教室だつた

(新潟工科大学 大岡弘)

私にとって、すべての講義がすばらしく、心に残る合宿教室となった。天皇、歴史観、憲法、慰霊等に係る事柄について、今回の合宿教室で学んだ内容を踏まへて、今後、勉強してゆきたいと思ふ。

夜久先生の御講義をお聴きして

ユーモアゆ始め給ひし御講義の次第く〜に熱帯びてゆく

現実であり得ぬことは作者らのやむにやまれぬ表現なりとふ

変革への対応力を培い実践する

(伊佐ホームズ(株) 伊佐 裕)

長谷川三千子、小柳陽太郎両先生による二つの御講義は、古より連綿と交され続いて来た天皇と国民(臣下)の親子の情にも似た「まごころの交流」の美しさにお触れになるとともに、君臣の情の深さが国難をも凌いで来たという事実を明らかにした感銘深いお話であった。国際化の中における様々な変革への対応力は、私達自身(日本人)が大切にして来た生き方、物の見方、また、幾多の厳しくも悲しく美しい歴史的体験に深く思いを致す事により、自ずと培われて行くものと確信します。私は、今後の日常生活の中で、この合宿で得た確信を実践せずには居られません。

小柳陽太郎先生の御講義を拝して

湧き出づる心のうちを語り給ふ師の御姿は神の如くに

朝露の広野の径をたどること教への道のすがすがしきも



わかれ。「お元気で、また来年会ひませう」、再会を期してわかれを惜しむ。

日本人らしさを取り戻さねば

(社福岡県中小企業経営者協会 本田武生)

この合宿を通して、私自身「日本人」であることに喜びを感じました。戦後教育によって育った私にとって、戦前・戦後で区切られてしまった日本の歴史と文化があり、ややもすれば昔は昔、今は今、戦後の近代日本のみが国の本姿であるかの様に思ってしまう。しかし、多くのご講義で学んだとおり、日本の歴史や文化の系譜は断ち切るなどできない。私たち日本人は、支配ではなく共生の中に共創を求め、礼をつくし、道徳心の高い、感情豊かな日本人らしさを、決して変えてはならないのです。平和と安定の時代と教えられた現在はどうか。市場原理至上主義に巻き込まれ、自分は自分、自分さえ良ければ、自分さえ楽しければという個人主義が増大し、心は乱れています。国への誇りも失われています。古事記や短歌に触れることによって、先人の思いに時空を超えて共感できるという、すばらしい文化と感性を持った私たちは、今一度日本人らしさを取り戻すことをやらなくてはならない。そして、それがすばらしいこと、誇れることとして、次世代に継承していかねばならないと思います。

合宿最終日の朝を迎へて

班友と共に過まがごし学舎まがの別れの庭は雨に濡れなむ

古事記の輪読がよかった

(財世界聖典普及協会 松谷浩陽)

会社勤務の日常から離れ、四泊五日間という時間を使い、日本の国柄に思いを寄せてゆくという、普段はなかなか行い難いことがじっくり出来たことを嬉しく思う。何より「古事記」の原文をじっくり輪読できたことがよかった。夜久先生の御講義で、「神話や伝説は事実かどうか問題ではない」「祖先代々、その物語を味わい語り伝えてきたという事実が大切なのです」という御指摘が理解でき、また、古事記の文章表現の美しさを教えられた。「現実にはあり得ないような表現も出てくるが、それは、作者に、そうとしか表現のしようがない感情の高まりがあったからなのです」という御指摘をお聞きした時、古事記の奥の深さを改めて感じた。また、短歌創作において、言葉の一つ一つを正確に選びとることや、相互批評を受けることが、如何に大切なことかも、古事記や御製等を読んで行くうちに少しづつ分かってくる気がする。

合宿で学び合ひたることどもを心にとどめ家路に向はむ

心を平らかにして考える

(伊佐ホームズ棟 多田清久)

私は、社会人として大成してゆこうとする過程の中で、事実としての日本の歴史を学び、日本人としてのあるべき姿を意識しながら生きてゆくことの重要さを再確認することが出来たと思う。一番印象に残った言葉は、長谷川先生のおっしゃった“心を平らかにする”という言葉である。日本には日本の歴史があり、その中で私達が存在し得てい

ることを踏まえ、様々な余計な概念を取りさり、心を平らかにして、ありのままの、あるべくしてある日本人の姿を学び考えするという姿勢が、今の我々の為すべき事であることが、良く理解できた。私の将来、今後の日本について考え続けて行く中で、学んだことを活かしたいと思う。

先人のつくり給ひし歴史こそ我も帰すべきところなりけれ

我が子の為にも勉強したい

(日本植生(株) 今村行宏)

初日は前向きに取り組めず帰ることしか考えられなかった私ですが、二日目には何か一つは学んで帰ろうという気持ちになり、三日目の班別短歌相互批評が終った時には、同じ班の方とも短歌創作という共通の話題もでき、良き班友(先輩)が出来、来て良かったと思うようになり、短歌創作だけでなく講義も楽しくなり、最終日には帰りたいという思い、あと一日だけでもゆっくり皆さんと話をしたいという思いに変わりました。講義の内容については、私にとってはかなり難しいことばかりで、基本を学ぶ必要があると実感しました。我が子の為にも親である私が勉強して、学校の先生が教えてくれないことを教えてやらねばと思いました。

せんぱい
班友と心かよへば最終日ここで別れるは無念なりける

天皇陛下の御存在と短歌創作の意義

(日植緑地(株) 杉山 忠)

色々学んで行く中で、天皇陛下の御存在がどういう事かがよく分かりました。私達の世代は、戦後復旧し発展してから生まれたので、戦前・戦中に生まれた方々とは、天皇陛下に対する思いも全然違うと思います。しかしながら、現在、私が生まれ平和に暮らしてゆけるのは亡き先人達のおかげであるので、先人達に感謝しなければなりません。また、日本国の象徴としてずっと国民を思い続けてこられた天皇陛下にも感謝しなければなりません。また、短歌の素晴らしさにも気づかされました。自分の正直な思いを人にも伝わる様に創作するのはなかなか難しい事ですが、それが出来るのはすごい事だと思います。古来からの日本のよき文化として今後も受け継いで行き、より深く学んでいかなければなりません。その事が、日本国を愛し日本国民である事に誇りを持つ事だと思います。最後に学生達が自分の思いを熱弁している姿には、心を打たれました。「これからの日本の在り方を真剣に考え、自分が日本を守って行くんだ」と言う気持ちがあひしひしと伝わって来ました。自分自身の考え方を反省し、今後の生活を改めてゆこうと思えます。

合宿で学びしものを胸に秘め決意新たに日々を送らむ

写真班

私は今回写真班として参加させて頂きました。
(東京ビジュアルアーツ一年 中尾曜子)

初めは仕事のペースがつかめずイライラし、つかればかりがたまるような感じがして帰りたくてしかたありませんでした。途中で逃げだしてしまおうかと思つた程です。

しかし、3日目を迎えたあたりから、みなさんとの会話が少しずつ増えたことでその問題は解消されました。そのことで人と会話することは何をするにも重要なことだなど実感し、それからは人との会話交流を大切にしました。

撮影をしていてとても印象に残っているのは、参加されていた学生のみなさんの表情が日に日にイキイキとされてきたことでした。その表情は撮っていても、とても気持ち良かったです。

写真がうまく撮れているかどうか少し不安ですが、今は5日間仕事をやりとげた充実感でいっぱいです。

撮影に協力して頂いた参加者のみなさん、先生方に深く感謝いたします。

合宿中に創作された「短歌詠草」

——しきしまのみち——



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多く短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまうてをります。従つて、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつて、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠つた言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行つた様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分階級の人々が、学問知識の深淺、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に和歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば和歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、和歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、和歌を詠み交はすことによつて、人間にとつて最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合つてきたのです。祖先の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に祖先の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく祖先とつながりをもつた日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとつて最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同士の相互批評によつて集中的になされてゆきます。心の奥底に眠つてゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感を感じる、素朴にして溢れる人間性を取り戻さうとする

試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、名和長泰氏（久留米大学附設高校教諭）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌しい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きがはしはしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠つてをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・ガリ切り作業を通じて、翌日には歌稿となつて参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに折田豊生氏（熊本市役所）によつて、和歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもつて偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行なはれ短歌の表現を通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において寝食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

特に今年も合宿期間中に短歌の創作を二回体験していただき班員の心の交流がさらに深まりました。かうした短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。ここに載せた短歌はかうした営みの中で作られたものであり、合宿教室での生き生きとした肉声が聞こえてきます。また心と心の架け橋としての歌がまさしく参加者に実現されてゐることを、御読み取り下さればと念ずる次第です。

第一班

同志社大法一 石井一賢
うれしきは御先輩とともに雄大な富士の姿を
仰ぎしことなり

(二回目の作品)

小柳陽太郎先生の御講義を聞きて
国民と苦楽をともにとつとめらるる天皇仰ぐ
吾が国柄は

早稲田大学政経三 左近田 崇 仁
富士の山十年ぶりに仰ぎ見るその大きさに胸
迫りくる

(二回目の作品)

富士山のおもとの集ひに参加してそのすばら
しさに心満たさるる
慶応大法二 齋 藤 崇
いにしへと今も変はらぬ富士の山朝日を受け
て青く輝く

(二回目の作品)

青く澄む空に浮びし夏の雲仰ぎ見れば暑さ
忘るる
佐賀大理工五 和田 晃 次

早朝の晴れたる空にくつきりと赤みをおび
し夏の富士見ゆ

(二回目の作品)

第二回短歌創作の時間に

歌詠まむと広場に來たれば意外にもあまたの
友ら既にゐましぬ

あほ向けに苧られし芝に寝ころびて歌詠む友
を見るは楽しも

芝の香を運び吹き来る夕方のすずしき風にし
ばしたたすむ

乙女らの明るき笑ひ声広場にて響くを聞きて
うれしくなりぬ

福島県立医科大医一 齋 藤 揚 三
白い雲揺れる木々の音幻想の富士の景色に永
遠を思ふ

(二回目の作品)

合宿の学びの日々もをりをりに心に浮かぶは
貴方の面輪
東京学芸大学教育四 鹿 島 謙 輔
富士の霧何とも見えぬ私の目を亡き先人はい
かに思ふか

(二回目の作品)

東京では見えざる星がかがやきて心も清がし
富士の夜空は

東京大院人文社会系M2 東中野 多 聞
班員の元氣な姿を見し時に病の事は全て忘れ
つ

(二回目の作品)

第二班

長崎大教育三 辻 雅 充
語らひでいまさらながら足りぬもの多きに氣
づきしこののがゆさよ

(二回目の作品)

古事記国思ひの歌を詠みて
ふるさとの大和の国のすぐそばで亡くなり
けりヤマトタケルは

大正大院文M一 青 野 英 海
合宿に來るまで皆に理解されず孤独だったよ
わが魂は

(二回目の作品)

古代人の喜怒哀楽はあまりにもはげしかりし
に我驚きぬ
学習院大法一 幸 原 正 芳
今までの価値感全てくつがへり苦しむ我と喜
ぶ我よ

(二回目の作品)

御後の御身捨ててまで御子を守る愛の深さに
感じたりけり

佐賀大農四 大 串 直 也
我々の行く手はばみし雨雲も去りゆかむとし
晴間見えゆく

(二回目の作品)

靴とばし駈けりつはしやぎて走り回る子らは
笑顔に満ち満ちてあり

獨協大外一 中田 俊太郎

班友のその真剣に語る様に怠惰な我が身を強
く恥入る

(二回目の作品)

慰霊祭にて

み友らと声をそろへて海ゆかばうたへば心澄
みてゆくなり

日本大通信 石井 信博

演奏に合はせて君が代を高らかに歌ひ心が清
まりゆくなり

(二回目の作品)

古事記「白鳥の陵」を読みて

白鳥に姿変はりて天翔ける倭建の命美し

第三班

明星大文一 久田 広光

大らかに見守り下さる富士山にバスから降り
て心寄せたし

(二回目の作品)

夜久先生の御講義

古事記のいのちを味はふ先生の声は心の中に
深く響けり

繰り返し繰り返しつづ読みゆきて古事記のい
のち受け継ぎゆきたし

亜細亜大経営三 福田 進治

雨上がりご光が富士を照らす背景に登山でき
ぬ思ひやはらぐ

(二回目の作品)

班友と絆の芽生えを感じつつ我らの負へる責
任を思ふ

学習院大法二 佐藤 洋平

顔知らぬ同志の集ふ合宿は期待と不安が入り
交りけり

(二回目の作品)

心から大君思ひて流すらし友の涙に驚きにけ
り

武蔵工大大三 中尾 紘輔

山の辺に光を映す棚鏡今年も夏が来りし頃か
な

(二回目の作品)

大君の胸にいだかれし己が身は大和の明日を
担はんとする

帝京大法四 横畑 雄基

事前より準備をいたす我々をやさしく富士は
見守りにけり

(二回目の作品)

昭和天皇様について

身をもちて國柄守らるる御姿に我が目頭も熱
くなりぬる

マツカーカーへの直訴状を読む

ひしひしと天皇を想ひし國民のあるべき姿こ
こに見いづる

輪読の途中で涙する友もあり吾が目頭もまた
熱くなる

九州大経四 石井 英俊

かくばかり思はるる講師の御姿に合宿に臨む
姿勢正さる

(二回目の作品)

「マツカーカーへの直訴状」(伊藤たか)
をよみて

ただひとつ忍びがたきは大君の御身にかかる
ことにしありけり

いかばかり小さき御不幸も大君の御事なりせ
ば耐へられはせじ

大君をただ守らむとひたに思ふかなしき願ひ
に涙こぼるも

戦ひに敗れたれども我が国はこころひとつに
立ちあがりけり

慶応大理工一 堀江 良明

富士の山すそより見れば青々と登りてみれば
厚き雲かな

(二回目の作品)

しめやかな慰霊の御歌を聞きながら亡き人の御霊に思ひはせたり

静かに響きて慰霊の庭に流れゆく御歌聞きつつ先人を思ふ

第四班

早稲田大政経四 伊藤 俊介

富士よりの眺め期待し登れども新五合目は霧にかこまる

(二回目の作品)

慰霊祭

祭文をまことをこめて奉る先生の声に身の引き締まる

長崎大教育三 益 富 孝 重
友どちと共に体を動かして流す汗は心地良きかな

(二回目の作品)

『終戦秘史』を讀みて

天皇の御心にただ泣きたりし大人らの姿胸に刻まむ

京都大文一 服 部 源 憲

雨あがり一球追ひて汗流す友らの声に心晴れゆく

(二回目の作品)

友どちと声を合はせて「古事記」を讀めば強きしらの胸に迫りく

千三百年の時経たるとは思はれぬ「古事記」のしらべ我に迫りく

東京大文Ⅲ一 石 村 善之亮

見上ぐれば八雲たなびく富士の里雲の多きに心洗はる

(二回目の作品)

とことばに皇国を思ひたまふすめろぎのその御心に応へてゆきたし

近畿大理工三 蔭 山 武 志

発表をせねばと心あせれどもまとまらぬをもどかしく思ふ

(二回目の作品)

天皇についてのご御義を聴きて
天皇を思ふ心の我が胸に何と激しく伝はりくるか

慶応大法一 宝 田 寿 哉

美しや富士のふもとの日の丸よ他にふさはしき国旗やありけむ

(二回目の作品)

合宿にて初めて知りぬ大君の御世御世をへし深き御心

北九州大法四 小 松 昭 博

靈峰の誉れも高き富士の山予期せぬ雨に霞た

なびく

(二回目の作品)

若きより導かれたる師とともに同じき道を歩まむと思ふ

第五班

九州大法四 星 原 大 輔

山口先生の御講義

亡くなられし師(小田村先生)のみ教へを受け継がむと誓つまらせて決意語られき

登壇中聲つまらせて語られし講師の姿胸にせまりき

(二回目の作品)

ただよへる雲をしたがへ青空にしるくそびゆる富士ぞ美し

長谷川先生の御講義を受けて
國民をいかになるとも護こそ天皇の道にあるらし

(二回目の作品)

身はいかにも民を護らむと天皇は宣らせたまひき

(二回目の作品)

佐賀大経三 市 原 智 広
様々に知的戦ひくり広げられ我は実感の言葉はきたし

(二回目の作品)

夜久先生のご講話を聞きて

千三百年の年月へても今もなほ読まるるは古
事記のいのちなるかな

小柳先生の講義を聞きて

先生の思ひの深きお言葉を聞けば心のあたた
まるかな

関西大文三 寺 田 剛 司

雨が降りむしあつき中風呂入る風呂上がりに
は空澄みわたる

(二回目の作品)

和歌読みて友らの語らひ聞き入れば我実感す
言葉の重みを

学習院大法四 北 島 治 樹

先生の語る言葉に胸打たれまばたきすらもで
きず聞き入る

(二回目の作品)

霊峰のふもとに集ふ英霊に永遠とほのやすらぎ我
ら祈らむ

古への祭事によりてみちびかれ民族性を呼び
さまさるる

伝統の祈りささげる最中にて基地チヤゴの音なぜか
心にひびく

東北栄養専門学校 原 田 雄 亮

富士の峰霧に覆はれ山頂を拝めず帰るこのも
どかしさ

(二回目の作品)

夜明けまで語り合ひたる友どちの目覚めし顔
の眠たげに見ゆ

防衛大理工一 宮 川 貴 仁

あのころに伝へられずにこの想ひ胸の中にて
今も彷徨ふ

(二回目の作品)

こもれば鳥のさへづり聞きをれば我は夢へ
と堕ちて行きけり

早稲田大二文四 浦 義 勝

班員のひとり欠けるもまとまらず医務室に友
をむかへに行きぬ

(二回目の作品)

空向けて投げるも飛べずまた我の手のひらに
落つる小さき虫よ

第六班

島根大教育五 三 島 明

青空にすそ野広げて堂々とそびえ立ちたる富
士は雄々しき

(二回目の作品)

古事記の講義を受けて

古いにしへの記ふみ読み行けば建たけだけ々し倭建の御姿俣ば
ゆ

学習院大文二 高 橋 雅 樹

冷え亘る富士の山路を行くバスの窓の外なる
霧深かりし

(二回目の作品)

夜のつどひに古事記の劇を演ださんとて車座に
なり語るは楽し

日本大文理四 山 内 暁 生

富士山の雲をしたがへるその姿いと雄大で心
洗はるる

(二回目の作品)

講義を終へし父
目が合ひて顔を赤らめ笑ひつつ早く行けよと
手ぶりで示す

東農大応用生物科学一 菅 間 勇

考へを否定されてくやしけど何とも言へぬこ
の快感

(二回目の作品)

友どちと語り合ふごと己が身を高めゆかんと
ひたに思はる

福岡工業大工二 小 林 広 和

飾らずに心の中をありのまま伝へることが短
歌の秘訣

(二回目の作品)

時を経て友との絆深まれば惜しく思へり別る
る時間ときを

麗澤大国際経済四 鈴木良登

じわじわと友らの思ひわかりこしそれが支へ
で心嬉しき

(二回目の作品)

合宿の早く終はるを願へども友との別れを思
へばつらし

長崎大教育一 野元幸憲

富士に来ていざ登らむとする時に雨降りおち
て思ひ破れり

(二回目の作品)

懸命に講義聞かむと努むるもおそふ眠けをい
かにかはせむ

第七班

明星大人文四 小林春輝

班友と向き合ふことの難しさ言葉にならぬも
どかしさかな

(二回目の作品)

伊藤たかさんの直訴状を読みし折

国民の我が身を捨てて大君を守らん心まこと
なりけり

防衛大人文社会科学四 清水洋平

曲道眼下に雲を見下ろして吾れらがバスは富
士へと向ふ

(二回目の作品)

慰霊祭の折 去年の冬訪れし硫黄島を偲
びて

勇しく猛り散りにしものふの悲しき命よみ
がへりくる

国思ひ命捧げしものふの熱しひたに伝へゆ
かなむ

大阪外大外国語二 金子明弘

富士山に再び会ひてよみがへる小学校の懐し
き日々

(二回目の作品)

居眠りを起こさるるたびムチを入れ気力なえ
たる我と戦ふ

千葉商科大商経四 武内裕一郎

時差ボケが未だ直らず疲れはてメールで飛ば
す我苦しき

(二回目の作品)

合宿四日目を終はりし折に
吾にせまる明かき星夜に願ひしは永遠に忘る
なげふの心

静岡大教育二 斎藤元暁

夢に見た白き富士山裏みれば赤土をもつ黒き
岩山

(二回目の作品)

耐へがたき重荷負はれる天皇の心情友としの

びあひけり

友のごと深き実感味はへずもどかしけれど心
寄せけり

福岡教育大教育五 別府正智

昨日は空澄みわたる夏晴れにあれどもけふは
など雨降るか

(二回目の作品)

伊藤たかさんの直訴状を読みし折
わが君をいのちにかへてまもらむと血にてし
るせし文に涙す

第八班

福岡教育大教育二 小林国平

班長の任務あづかり不安な中班友の笑顔に我
救はるる

(二回目の作品)

天皇の治めたまふ日の本に生まるることのあ
りがたきかな

天皇の国民思はるる御心にこのち我はいか
にこたへん

北九州大法三 松岡貴之

車窓から生まれて初めて見た富士はりりしく
強く美しく立つ

(二回目の作品)

雲もなく澄み渡る空の紺碧に深緑の山あざやかなにはゆ

早稲田大社会科学四 白 石 資 隆

皆共に写真撮らんと言はれしが我は恥づかしく照れて逃げたり

(二回目の作品)

講義後に「分からなかった」との声聞きて同じ思ひの友見出しぬ

島根大法文一 池 田 敏 晃

次回には頂きにまで登らむと帰りの車中一人考ふ

(二回目の作品)

硫黄島に訪れし人の話を聞きて

灼熱の壕に籠りて戦ひし兵思へば胸せまりくる

後の世に永く伝はる戦なれど斃れし人を思へば悲し

玉碎の報を聞きし故郷の家族の悲しみ如何ばかりならむ

慰霊祭にて

国がため斃れし人を思ひつつ声の限り海ゆかば歌ふ

響き来るラツパの音はみまつりのみたま鎮むる如くきこゆる

九州産業大経一 深 田 恭 兵

晴れの日に夜空に広がる星の群れ疲れをいやす至福の時よ

(二回目の作品)

小柳先生が初日に班に來られた時のことを思ひ返して

合宿も日を重ね来て先生のお言葉しみじみ思ひ返さるる

九州大医一 中 島 健 太郎

壇上で涙ぐみつつ熱弁する師に惜しみない拍手をおくる

見上ぐれば明日の「晴れ」を予感させる富士の夜空の満天の星

(二回目の作品)

小柳先生が我が班の班別討論に加はられし折

我々の足らざるところを適確に御指摘さるる師ぞありがたき

小柳先生の御講義

天皇の国思はるる御心は昔も今も変はらざりけり

第九班

長崎大教育四 外 村 聖 典

五合目に來たれど霧立ち雨ふりて富士登りた

る心地せぬかも

(二回目の作品)

倭建命の話を讀みて

建き皇子の命果てなむ時せまり故里思ひ歌を詠みたまふ

故里を「国のまほろば美し」と詠みたまひたる歌ぞかなしき

亜細亜大法四 清 田 直 紀

雨雲で見えぬ富士山思ひつつ夢にまどろみ我富士を見る

(二回目の作品)

富士の麓草原わたる涼風に葉月といへど秋の心地す

佐賀大経四 小 宮 宏

全国から集ひし友と交流し仲良くなれてうれしかりけり

(二回目の作品)

太き綱を力のかぎり引きに引き我が心一つとなれり

学習院大法三 森 川 洋 一郎

バスケット走つてとんで汗だくだ肌をたたけばしぶきもはねる

(二回目の作品)

まどろめば父の思ひ出こもりたる家具浮かびきてなつかしきかな

新聞記者 福田 仁

新しき出会ひに思ひめぐらせつ朝一番の特急に乘る

(二回目の作品)

幼子の我に神代の物語せし祖父しのぼる「古事記」を読めば

第十一班

長崎大葉二日 高秀子

ハイキングの折

次に来る時には見事に晴れわたり富士の眺めを見せてほしきも

(二回目の作品)

久びさに富士の姿をすそのまでながめわたして心をどりぬ

ベンチの木をかじりてけづるスズメバチ巢をばつくるか飛びたちゆきぬ

東北女子短大生活二 菊池 美穂

学生の嬉し楽しの富士山の登りて悲し天の川かな

(二回目の作品)

ふく風にもみぢ葉そよそよゆれてゐて幼き手のごとかはゆきもみぢ葉

島根大法文一 福西明子

おひ繁る木々の緑葉空おほひまだらの影が我に落ちにき

(二回目の作品)

広場にて見上ぐる空の積乱雲気つけば早も八月なるかな

中村学園大家政二 松田 幸子

夏の夜にひとときは映える星々は富士の山端の小屋の明かりぞ

(二回目の作品)

見るごとに刻一刻と変わりゆく富士のすがたに心うたるとる

九州女子大音楽四 石松 知恵

星野先生に班討に来て戴きし折日の本の成り建つ由来はむつびあふ世界にぞあると師は語らるる

(二回目の作品)

白雲に輝く大富士仰ぎ見ればみ山に神のやどるかと思ふ

東北女子大家政三 小野 慶実

小田村先生を追悼したる山口先生の講演を聞きて

涙して先生の心受け継ぐと語らるる師に我も続かむ

(二回目の作品)

雲晴れて姿見せたる富士を背に班友と肩組み写真撮りぬ

第十二班

昭和記念館設立準備会 木村 有紀子

美しき夜空を仰ぎ心踊り星に願ひをたくしみるかな

(二回目の作品)

橘の姫の御心しのびたる我の心のせつなかりけり

国立音大音楽一 松下 加奈

真つ青な空に浮かぶ富士の山仰ぎ見れば心震へる

(二回目の作品)

国民を常思はるる天皇のおはします国に生まれてうれし

東北女子大家政二 福士 紅美

はるばると富士のふもとに来てみても登れないので雨を恨んだ

(二回目の作品)

声合はせ綱に力一にしてつひに勝ちたるときぞうれしき

福岡教育大教育三 相浦 佐知子

車窓から花をみて

道すがらわきに咲きたるちようちんの小さき花も雨にぬれたる

(二回目の作品)

班別研修で長内先生のお話をお聞きして清らかな涙を流すはまごころの始めなりしと師はのたまひし

清らかな涙を流し己が身の内より伝統生きてゆきたし

日の本に生まれしことのよろこびを感じしときに涙流れむ

国文研 清 水 久仁子

山口先生のお話しを拝聴せし折に

志 つぎて若者今立てと語らふ師の目に涙かがやく

(二回目の作品)

班別研修にて

自づから手を上げ意見語ります友らの言葉心にひびけり

天皇の御心しのびみ友らと共に涙を流し語らふ

長崎県立大経済二 橋 本 陽 子

富士山のおもとにゐること知らさんと友へ絵はがきを出したしと思ふ

(二回目の作品)

我もまた学ばんと思ふいにしへゆ伝へてきたる古事記を

そよ風に揺るるこずゑに紅葉のほかに赤く色づきたり

東北女子短大保育二 豊 川 祥 子
サーブ入れ一点取りしその時の友の声聞き力みなぎる

(二回目の作品)

輪になつて恋愛話に花咲かせ時をわすれて目を輝かす

第十三班

武蔵野音大音楽四 小 林 祐 子
ぎこちない言葉の中にも暖かい班友達の心伝はる

(二回目の作品)

緑の原に集ふ友らの足もとに朝露静かに輝きにけり

佐賀大教育四 橋 本 さつき
神戸さんが班別研修で涙ながらにうちあけてくれたことに

涙目に思ひしことをかくさずに言ひける汝をうれしく思ふ

(二回目の作品)

長谷川先生の質疑応答の時のお姿を見て学生の問ひし言葉にいくたびも笑みて深くもうなづく先生はも

鹿兒島大農四 葉 棚 奈緒子
あをぎ見れば雲一つなき大空に富士の高峰はそびえ立つかな

(二回目の作品)

登りゆく道のしるべと富士の嶺にともる灯りの遠く見ゆるも

目覚むれば郭公の鳴くこの朝外の木立はゆれかがやけり

長崎大教育三 中 園 まどか

友どちと言葉かはして夕食を食ふればたのし一時なるかな

(二回目の作品)

英霊の見守りありて我が命今ここにありとしまじみ思ふ

東北女子短大保育二 橋 本 みどり
富士山へ登り行きつつバスの中雨を眺めて青空探す

(二回目の作品)

いつの日か素敵な人と逢へるやう今は我身をひたすら磨かむ

国立音大音楽一 田 中 妙 佳
富士に着き澄みわたりたる空見上げ星の明か

りに心安らぐ

(二回目の作品)

日程を終へゆくたびにつのりゆく御国の唱歌
をより知りたしと

第十四班

残波ロイヤルホテル 上原真紀
班友の声を詰まらせし姿に触れ思ひ伝はりて
胸打たれたり

(二回目の作品)

先生の古事記のお話し聞きなれば古典の魅力
に我すひ込まるる

福岡大科目等履修生二 諫山由紀
体調の悪しとふ我をこまやかに気づかひくる
る友はやさしと

(二回目の作品)

友どちと古事記ふるこじの劇せむと思ひめぐらす時ぞ
たのしき

我ら読む古事記の言の葉は千年の昔の響き伝
ふる

あるがま、の言葉の響き残さむと一文字く
選ばれしとふ

東筑紫短大食物栄養二 野口純子
真青なる空にもくもくと浮かびたる雲はゆつ

くりと流れゆくなり

(二回目の作品)

合宿の中で

ともすればとらはれがちなる我なれど母を思
へば身の正さるる

ギャラリー喫茶はえゆ 星野有佳子

昨日より楽しみにせしハイキング雨降り出し
て中止になりぬ

(二回目の作品)

年来の友の悲報を受けとりし祖父の哀しみい
かばかりかと思ふ

大妻短大家政一 小林絃子

表富士雨で残念がる友だちと語る車内も楽し
けるかな

(二回目の作品)

今年だけとしぶしぶ来たりし集ひにて多くの
事を学びし我は

来年はかくしまほしとおのづから思ひめぐら
す我に驚く

こんなにも素直になれし我のそばにはともに
過ごしし友の顔あり

東北女子大家政二 成田有紀子

ざあざあど降りしきる雨見つめれど晴れない
空にくもる我が顔

(二回目の作品)

倭建命の弟橘比売の件りを読みて

夏の日^{なつ}に友と古事記を読みゆけば富士に響け
る後の歌よ

島根大法文一 井田和美

すぎてゆく緑濃き中白き花美しき姿に目を奪
はるる

(二回目の作品)

木陰にて本を読みたる我の背を吹きぬけてゆ
く風の涼しさ

中村学園大家政二 井上香織

富士の山足をふみ入れ歩く日がいついつの日
になりけるかな

(二回目の作品)

合宿の終はり近づく
合宿で多くのことを学び得て忘れてならじと
思ふけふかな

第二十一班

富士の山霧から雨にかはるなら心の中の移り
にも似て

(二回目の作品)

らちもなき想ひに心めぐらすも富士の涼風すずかぜ吾
をば忘る

靖國神社 小山 末吉
ふりむけば富士の高峯に笠かぶる氣候変はると心に思ふ

(二回目の作品)

篝火を祭りの庭にたきをれば集へる友ら声なく見つむ

乃木神社 松 吉 宣 和

富士のさと我も参加す合宿に一年ぶりに友と逢ける

(二回目の作品)

霊祭る斎庭しつらへ護みて仕へ奉らむかがり火のもと

日本植生(株) 糸 永 寛

通勤の合ひ間に見える富士山に登山できずに心に残り

(二回目の作品)

大富士の高原に集ひ朝日浴び心地よきかな友と語りて

中島法律事務所 中 島 繁 樹

バスの中眠れるうちに富士山の雨ふりしきる新腹に來ぬ

(二回目の作品)

師はると語り給へりわが国の君と民のこのころかよふを

国民と苦樂を共にし給へる天皇いますこれぞ

国がら

富士通 浜 田 實

目の前に迫り映りし富士の山気高きすがたの美しきかな

日の御旗風にはためき真近くも赤き富士が嶺

青空に映ゆ

第二十二班

つりばし莊 大 塩 耕 三

御講義をお聞きして

二十年の年月を経て今もなほ師のみ言葉の力強きも

林兼産業(株) 山 中 康 司

全員が心あはせて合掌しいただく食事はたのしかりけり

(二回目の作品)

おごそかに英霊思ひてしみじみと今日一日の幸かみしめにけり

新企産業(株) 杉 村 栄 治

初めての歌を作るといふ時は素直になれず悩むものなり

(二回目の作品)

合宿教室に参加して

御殿場で心を学ぶ人を見て想ひはせたる松下村塾

故郷の志士のごとくと思へども力足らはぬ我に恥入る

合宿の終はりに近づきふと思ふいかにあらむか平成の志士

札幌西陵高校 本 田 格

富士の嶺の姿は見えず昨日見しとんばはどこに羽休むらむ

(二回目の作品)

国のため命捧げし御祖をしのぶ人らにさいはひあれや

下曽我小学校長 岩 越 豊 雄

さしのぼる旭にむかひてもろともにラジオ体操するはずがしも

五合目の富士のさま見むと思へども空かきくもり雨降りにけり

(二回目の作品)

朝あけの富士の裾野のをちこちにさまざまな小鳥にぎやかに鳴く

ひろごれる富士の裾野の遠くよりカッコーの声すうぐひすの声も

福岡県立水産高校 菅 原 亨 二

五合目が間近になると空曇り大粒の雨俄かに降り出す

初めての富士のみ山の散策を心待ちして居りにしものを

(二回目の作品)

班室から外を見てみた折に

山すその涼しき風がながれてきて疲れし身体からだに心地良きかな

日本植生株 中村 剛

富士の森に見知らぬ草木多くとも間近に見れぬもどかしさかな

(二回目の作品)

散策の折に

とらまへしカミキリを見て思ひ出す野遊びをせし幼なき日々を

くさむらに膨らむ嫁菜の蕾見て夏の終りの近づくを知る

川崎重工業株 山本 博 資

山口秀範氏の導入講義を聞きて

みまかりし師の君の文を繰り返へし引き給ひつつ偲び語りぬ

悠久の日の本の姿を信じつつ極め学べと厳しく語りぬ

第二十三班

新潟工科大学 大岡 弘

朝晴れの森にこだますカッコウや仏法僧の声のどかなり

天皇の御成婚みちぎり祝し建てられし施設使かじこふを畏しと思ふ

と思ふ

(二回目の作品)

皇后陛下御歌「うららか」を読みて

国民を統すべ給ひたる大御業おほみわざいかに苦なるか計り難しも

班別討論にて

率直な問ひを發する班員のその素直さをうれしく思ふ

福岡県中小企業経営者協会 本田 武生
雨走る窓より見上げる剣ヶ峰姿見えずにくやしさ募る

夏空を瞬時に雨と変へたるは恐しきかな自然の力

(二回目の作品)

「弟橘比売の御歌を拝して」

幾年いとしを経るも心に伝はりくる言の葉の調べ美しきかな

日本植生株 今村 行 宏

携帯の電源切つて富士登山仕事忘れて短歌つくるぞ

(二回目の作品)

御殿場で学びし日々もあとわづか別れを思へ

ば寂しさつものる

講義にて椅子は硬しと思へども愛着わきて硬さを樂しむ

(勸世界聖典普及協会 松谷 浩 陽)

吾々の足踏み入るをこばむごと五合目駐車場は霧につつまれ

中断の声はかかりて悲しくも静かにパスは駐車場を出る

(二回目の作品)

語らひの日々を重ねてやうやくに心うちとけ言葉交かはずも

見知らざる朋友ともどち富士のふる里に集ひ来たりて心通はず

夜久正雄先生の御講義を拝聴して

歌よみの道ひとすちに七十年をふみ越え来たる御姿尊うまし

青年に「古事記」の美うましさを教へ語る杖を携へ

富士登山山雨に流され登れずに悔しさまぎれに短歌をうたふ

(二回目の作品)

短歌創作の折に

夕暮れの静寂なりしこの時に鳥のさへづり心地よきかな

国民文化研究会

慰霊祭

小柳陽太郎先生の御講義を拜聴して
天皇の民を思はるる強き愛我が心にも深く刻
まん

亜細亜大学名誉教授 夜久正雄

事務局・写真班

カッコーの声に目覚めぬ驚きて起きいでて見
れば御殿場の宿
起きいでて宿の広庭めぐりつつ富士のすがた
をさがせど見えず
建物の上に見えたる富士の峯いただきあかく
朝日に映ゆる
をりをりに高なきわたるカッコーの声のきこ
えてつかれやすまる
心しる友らとあひて語らへばまひ和みてう
れひわする、
(株)宝辺商店代表取締役会長 宝辺正久
朝空に立つ大富士の野に咲ける一もと合歡あむの
花のいとしき
富士仰ぐ広き大野の合宿を亡き友らにぞ告げ
まつりなむ
海抜七百風吹き通ひ大富士に雪はかからずひ
るも涼しき
真日の中大山影と立つ富士を目に近々と仰ぐ
けふかな
山口秀範君合宿導入講義
師のみことば読みゆきてあなとだえたるその
たまゆらのいのちかなしも

淑徳中学校三 飯島明子

目の前のごんとそびえる富士山をさみしくす
るやうにおほふ雨雲

淑徳中学校三 大島一恵

夜空を見あげてみれば心うつ数へきれない星
のかがやき

淑徳中学校三 浜田怜子

朝の富士どんとかまへてりりしいが夜の富士
山しゅんとする

神奈川県立荏田高校二 網屋孝一

雨雲が立ちほだかりて富士の山願ひ通じず景
色見送り

横浜市立茅ヶ崎中学校三 網屋庄二

富士の山雲におほはれ休火山朝昼晩と姿を
変へる

東京ビジュアルアーツ 中尾曜子

星空の下に流れる山風に我身のつかれ闇にと
けゆく

祭場へとくらす夜道を並みてゆくわれらの足
音ひびきて反る
夜道ゆくわれらが足音に亡き友も加はり歩む
と思ひつつゆく
富士の野に篝火たきてをぎまつるみたまにさ
ざくと祝詞の声
大みうたしづかに高くとなへまつる声の夜空
に透るかしこし
このみちをただゆきなむと亡き人に祈るなり
けり富士慰霊祭

「感想自由発表」終りて深く息づけり富士を
覆へる雲に向ひて
富士と古事記に象徴されし合宿と山根運営委
員長述べ結びけり
運営するものみな言へりけりこの集ひは小田
村前理事長見守りまししと
元九州造形短期大学教授 小柳陽太郎
合宿第一日目の朝

すがやかに晴れしみに空にまなかひに迫りて仰
ぐ富士の神山
待ちに待ちし富士合宿の朝は来ぬ裾野さはや
かに風は吹きつ、

西空に遠くか、れる有明の月もさやかに仰ぐ
朝かな

雪はなけれ赤肌色の山肌の雄々しき富士に心
ひかる、

雨のためハイキング中止

いつしかた雲流れつ、バスの窓に水滴ありて
み空は暗し
のほりゆくままに雨足はげしくて道辺の木立
しとぬれたる

ハイキングの望み絶えたりさはあれど未練の
おもひ消しもかねつ、
五合目にバスは止りて時までど止むときもな
く雨のふりくる

○ 「夜の集ひ」に「冬の夜」を合唱す

故理事長のこよなくめでし「冬の夜」を偲び
つつ歌ふ迫る思ひに

燃えさかるファイヤーをかこむ友ら二百声を
かざりにうたふこのうた

明治のみ世のかなしき民のなりはひのひた偲
ばれてなつかしきうた

この歌の導きのままに日の本の心ふるさとに
帰るうれしき

歌ふままに胸は迫りてあふれくるおもひにた
へず涙流れつ

なき師の君もともに歌ひませ若きらとともに
うたひつぐ「冬の夜」のうた

元(社)国民文化研究会事務局長

長内俊平

妻への便りのはしに

有明の月なほ残る大空に富士の神山そそり立
つかも
朝の光うけて輝く頂きは赤見を帯びて神さび
てみゆ

○

郭公の鳴く音に夢をさましけり故山の家戸に
ゐるこちして

赤富士を友らと共に声あげて賞でつ、朝の集
ひに向ふ

山口君(山口秀範君)涙をのみて説きたりし
昨夜の話のまた甦りくる(八月二日)

○

合宿もつひに終りぬなき大人の霊のうつしき
導きのもと

大空もよく晴れたり富士の嶺も朝夕に向ひ
仰ぎつ

郭公も空高く鳴けりひぐらしも朝夕にかな
しく鳴ける

みくにのいのちにつらなる思ひに結ばれし友
らは昨日の友にはあらず

手をとりて励まし合ひつつ己が地ゆ歩みてゆ
かむ國のまさ道

拓殖大学総長 小田村 四郎

青年の家より富士山を望む

ゆく夏の空澄みわたりまなかひに仰ぐ富士が
嶺あざやかに映ゆ

夕暮れて頂近く点々ともし火光る山小屋な
らむか

富士山五合目ハイキング中止となる

杖つきて友と登りし想ひ出は六十年昔のこと
となりけり

八合目の小屋に泊れど御来光は拝み得ざりき
雲さへぎりて

此の度はバスで登りて山道を暫し歩むを樂し
みたりしに

思はざりき俄かに雨の降りしきりバスを降り
ずて悔しきろかも

○

四日目の夕刻、富士を仰ぎて

くろぐるとそびゆる富士の頂きに夕暁け雲の
赤く輝やく

合宿終了す

くさぐさの思ひのたけを語りゆく若き友らの
姿たのもし
樂しかりし五日の集ひけふ終へて家路をさし

て山下りゆく
をちこちに分れゆくとも国を思ふ心一つにつ
とめゆかなむ

(社)国民文化研究会理事長 上村 和男
富士の峯を朝ごと仰ぎ美しき姿に心あらはれ
にける

朝あけに峯はあかねに輝きて雄々しき姿せま
りきにけり

市ヶ谷漢方クリニック院長 桑木 崇秀
仰ぎ見る富士は雄々しき日の本一の山は富士
とはよくぞ言ひしぞ

日の本に山はさはあれ富士山にまされる山は
ありと思へず
富士の下若きら集ひ日の本の道学びて帰る嬉
しからずや

講話を終へて

言ひたきことの余りにも多くして何も言へず
無念の思ひ胸をかき上ぐ
日の本は今や危ふし若きらよ国の礎守るは君
らぞ

今はただ若きら頼む年老いて心あせれどせん
すべなければ

(株)中央塩ビ製作所取締役 星野 貢
学生の頃五合目にて宿を取り軍事教練受けし
このところ

数ふれば五十数年の昔しなり地形は一変様変
りして

○ 〇 〇 〇
み病の友を思ふ

久しぶりに変りなき友と眞向へば心はなごみ
語るもたのし

遠く離れ病む身養ふ友をしのび問ひつ答へつ
しばし語りぬ

眞向ひてうつつに語るすべなくも心のつなが
る友なつかしき

山田・徳永の両大兄この日頃いかがまします
か幸祈るなり

来年は九州の地での合宿ぞ恙なくましてその
日待たるる

元法政大学 人事部長 香川 亮 二
去年今年先達二人みまかりてはじめての集ひ
富士に迎へぬ

前の理事長いまさぬ集ひになりとても参らむ
ものとの出でたちてきぬ

近々とそびゆる富士は淡くけぶり夏のよそは
ひして迎へますかと

つ、がなく盛んなれとたゞに祈りつ、わが乗
れる車は進みゆくなり

○

集ひいまだ半ばならぬにやむなくて一人去ら

むとす会場を後に
車まつま薄黒き雲の濃さをましひろごりてき
ぬ頭上おほひて

間なくして細かき雨の音もなく降り出だして
は土を濡らしゆく
富士に向ひし友らいかにぞと案じつ、をるに

雨足繁くなりゆく
つつがなく帰りたまへとひたすらに空仰ぎつ
つ念じまつるも

舞岡八幡宮司 關 正 臣
降る雨に行手煙れる山路を休まずり行く我
が車は

○ 〇 〇 〇
古の人等挙りて仰ぎけむ富士の嶺をあふぐ
我等も

いづかたに分れ住みても富士の嶺に励みしこ
とを思ひ出してむ

元高千穂商科大学教授 名越 二荒之助
沢部寿孫君、インドネシアより参加す

きびしがる仕事の合間に歌集作り送り続けし
「澤部通信」

別れ住む友の心を繁がむと異国ゆ送らる歌集
尊し

○ 〇 〇 〇
み友らのあつき情と清浄の富士に手をあはせ

私は去るなり

元佐賀商業高校教諭 末次 祐 司

思はずも両手合はせて祈りたり朝日にそむる清き姿に

雲もなき青きみ空にそびえたつ富士のみ姿あかず見守る

○

生涯に一たびはとの願ひ果し富士のすそ野の集ひ嬉しき

古ゆみおやも仰ぎし富士の嶺は神々しくも空にそびえり

神富士と拝み仰ぐみおやらの姿偲べば靈氣身に満つ

大君と民とを結ぶ一本の大いなる柱貫きてあり

小田村寅二郎先生を偲びまつりて

目に見えぬ大人ののみ靈に導かれ若き友らはふるひ立ちたり

不動産鑑定士 松 吉 基 順

小田村寅二郎大人を偲びて

先達の大人逝きませど力あはせ友ら集ひぬ御殿場の里

友らと共に君が代唱ひ御殿場の集ひ生まれど大人はいまさず

亡き大人の遺せしみ心友らと共にいや継ぎみ

靈をなごめまつらむ

御殿場の我らが集ひ天翔けり守らせたまへ大人のみ靈よ

○

セミナーの講義の流れ今年はも関連しあひて奇しきなるかな

小田村の大人ののみ靈のよりそひて守りまししか我らが集ひを

み祖らのみ守り導きありてこそ我らが営み永久にと祈る

元浄土真宗本願寺派 光隆寺 僧侶

岡 棟 猛

日の本に生まれし甲斐は富士の嶺に登るにありと聞きしを思ひぬ

その思ひ今ぞ果すと宿舎にて間近く仰ぎぬ富士の高嶺を

ま澄みたる朝あけの空に富士の峯おごそかにそびゆかしこかりけり

元サンデン交通(株)取締役 加 藤 善 之 縁濃きさくら並木のかた見れば赤富士が嶺そびえ立つみゆ

眞夏日の朝の光にそびえ立つ赤富士の姿仰ぎみつむる

○

若きらの迷はぬ求道心みつつけたり御殿場合宿

富士のすそ野に

今はなき小田村理事長の導きと偲ばるるかな

〔全体感想発表〕は

四十四年つみ重ねこし合宿のいま花咲かむとすか若き友らに

日本の進むべき道わかからはつかみ得たりぬ外つ国に向ひても

昭和音楽大学講師 國 武 忠 彦

雨あがり縁さやけき富士の野にひぐらしの鳴く声に聞きいる

○

夜久正雄先生の御講義をききて

会ひたしと師の君待ちて今日の日は迎へる日なりうれしきかな

若き日に「古事記」を教はりし師の君はいま杖つきてをり

三十年の歳月過ぎて今ここに再び学ぶ幸せを思ふ

老いたり師の君はのたまへど声張りありて何と健やか

師の君の「フルトアキ」をよみあぐるなつかしき声に耳澄ますなり

還らざるオトタチバナの悲しみも師の君の声にて今よみがへる

師の君と別れて仰ぐ富士の嶺は夕映えのなか

すべて見せたり

日本インドネシア・エル・エヌ・ジー(株)取締役

澤部 壽 孫

山口秀範さんの合宿導入講義

活き活きと君が語れば若き日も目を輝やか
せ聴き入る如し

在りし日の師の君ビデオに語りますみ姿
拝せば胸あつくなる

師の君のいまさぬ合宿たとへなく寂しき
なかに始まりをれば

日の本のまさ道求めたかひの一生終へ
ましし師の君なりき

師の君の志受け継ぎ生きゆかむ力湧き
来る友の語れば

○

合宿三日目の夕

かなかなとひぐらし鳴けば亡き友の
声の今しも聞こゆるごとし

慰霊祭

逝きましたし友と師の君連れ立ちて
みまつりの庭に天降りますらむ

國武忠彦先生の「古事記」の御講義

倭建命の雄々しくかなしき一生をば
息もつかせず語り給ひぬ

(社)国民文化研究会会員 島 村 善 子

待ちに待ちし富士のハイクに臨みしが
にはか雨にてやむなく戻りぬ

あしたには雄姿を仰ぎ期待せし富士
のハイクの成らぬはくやし

○

おだやかな雄姿を見せし富士の嶺は
しかと生きよとさとすが如し

全体感想発表を聞きて

ひとりまたひとりが語る感想は強く
さはやかに心うつなり

新日本製鐵(株)プラント事業部次長

今 林 賢 郁

山口兄の「合宿導入講義」を聞きて
みまかりし師の御姿を写しつづ君は
語りゆくあふるる思ひを

なつかしくまた慕はしき師の君の
いまさぬ淋しさしみに思ふ

足らはざる身にはあれども賜はりし
み教へ継ぎて生きむと語りぬ

○

「きはまればまたひらけゆく道あり」と
信じて生きる他に術なし

(株)講談社・資料センター室長

磯 貝 保 博

裾野から頂きまでは雲一つなき夏空
に雄々し

く立てり

○

小田村理事長のお姿なき開会式にて

壇上でみ声するどく訴ふるみ姿なきは
さびしかりけり

足らざるを互ひにおぎなひ友らと心
を合はせ共に進まむ

(株)竹中工務店C M本部部长 稲 津 利比古

眼前に迫りて立てる富士山の稜線し
るく雄々しくぞ見ゆ

山頂に白雲か、りし富士山は山肌黒く
神々しきかも

○

小柳陽太郎先生のご講義を聞きて

天皇の「国民と共に生きむ」とふあり
がたき思ひ胸に迫り来

皇后様の「象徴」への思ひはそのまま
に今上陛下と同じものなり

皇后様の「耐えて生きねば」とふ御
言葉のその深さゆゑ涙出で来ぬ

紀宮様の「災害に心を寄せ続け」と
ふ御言葉に国民思ふご皇室しのびぬ

天皇の日々のご心労しはばれて皇后様
は歌に詠み給へり

神奈川県立厚木南高等学校（定時制）教諭

山内 健生

五合目に近づくにつれ雨あしのはげしくなり
て窓の外を見る

予想だにせざりし雨のふりしきてバスから降
りるがかなはずなりぬ

いくたびも計画練りて準備せし指揮班員はく
ちをしからん

○ 夜久正雄先生のご登壇

杖つきて背はかがめどわが耳に入りくる声は
力強しも

説きたまふみ声は変はらずみ力のみなぎりこ
もれる『古事記』のお話

背の君のために海へと入りませる涯なき比売
（弟橘比売）の胸内説かるる

「昔置八重、皮置八重、…」としかほかに記
すにすべなくかく記せしとも

ふることのふみ読み上ぐる師の君のみ声清し
く講堂に満つ

混同して神話と歴史を取り上ぐるは誤りなり
とのみ声つよしも

それぞれに神話と歴史に意味あるを紛れ語る
は誤りなりきと

閉会の式の最中に師の君（小田村寅二郎先生）
の面輪が浮びて胸あつくなる

力強き歌声高くとどろけり若きらと歌ふ「神
洲不滅」

声そろへ「進めこの道」唄ふればふと浮び来
る師の君の眼差し

この調べこの歌声を師の君は…と思ふはたか
ら声のつまりぬ

師の君よ我が歌声聞きませと思へばふるへ
声の出で来ず

壇上に立ちてわれらに説きたまふごぞのみ姿
甦り来る

阿蘇の地でみすがた仰ぎてひととせの時の経
つ今に師の君いまさず

師の君のいまさぬうつつのうつつとは覚え
集ひは終らんとする

○ つねよりは体にきつく感ぜしもやるべき課題
を見出しうれし

家のこと子らのことをもさらにまた読むべき
書のあまたあるを覚ゆ

社国民文化研究会事務局長 山口 秀 範

前田秀一郎君と学生時代以来の合宿を共
にせり

久々に友と語れば二十年の時の隔たりいつし
か消え行く

一言を逃さず聴きて鋭くも切り返す友を懐し
み思ふ

○ 閉会式にて

若きらは迷ひ放たれ胸底ゆ高らかに唄ふ我ら
が国歌を

法制化論ふより國民の誇り教ふる場育まむ
諸共に唄ふ「君が代」響き合ひ富士が嶺越え

て天に届けむ

訥々としかもあふるる思ひもて語りゆく君を
頼もしと見つ（小林国平君の参加者代表挨拶）

しきしまの道に生きませしおぢい様も君の雄
姿を見そなはずらむ（第八班・班長、福岡教
育大学二年）

かくばかり意義ある集ひに来む年は友ら求ぎ
てと聴くぞ嬉しき

○ 神去りし師のみ思ひに支へられ四十四回も恙
なく終ふ

深々と閉会の一礼しつつふと「昇神の儀」に
臨める心地す

五日間の集ひの折り節師の君のみ霊と共に過

ごせし我らは
逝きませしゆこの二月のゆくりなき日々は速
のきいま胸軽し

福岡県立嘉穂高校教諭 小野 吉宣
時のまに天候かはり富士山は雲につつまれ見
えずなりたり

我等乗るバスのぱりゆく道の辺の緑こき中う
の花の咲く

○
ひもろぎに幽冥へだつる神々を呼ばひ給へり
松吉兄は

祭文を奏上するとき早も来て我は進みぬ祭壇
の前
神々に頭をたれて拍手を打てば虚空にすひこ
まるるごと

神々よ見守り給へと合宿の開かれゆく様奏上
しけり

新しき神となられし師の君の御名をし呼べば
胸つまりけり

胸せまり悲しかけり目にみえぬ神となります
師の君思へば

○
中島繁樹兄に運営委員長を打診すれば
しばらくは考へこみけりあみも消え言葉も失
せて重責思ふや

いつの日か負はねばならぬと思ひしと胸内語
り決断しけり

福岡のあまたの友とより直し中島兄と明るく

進まむ

神奈川県立小田原城内高校教諭

原 川 猛 雄

突然に雨ふりはじめ富士山に登りし友らいか
にいまさむ

戯曲「弟橘媛」の桑木先生ご朗読を拜聴

して

荒波にもまれし御船え進みえずあやふきあり

さま目に浮ぶ如し

身をささげ海に入りし媛君をなみだ声にて

師は語られし

海辺に櫛流れつきて今ははや媛の御姿なきも

悲しき

熊本市企画調整局情報企画部情報企画課

折 田 豊 生

合宿地到着

富士の峯を仰ぎつつあれば相次ぎて逝きまし

し師のみおもしろのぼゆ

さはやかに夏風わたる富士と野に今年も学び

の集い開かむ

おほいなる道に連なる喜びを友らとともにと

ひたに思へり

○
み友らが詠みたる歌のうたぶみを読みてゆふ
べは夜を明かしけり

朝まだき庭にたちいでありあけの空をあふげ

ば心放たる

ほのほのとあけゆく空に富士の山あけに染ま

りて息づくごとし

北斎の赤富士さながらまなかひに神さびて立

つ山ををろがむ

この山のかなたゆきのふは*吉田大人の訪ひ

きたまひしをしみじみ思ふ

しきしまの道はかしこし我ら詠むうたのしら

べはつたなかるとも

国思ふ一つところに呼び交はしつらなり生き

むしきしまの道

あかときのしじまの中に独り立ちて富士の神

山まもりあかずも

*「吉田大人」

宮崎大学の吉田好克助教授。「日本待望論」

の訳者。三月の熊本地区合宿の講師。

山口県立下松高等学校教諭 宝 辺 矢太郎

第三班堀江良明君の名前を見つゝ

ゆくりなく名簿をめぐりながむれば見覚えの

ある名前見つけぬ

まさかとは思ひつつ名をたどりゆけばまがふ

かたなく君にてありけり

パンフレットを送りたるだけに君まさか集ひ
来たるとはつゆ思はざりき

行つてみむとこたへし君の心根をしのべばた
だに有難きかな

○ 壇上の講師に向かひ声高く「お願いします」
と言ふ学生あり

先導と仰ぎて我もつづかんと声をいだせば気
合ひみちくる

○ いつしかに場内とよもす声となり身ぬち引き
しまり心地よかりき

○ 富士裾野をゆにはとさだめ今し御製拝誦の声
をへんとしたり

そのときしも流れきたれるラッパの音は普通
科連隊消灯の合図

流れ来るラッパのしらべ惻々とみ霊しづめの
音のごとしも

師の君（小田村先生）のいまさぬ初めての合
宿なりラッパのしらべゆには流れ来

熊本県立教育センター指導主事

白濱 裕

故郷に臥し病みませる師の君に見せばやしる

けき富士の高嶺を

○ 山根清運堂委員長

ひたすらに心砕きてつとめこし君の苦勞の偲
ばるるかな

九州大大学院数理学研究科講師

高瀬 正仁

あこがれし和辻博士の弟子といふ青春の日の
日々なつかし

雨にけぶる山あひの店に師の語る沙門道元の
歌を聴きをり

師の説きし古事記のいのち受け継ぎし流れの
水のいのち思ほゆ

○ 夜の集ひにて

明日を荷ふ若きらの目に火の粉舞ひなつかし
き歌うた歌うた闇に消えゆく

海上自衛隊第2術科学校技術教官室教官

鏝 信弘

み友らの力尽してこの夏も合宿教室の開かれ
にけり

山根清運堂委員長あいさつ

数々の苦勞を越えて壇上に友は今立ちあひさ
つをする

夜久正雄先生の御講話を聞きて

幾年振りに健やかにます師の君に会ひまつり
得て嬉しかりけり

ユーモアを交へて話を始められし師の御笑顔
に心のみぬ

神話伝説歴史の区別をくり返し力を込めて説
き給ひたり

ヒメ（弟橘比売）のこころ尊く思ひて「美し
き量」を古人は添へまつりしと

心こめてふるごとぶみを誦みあぐる師のみ姿
を仰ぎまつりぬ

折々に古事記を繙き誦みあげて「こころのメ
ロデー」取り戻したし

亜細亜大学総合企画部広報課

平 慎 明 人

合宿教室に参加して
はるばると北ゆ南ゆ集ひ来て共に學ぶはうれ
しきことかな

○ 富士の山姿うるはしけふもまたみ姿仰ぎて心
はづむも

○ 集ふまでは長く学びの日々と思へどわかれの
朝をはやもむかへき

久留米大学附設高校教諭 名 和 長 泰
松田駅十九時二十五分

御殿場に向ふ列車のホームより薄明にうく黒
き富士見ゆ

○
夜の更けて外にいづれば東の雲にじませつ月
の照りたり
つみ雲の間に照る月によりそひつ木星光る夜
空涼しき

○
道広きけやき並木の葉をゆらすさは風涼し富
士のさとはも
紫の誘蛾灯より放電の鋭き音して虫の焼かる
る
見上ぐれば雨雲切れて富士の嶺にたなびく雲
の夕暁に照る

(株)日本興業銀行証券部調査課長

小 柳 志乃夫

山口秀範先輩を思ひて

導入講義のつとめをへるや先輩は足の痛みに
臥したまひき
先輩の古きみ友ははらからとまがふばかりに
みとりしたまふ
逝きませし師のみ思ひを若きらに声つまらせ
て訴へましき

あまたの責めをその身に担ひて長き日をつと
めたまひし先輩を思ふ

○ 山根清運営委員長「合宿を顧みて」

逝きませし師の君を偲び壇上に「ありがたう
ございました」と頭を下げぬ
この一年努めきたれるわが友の心偲べば涙ぐ
まし

北九州市立医療センター放射線科技師

森 田 仁 士

外に出れば空晴れわたり雲もなく並木をぬけ
て富士を仰ぎぬ

峯望む広場に立てば美はしく神さびし富士鎮
まりてあり

幾度か遠くより見し富士の峯を今眼前にあか
ずながむる

日産自動車(株)宇宙航空事業部

内 海 勝 彦

山根清運営委員長の挨拶(開会式)を聞
きて

去年の夏心くだきて準備せる友のいたづき
しのばれてきぬ

「心はもといきたり」とふ松陰先生の言の葉
語る友の頼もし

ゑにし得て集ひしわれらひたすらに國の姿を

学び合はなむと

広島防衛施設局施設部施設企画課課長

山 根 清

合宿教室開催日(八月一日)を迎へて
やうやくに合宿教室開催の今日を迎ふこと
ぞうれしき

初めての合宿地なれば御友らとこの地を幾度
訪ね来にし

○ 去年の夏挨拶たまひし師の君の逝かれしこと
を沁み沁み思ふ

富士合宿を終了して

逝きませし師の君偲びつともどもに合宿教室
営みにけり

悠久の祖国のいのちをとのたまひし師をしの
びつ合宿せしも

大空にそびえ立ちます夏の富士朝夕眺めつ合
宿せしも

有明けの月も残れる大空にそびゆる富士を巖
かに見き

昔への人もうたひし富士の嶺をながめてをれ
ば心はるるも

羽後信用金庫川口支店支店長代理

須 田 清 文
友ら集ふ合宿の地へとすすみゆけば山肌黒き

富士の峯見ゆ

星空のかたへのうすき山影に小さきあかりの
散らばれる見ゆ

深き緑あはき赤あり灰色の山肌も見ゆ道すぢ
も見ゆ

○

はるかなる千三百年のいにしへの稗田阿礼と
はいかなる大人ぞ

目から口へ耳から心にあひ渡る聡明なるとふ
稗田阿礼

阿礼さながら千三百年の時へだて古事記を読
みゆく師の君

み友らと古事の記読みゆけばおのづ調べの生
まれくるかな

阿礼大人のよみがへるまで古事の記よみゆか
む声に出しつ

○

慰霊祭の折、小田村寅二先生のことを
いかに世の定めとはいへうつし世とさかりし
師の君ひたにしのばゆ

福岡県立春日高校教諭 與 島 誠 央

山口秀範先輩の合宿導入講義

神あがりまします小田村先生を「真の勇者」
と感ぜしめたり

国憂ふあふるる思ひはせきをきり先輩のみ声

はつまりふるへる

目に見えぬ国のいのちを友みなに感ぜしめた
りこれの講義は

○

八班の諸君にささぐ、まず小林国平班長
へ

班友の明るき声の飛び交ひて君のつとめも楽
しからずや

すなほにて明るき友に囲まれし君のよろこび
思ひてうれし

松岡貴之君へ

叔父君のすすめあれども八幡より富士までの
旅つかれしと言ふ

日ふること笑顔いや増す君見つつめぐり会ひ
たることをよろこぶ

池田敏見君へ

会ひ初めし時ゆユーモア交へつつ自己紹介す
る君はたのしも

関西のなまりのままに語りゆく君の姿はほほ
ゑましかな

白石資隆君へ

朴訥の語り口調は栃木なる里のなまりかここ
ち良きかも

ふる里の人みな国を恋ふるとふ君の話にあく
がるるかな

深田恭平君へ

知識無く理解できずと言ふ君を叱り飛ばしぬ
励ますところに

短歌つくるよろこび語る君見つつ富士に集ひ
し縁かしこむ

中島健太郎君へ

父君も学ばるる集ひに君も今つらなりてあり
なんぞたふとし

この集ひかりそめならず福岡に戻りてのちも
共に学ばむ

班付の鈴木孝将君に

おだやかな笑みをたたへて研修にのぞむ姿は
見るに安らぐ

班友の問ひにも言葉選びつつ答ふる様はいと
もやさしき

○

全体感想自由発表で深田君登壇す
合宿の初日に厳しく叱れるを気落ちせしこと

君語りゆく
厳しかる叱咤に負けじと御講義に臨むや不
思議と気持ち高まる

この国に生まれしよろこびしみじみと身内に
あふるるこちせりとふ

今はただ合宿に日々にかくばかり変はりし己
れに目を見張るとふ

筑紫なる里に戻りて共に学びゆかめやくす
き縁に

熊本製粉(株) 吉 村 浩 之
国立中央青年の家にて

なつかしきへりの爆音ラッパの音木立のかな
たゆ響きわたれり

日本真空技術(株)超高真空事業部 S E 課
北 浜 道

富士登山

コピー取る我の片へに運営委員長は降雨の事
を案じ給ひぬ

散策の途中ならむに突然に耳とどろかせ雨の
降り来ぬ

折角の山行さなるに雨の為行かれざりしは残
念なるらむ

○ 短歌相互批評にて

思ひひそめ言葉を捜しつ一つ一つ友の思ひ
を思ひゆきけり

自らの思ひに適へる言葉なりと友は面はを輝
やかせけり

心働かせ友の心を思ひゆく学びの道が続けゆ
かなむ

安信住宅販売(株)新宿センター課長代理

松 吉 基 光

富士山の裾野に集ひて友どちと國のゆく末語
りつくさむ

久々に会ひにし友らの変りなき姿を喜び歩み
語らふ

○ いそがしき録音の合間にこちよき風の吹き
来てしばし憩ふも

熱を発す放送機材に囲まるる我のもとまで山
風とどきぬ

神奈川県立厚木東高校教諭 大 日 方 学

山口秀範先輩の合宿導入講義

師の君の神去りまして今ここに集ふ縁の奇し
とのたまふ

我もまた深き縁につながりてあるを思へば安
らぐ心地す

○ 「夜の集ひ」(キャンプファイヤー)の

準備の折に
リヤカーに荷物を積みて友どちと力合はせテ
ランドを行く

見上げれば青く澄みたる夏空に富士の高嶺の
美しく聳ゆ

友どちとその美しさを称へつつ歩めば軽しり
ヤカーの荷も

(株)日本教文社第二編集部 坂 本 芳 明

○ 体育館でバスケットボールに興じし折に
班友の動きすばやしわれもまたまけじとひた
に走りまはりぬ

○ 夜久先生のご講話をききて

老体をおして古事記を語りたまふ師のみこと
ばのありがたきかな

○ 合宿を終へて

いにしへゆつたへきたれるまごころの道を友
らとふみてゆかまし

熊本地方法務局大津出張所 徳 田 恒 稔
羽田空港へ向かふ飛行機にて

雲まとひ遥かにつらなる山なみを背にして立
てる富士の嶺見ゆ

○ リーダー棟近くで孕める猫を見て

孕みたる猫をば見れば熊本に残せし妻の姿浮
かびく

私の実家にゐる妻に電話す
子供らも元氣にゐるとふ妻の声に微笑みたた
へる顔の浮かびく

薄闇に浮かぶ富士を見て
おどろおどろ薄闇に浮かぶ富士の山かしこ恐き姿が

我に迫りく

胸張りて語りし友の姿見て我が心にも力湧き
出づ

日本青年協議会学生局事務局長

鈴木考将

食堂にて大日方君と

家の方は大丈夫かと問ひくるる友の心の有難
きかな

五合目をめざす行手に雲たちこめて行手さへ
レクリエーションの折

雨降りて五合目登山を中止し公園に止ま
りし時に

(社)国民文化研究会会員 土井 郁 磨

講義より続きし頭痛も消え失せぬ友らと語ら
ひ夜半に及べば

友ら皆よろこぶ顔を楽しみに一年準備つづけ
しものを

気合入れて来たんですよと後輩が新しきくつ
指さしていふ

(株)志門塾講師 三林 浩行

赤きはだ見せた富士山夏の朝近く大きくあは
ぎみるなり

ありし日の御姿ビデオに映されて背筋伸ばし
て心して聴く

伊藤たかさんの直訴状を読み
御命をなげうつるとも天皇を守らむとする言
の葉胸うつ

福岡県労働部雇用保険課徴収係

古川 広 治

昨夜の酔ひの覚めぬまま合宿地へ向ふ
合宿の運営かそれとも班長かと重い気持ちで
合宿地へ向ふ

「お元気でがんばって下さい」と若きらに師
の君やさしく語りますかも

小柳先生の御講義をうけての深田君の感
想をさきし折

○ 三林浩行兄の「青年体験発表」

松陰を知るなら草莽崛起せよと友は語りて話
を終へにき

悠久の歴史につらなるこの国の理念にかへれ
と師はのたまひし

国武忠彦先生の御講義のをりに

(社)国民文化研究会 亀 井 正 弘

豪雨止みもやに包まる富士山にひぐらしの声
かすかに聞こゆ

学風のまが正さむと合宿をつづけこれれしみ
こころ偲ばる

富士山を見しをりに

初めての富士の登山を楽しみにバスで向ふも
雨降りやまず

澤 部 和 道

○ 三林浩行兄の「青年体験発表」

雲一つかかることなく大空にそびゆる富士の
姿雄々しき

最後まで皆と一緒に合宿をもちり立てたくも仕
事ではやむなし

合宿地に寄せられた歌

元尚綱学園 監事 徳 永 正 巳

はるかに富士合宿の成功を祈りて

(八月一日)

小田村の大人の遺せし志継ぎて行かまし夏の
つどひに

ますらをの留め置かれし大和魂後の世までも
守り伝へむ

今年またむなしく病に臥す身なれど心ははる
か友等と集ふ

をちこちゆ集ひ来し友少なけれどよりすぐら
れて馳せ来たるらむ

おのがじし力の限り誘ひけむ珠玉の友ぞこれ
等若人

来年の阿蘇合宿の核として育ち給へよこれの
若人

若人の武者振ひにも似てしきりなる樹間にひ
びくくま蟬の声

あとがき

吹く風にも秋の深まりが感じられる今日この頃ですが、皆さんにはその後如何お過ごしでしょうか。富士山麓「国立中央青年の家」で共に学び、語り合った「合宿教室」から早や二ヶ月半が過ぎやうとしてをります。このたびやうやくこの『感想文集』を皆さんのお手許にお届け出来る運びになりました。この『感想文集』は、「合宿教室」の最後に“走り書き”していただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第三回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のもった文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは神経を使い、時間のかかる作業ですが、皆さんがお書きになった生々しい言葉に心打たれ、同時に皆さんの緊張したあの時のお姿も思ひ出されました。それぞれの皆さんに編集していただいた編集方針は以下の通りです。

(一)「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ただし、ページ数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されておると思はれるところを摘録しました。文章の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちに辿りながら、原文のニュアンスが損なはれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

(二)「短歌」について

合宿では三回にわたって短歌をつくりましたが、第一回及び第二回のもは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の「短歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくっていただいた第三回の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この『感想文集』作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々のご協力を得ました。お忙しいお仕事の中で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力いただきました磯貝保博、鏗、信弘、平植明人、小柳志

乃夫、大日方 学、秋山信之、横畑雄基の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この『感想文集』の「あらまし」作成および第一回目の短歌の編集にご尽力いただいた国民文化研究会会員の諸氏に厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は中尾曜子さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上がった『感想文集』を、ご精読下さるやう切願してやみません。

読み進むにつれて、「合宿教室」の四泊五日間の様々な経験が鮮明に甦ってくる事と思ひます。二ヶ月半前に得た感動を単なる「思ひ出」に終らせることなく、起居を共にした真に語りうる友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に祈つてをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長や班付の方々、班友に一筆御便りを差し上げていただきたくお願ひ致します。

(原川 猛雄記)

〔資料〕

第四十四回 “合宿教室（富士）” 感想文集

非売品

平成十一年十月三十日発行

編集兼発行者

社団法人 国民文化研究会

理事長 上村和男

編集委員 國武忠彦・原川猛雄

土井郁磨・北浜道

東京都渋谷区東一十三一―四〇二号

〒一五〇―〇〇一―

電話 〇三―五四六八―六三三〇

FAX 〇三―五四六八―一四七〇

